

○先鋒記節略ニ云、松平和泉守、越前國內ニ領地有之處、主人勤王可仕分明候迄、越前へ相預候事、萩原清左衛門、小林仙之助、本多邦之助、青山峰之助在東ニ付、同上。

松平和泉守 青山峰之助

右兩人之領地、越前國內ニ有之處、當分當藩へ御預ケ被成候、兩主人、今般被 仰出之趣、違背無御座候旨申越候ハ、先規之通引渡候様、御書付ヲ以、御達之趣奉拜承候、右御請申上候、以上。

越前少將内

二月廿一日

松平 備後
酒井 外記

御兩卿 參謀 御用掛御中

本多邦之助 萩原清左衛門 小林仙之丞

右三人、知行所越前國內ニ有之處、當分當藩へ御預ケ被成候、當人今般被 仰出之趣、違背無御座旨申越候ハ、夫々引渡候様、御書付ヲ以御達之趣奉拜承候、右御請申上候、以上。

越前少將内

二月廿一日

松平 備後
酒井 外記

御兩卿 參謀 御用掛御中以上北陸道先鋒記
松平、茂昭家記

主人松平和泉守、越前國內へ領地有之處、彌以勤 王可仕旨分明相知候迄、越前侯へ御預ケ相成、尤本領安堵之儀ハ、京都ヨリ 御沙汰可有御座候、右之段、主人へ早々註進仕候様被 仰達奉畏候、依之、御請書差上申候、以上。

松平和泉守家來

辰二月

相澤武右衛門

高倉三位様
四條大夫様 御用掛御中

○主人青山峰之助、越前國內へ領地有之處。以下上文ニ同シ

青山峰之助家來

辰二月

上田喜一郎

高倉三位様
四條大夫様 御用掛御中

○主人本多邦之輔在東ニ付、當人上京、彌以勤 王可仕候迄、領地越前侯へ御預ケニ相成候、本領安堵之儀ハ、從京都 御沙汰可有御座候、尙御趣意柄之儀ハ、越前侯へ御達之旨相同、領内之向へ布告可仕、尤本文之次第、主人へ早々可申達段奉畏候、右御請奉申上候、以上。

本多邦之助家來

辰二月

鈴木多仁右衛門

高倉三位様

復古外記 北陸道戰記 第二 明治元年二月二十日

四條 大夫 様 御用掛中道先鋒記

○以上三條、竝ニ上申ノ日ヲ俟ス。

○督府、小笠原長守、金森近明ニ命シテ、速ニ京師ニ至ラシム。

○小笠原長守へ達書

歸服之輩、世子重臣ヲ以人質上京可有之處、在國之向ハ當人馳登、窺 天氣勤 王之上ハ、人質御免可有之間、速ニ上京可被致候事。

辰 二月

○ 左衛門佐儀、早々上京可仕旨、御沙汰之趣奉畏候、來三月上旬上京可仕候、此段御請奉申上候、以上。

小笠原左衛門佐内

二月 廿二日

脇屋 右馬介

以上小笠原長守家記

○ 上京日限申上、

今般上京之儀、今日ヨリ七日ヲ限、支度相整發途仕度、此段奉申上候、以上。

二月 廿日

金森 左京

北陸道先鋒記

○參謀小林隆麟、福井ニ至ル、肥前藩兵八百五十人、モ亦至ル。北征紀事

二十一日、督府、假參謀調子某、三太夫前田某、央保田某、本ヲ罷ム。

○北征紀事ニ云、二月廿一日、調子三太夫、前田央、保田太仲假參謀ヲ免ス。

○會計裁判所、二督ニ移牒シ、總督以下ノ俸給等、北陸道舊代官管地ノ金穀ヲ以テ、之ニ充テシム。

今般出進之面々、支度金竝月給、別紙之通御規則被 仰出候間、北陸道筋代官所殘穀金取立之内ヲ以、仕拂可有之事。

二月

太政官 會計裁判所

高倉 三位 滋

四條 大夫 滋 執事中

猶以、徵士參謀竝會計方出役之分ハ、於當方藩々へ渡濟相成候、尤三月分ヨリ之月給ハ、御規則通出張先ニテ本文同様仕拂之事。北陸道先鋒記

○別紙規則書ハ、之ヲ俟ス。

二十二日、督府、土井利恒ニ命シテ、速ニ京師ニ至ラシム。

今般能登守儀、早々上京可仕旨、御達之趣奉拜承候、依之、來月中旬上京可仕候、此段御請奉申上候、以上。

二月 廿二日

土井能登守家來

奥田乙右衛門

北陸道先鋒記

○按スルニ、利恒、三月二十日ヲ以テ封邑ヲ發シ、二十五日京師ニ至ル。

復古外記 北陸道戰記 第二 明治元年二月二十一・二十二日

二十三日、參謀津田信弘、福井ニ至ル。北征紀事
二十四日、督府、小笠原某、彌右衛門、島田某、祐三郎、並ニ長門藩士、宮部某、六右衛門、柳澤某、勝次郎、並ニ貫籍不詳ヲ以テ、監察ト爲ス、又軍中規約ヲ定ム。

長州藩 小笠原彌右衛門
島田祐三郎

御本陣附監察被 仰付候間、諸事取締リ、異條見聞之次第モ候ハ、早々可被中達之事。

○ 此度、私儀 御軍旅中監察被 仰付、重々難在奉存候得共、不才愚昧之者ニ御座候故、右様之大任相勤候儀、難出來ト奉存候、
右 御沙汰之趣ニテハ、御側御守衛之儀御不用共ニハ、無御座候哉、左候得ハ、私共素ヨリ 御守衛而已ニ罷越候様被申付候間、若御不用共ニ御座候得ハ、何時御差歸シ相成候テモ、於身ニテハ不苦奉存候、加様申出候得ハ、如何ニモ御座候得トモ、全御供不仕ト申ニハ無御座候、御守衛而已ニテ御遣方被成下候ハ、難有仕合奉存候、何モ不惡様 御聞濟被成下度奉存候、此段奉願上候、以上。

二月廿五日 宮部 六右衛門
柳澤勝次郎

○ 宮部某等二人ニ、監察ヲ命スルノ宣達書ハ之ヲ佚ス、本件ノ指令モ亦見ル所ナシ。

一行軍之節、毎日朝卯ノ半刻支度、辰ノ刻出立之事、但、前軍ヨリ順々繰出可申事、

- 一 驛々人馬繼立等之節、軍列不亂様、其手々々、隊長ヨリ指揮可有之事、
- 一 晝休場所混雜無之様、支度仕舞次第、前軍ヨリ順々出立之事、
- 一 泊宿著陣之上、酉ノ刻以後一切外出ヲ禁ス、
- 一 斥候探搜ハ先陣之專務タルヘキ事、
- 一 非常急報ハ先陣ヨリ二陣、々々ヨリ中陣ト順次轉報可有之事、中陣ヨリ下知等之節モ可爲同様事、
- 一 各營往來ハ勿論、一陣内タリトモ、印鑑引合無之者ハ、營間出入堅禁制之事、
- 一 每陣若干人、已上刻限ヲ定メ、交番巡邏不可怠、但、夜陰竝地理不要害之ヶ所ハ、格別可爲嚴重事、
- 一 異變有之節ハ、本陣ニ具立候間、早速諸隊ヘ同馳參リ可申事、
- 但、出火之節ハ、其手々々人数ヲ纏置、本陣之差圖ヲ可受事、
- 一 京地出發前、太政官ヘ達シ之人負、竝繼人馬高、行キ先キ、宿驛印鑑相照シ、書付差置可罷通事、
- 但、右定員之外ハ一切可爲自分拂事。

二月以上北陸道先鋒記

二十五日、内國事務局、二督ニ移書シテ、其職掌ヲ諭示ス。

輕暖之時令 聖上益御機嫌克不斜恐悅候、抑令般先鋒兼鎮撫之職務、御蒙リニ付テハ、第一巢窟ヘ進入スルヲ專一トス、依テ其路次諸大名、其他方向ヲ定メ、徳川遺領ニテ御預ニ相成分ハ、假ニ縣令ヲ据ヘ、現在入庫金穀ハ勿論、收納被致租稅ヲ取調ラヘ、其軍費ニ當、残り金穀ハ太政官會計局ニ可附出之旨、嚴重締リテ着ケ、其段内國事務局ヘ御達シ置迄之御職務ト存候間、此段御心得迄御達シ申候也。

二月廿五日

二白、追々御進軍ニ付テハ、軍事御事務ト相成候間、民政向之義ハ、内國事務局ヨリ取扱候事モ可有之候間、是迄御取扱

之分承置度候事、

一於總裁局モ同意ニ候間、此段申入候事、
一布令兩途ニ相成候テハ、不都合ニ候間、御懸念之筋ハ悉ク御示可給候、過日北陸道之義ハ、御委任相成候得共、今度先鋒之義、更被仰蒙候間、如右申入候事。

内國事務局

高倉三位 濼
四條大夫 濼北陸道先鋒記

二十六日、督府、饋餉ノ費額ヲ更定シ、之ヲ沿道各驛ニ布告ス、又本府ノ印鑑ヲ各驛ニ頒示シ、官軍ノ供帳、必ス之ヲ照シテ後措辨セシム。

○沿道諸藩へ達書

別紙二通之通、被 仰出候間、御國中宿驛不洩様、御布告有之度存候。

督府 參 謀

○別紙二通

覺、

泊 白米四合

金壹朱

晝支度

白米二合

錢百文

右之旨、兼テ太政官ヨリ御達ニ相成候得共、向後改、左之通取極候條、宿驛不洩様通達可被致候、

泊 白米七合

金壹朱

晝支度

茶代百文

右泊所ニテ、腰兵糧用意、晝休處ハ眞之素茶手當可有之候事。

二月

北陸道 督 府

○

宿驛休泊人馬繼立等、左之印鑑所持無之輩ハ、可爲自分拂候間、此旨通達可被致候。

慶應四年戊辰何月

何州

印

休泊何百人

鑑

繼人足何百人

二月

繼馬何匹

二月

北陸道 督

北陸道先鋒記
井伊直安家記

○麾下諸藩兵へ達書二通

別紙上ノ達書之通、北陸道諸々へ御達ニ相成候間、此旨被相心得、從辛又者ニ至迄、心得違無之様可被示合候事、但、別紙印鑑ハ、其手々々之小荷駄方へ壹枚ツ、相渡置候事。

督府 參 謀

○別紙印鑑相渡候條、宿々印影引合セ、休泊人足繼立等、印鑑紙面通被取計、別ニ休泊何百人、人馬繼立何程、印鑑通相違無之旨、小書付致シ、宿々へ被留置候得ハ、跡仕舞會計方書付引揚、取計方可致事。

二月

督府 參 謀

以上北陸道先鋒記
淺野長勳家記

○別紙印鑑ハ原記ヲ佚ス、蓋上ニ載スル者ト同一ナラン。

二十八日、二督、福井ヲ發シ、金津驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、二月廿八日、越前已ニ定ル、福井ヲ發シ、金津ニ次ス。

二十九日、二督、金津驛ヲ發シ、大聖寺前田利ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、二月廿九日、大聖寺ニ次ス。

晦日、二督、大聖寺ヲ發シ、小松驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、二月三十日、小松ニ次ス。

是月、督府、井伊直安右京亮、奥板藩主ヲ召シ、且假ニ其質ヲ徵ス。

○井伊直安へ達書

此度 勅書御請書被差上候ニ付テハ、急速御主人へ御沙汰之條被爲在候間、急飛ヲ以テ、其旨被相傳御歸國有之、御兩卿御行先へ早々御出張可有之事、右往返御歸國日限請書、即今可被差上置候事、且御歸國之上、御兩卿於御出先御沙汰之條、被差承候迄、人質差上可被置候事。

辰 二月

御兩卿隨從

參 謀

職

井伊直安家記

○三月十六日、直安、召ニ應シテ行營ニ詣ル、參看スヘシ。

○督府、敦賀舊箱館會所ノ物品ヲ發シテ、敦賀郡越前ノ窮民ヲ賑恤ス。

○辦事へ上申書

勅使北陸道御發向之節、右京大夫領分越前敦賀表御逗留中、元箱館方會所ニ有之候米、並松前產物之品々、別紙御書付之通、厚 思召ヲ以、敦賀郡中農商共へ爲御救被下置、窮民共得ト相糺違亂不仕様、配當方精々入念取計可申旨、長州參謀職小笠原彌右衛門ヲ以、彼地家來之者へ被 仰渡候段申越、於右京大夫 御趣意之趣奉畏難有仕合奉存候、右御禮、以使者申上候、以上。

酒井右京大夫使者

紅林善左衛門

二月十七日

○別紙

覺、

米二千八百七俵 内五斗入七百二十俵

鯁四千二百七箇

白子六百廿四本

ハ粕九百五十六本 以上酒井忠

祿家記

三月朔日、二督、小松驛ヲ發シ、松任驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月一日、小松ヲ發シ、松任ニ次ス。

二日、二督、松任驛ヲ發シ、金澤前田慶寧ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、二月二日、金澤ニ著ス。

○舊幕府、逋竄ノ徒及ヒ會津、桑名人等、越後地方ニ潜匿スルノ聞アルヲ以テ、督府、加賀、越後諸藩ニ令シテ、嚴ニ之ヲ緝捕セシム。

○加賀、越後諸藩へ達書

德川簾下並會、桑之者共、往々潛匿之間へモ有之候間、無油斷吟味ヲ遂ケ召捕可申出、万一隠シ候置族於有之ハ可爲同罪、尤歸順之者ハ寛大之御處置可有之候間、其段可届出事、右之趣、道中筋宿驛等ハ勿論、國中不洩様可被示置候事。

三月

北陸道 督

北陸道先鋒記、金澤藩記、溝口直正、井伊直安家記

四日、督府、參謀以下及ヒ安藝、肥前、小濱三藩兵ヲ慰勞ス。

○北陸道先鋒記ニ云、三月四日申刻ヨリ

參謀 兩人 酒井十之丞 若酒井直江 和田耕平

肥原 次郎兵衛 渡邊善大夫 八並次郎助

右之面々、於御前御酒被下之、

一肥前人數中へ 酒貳石 干鯛四籠八千五百入

一若州人數中へ 酒壹石 干鯛貳籠四千入

一藝州人數中へ 酒五斗 干鯛壹籠千六百入

右之通、夫々隊長共へ以目錄相渡被下之、

一木皿盛 會計方 貳人 酒 金穀方 三人

右之面々、休所へ被下之。

五日、軍防局、書ヲ二督ニ致シ、速ニ廟算ヲ遵奉シテ、以テ關東戡定ノ功ヲ奏セシム。

彌御勇健珍重存候、然ハ關東御平定專要之事ニ付、早々御廟算通、御取結被爲在候様存候、仍早々如此略文被免候也。

三月五日

肩印御命次第可差出候事、

軍防局

高倉 三位 殿

四條 大夫 殿北陸道先鋒記

○督府、加賀、越中、越後諸藩及ヒ鯖江藩ニ令シ、藩主ノ王事ニ勤メント欲スル者ハ、躬カラ京師及ヒ行營ニ詣テ、其情ヲ陳シ、且管内ノ簿籍ヲ上リ、窮民及ヒ忠孝義烈者ヲ錄上シ、舊幕府領地ノ租額等ヲ按檢シテ、之ヲ具申セシム。

○加賀高田、大聖寺、富山、鯖江四藩へ達書

一御趣意之旨承服異議無之候ハ、當主參營、直ニ御請可有之事、

一家領高並新開地面、戸數、水帳、地圖等、夫々取調、太政官へ可差出候事、但、領内寺社領同斷、

一領内無告之窮民ハ勿論、忠孝義烈之族ハ、精々穿鑿、前條同様可取計事、

一德川領預之箇所租稅、此迄未納、皆納、並殘金穀共精細取約、早急本陣へ可申出事。但、國內德川代官支配地同斷之事。

三月

北陸道 督

北陸道先鋒記、金澤藩記

○本條、宣達ノ日ヲ佚ス、加賀藩ノ奉答書ヲ上ルハ、本日ニ在ルヲ以テ、姑ク此ニ収ム。

一御趣意之旨云々、此儀、依所勞重臣ヲ以、御請奉申上候、
一家領高云々、此儀、急速取調之上可奉指上候。
一領内無告之窮民云々、此儀、急速取調之上可奉指上候、
一德川領預之ヶ所云々、此儀、急速取調之上可奉指上候。○中

三月五日

御兩卿様 參謀 御用掛御中北陸道先鋒記
金澤藩記

加賀宰相中將内

奥村河内守書判

○ 御趣意之旨云々、此儀、主人下總守參營御請奉申上候、
一家領高云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、
一領内無告之窮民云々、此儀、急速取調之上可奉申上候、
一德川領預之箇所云々、此儀、德川料預之箇所無御座候、
右之通、御請奉申上候、以上。

三月七日

御兩卿様 參謀 御用掛リ 御中間部詮
道家記

間部下總守家來

植田志津摩

○ 御趣意之旨云々、此儀、參營仕御請奉申上候、
一家領高云々、此儀、急速取調之上可奉申上候、
一領内無告之窮民云々、此儀、急速取調之上可奉申上候、
一德川領預之箇所云々、此儀、德川領預リ之箇所モ、代官支配地無御座候、
右御書付之趣奉畏候、以上。

三月十日

御兩卿様 參謀 御用掛 御中北陸道
先鋒記

前田稠松家來

戸田青海書判

○ 御趣意之旨云々、此御箇條、奉拜承候事、
一家領高云々、此御箇條、寺社領共取調可奉指出候事、
一領内無告之窮民云々、此御箇條、奉拜承候事、
一德川領預之ヶ所云々、此御箇條、奉拜承取調可奉申上候事。
右御箇條、被 仰渡之趣奉拜承候ニ付、御請書如此御座候、以上。

三月十七日

榊原式部大輔内

瀧見九郎兵衛

直臣印

伊藤彌總

正温印

御兩卿様 參謀 御用掛御中北陸道先鋒記
榊原政敬家記

○ 御趣意之旨云々、此儀、當分依所勞、重臣ヲ以不取敢御請奉申上候、
一家領高云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、
一領内無告之窮民云々、此儀、急速取調之上可奉申上候、
一德川領預之箇所云々、此儀、德川料預リ之箇所無御座候。○中

三月

前田飛驒守内

前田主計

花押

○本條、上申ノ日ヲ佚ス。

○十六日、越後諸藩^{高田藩}ヲ除ク、^へ達書口達、

- 一 御趣意之旨承服異議無之候ハ、主人直ニ上京御請可有之候事、
- 一家領高竝新開地面、戸數、水帳、地圖等夫々取調、太政官へ可差出候事、但、領内寺社領同斷、
- 一 領内無告之窮民ハ勿論、忠孝義烈之族ハ精々穿鑿、前條同様可取計事、
- 一 德川領預リ之箇所租稅、是迄未納、皆納、並殘金穀共取約、早急 太政官へ可申出事。

成辰 三月

北陸道 督

井伊直安家記
堀之美家記

- 一 御趣意之旨云々、此儀、早々上京御請申上候様可仕候、
- 一 德川領預之箇所云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、
- 右條々御請奉申上候、以上。

三月十七日

溝口誠之進内 溝口半兵衛 書判

高倉 三位 殿
四條 大夫 殿

參謀 御用掛 御中

- 御趣意之旨云々、此御箇條、奉拜承候事、
- 一家領高云々、此御箇條、寺社領共取調、駿河守上京之節差出候事、
- 一 領内無告之窮民云々、此御箇條、德川領無御座候事、
- 右御箇條、被 仰渡之趣奉拜承候ニ付、御請書如此御座候、以上。

三月十七日

牧野駿河守家來 植田十兵衛 書判

御兩卿様 參謀 御中
御用掛

- 十七日上申書
- 一 御趣意之旨云々、此御箇條、奉拜承候事。_{以下、上文}

堀左京亮内 板垣正藏 書判

野口彦兵衛 書判

- 十七日上申書
- 一 御趣意之旨云々、此御箇條、奉拜承候事。_{以下、上文}

牧野伊勢守内 神戸十郎右衛門 書判

一御趣意之旨云々、此ヶ條奉拜承候、一家領高云々、此ヶ條、寺社領共取調、紀伊守上京之節差上候事、
一領内無告之窮民云々、此ヶ條奉拜承候、一徳川領預之箇所云々、此ヶ條徳川領無御座候、
右御箇條、以御書付被 仰渡之趣奉拜承候、依之、御請書奉差上候、恐惶敬白。

三月十七日

内藤紀伊守家來

美濃部

貢 書判

御兩卿様 御用掛 御中 以上北陸道先鋒記

一家領高云々、此儀、奉畏取調右、京亮上京之節、太政官へ差上可申候、

但、領内寺社領同斷、此義、前條同様取調差上可申候、

一領内無告之窮民々々、此儀、精々取調、前條之通計可申候、

一徳川領預之箇所云々、此義、徳川領無之候、

右之御箇條、以 御書付被 仰渡之趣奉拜承候、依之、御請書奉差上候、恐惶謹言。

三月十七日

井伊右京亮家來

松下源左衛門

御兩卿様 御用掛 御中 井伊直安家記

一御趣意之旨云々、此御ヶ條奉拜承候、一家領高云々、此御箇條取調可奉申上候、但、寺社領無御座候、

一領内無告之窮民云々、此御ヶ條取調可奉申上候、

一徳川領預之箇所云々、此御箇條、領内無御座候、

右御達書之趣奉畏候、此段御請奉申上候、以上。

三月十七日

柳澤伊勢守家來

加用 出

石 書判

御兩卿様 御用掛 御中

一御趣意之旨云々、此儀、早々上京仕候様取計可申奉存候、一家領高云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、

一領内無告之窮民云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、

一徳川領預之箇所云々、此儀、急速取調之上可奉差上候、

右條々御請奉申上候、以上。

三月十八日

柳澤彰太郎内

柳澤隼之輔

書判

高倉三位様 御用掛 御中
四條大夫様 御用掛 御中

一家領高竝云々、此儀奉畏、取調右京亮上京之節、太政官へ差上可申候、

但、領内云々、此儀、領内寺社領無候座候、

一領内無告之窮民云々、此儀、精々取調前條之通取計可申候、

一徳川領預之箇所云々、此儀、徳川領無御座候、

右御箇條、以 御書付被 仰渡之趣奉拜承候、依之、御請書奉差上候、恐惶謹言。

三月十七日

堀右京亮家來

山田秀助

御兩卿様 御用掛 御中

一御趣意之旨云々、此御ケ條、奉拜承候事、一家領高云々、此御箇條、寺社領共取調、日向守上京之節差出候事、
一領内無告之窮民云々、此御箇條奉拜承候事、一徳川領預之箇所云々、此御ケ條、徳川領無御座候事、
右御箇條、被仰渡之趣奉拜承候ニ付、御請書如此御座候、以上。

三月

松平日向守内

佐治恕

輔書判

御兩卿 參謀 御用掛 御中以上北陸道先鋒記

○本條、上申ノ日ヲ佚ス。

六日、東征大總督、駿府ニ次シ、東海、東山、北陸三道先鋒總督ニ令シ、十五日ヲ期シテ江戸城ヲ進討セシム。

○按スルニ、大總督、二督ニ江戸城進討ヲ令スルノ移牒ハ、原記ヲ佚ス、蓋、東山道總督ニ令スル者ト同文ナラン、今、東山道總督ニ令スル者ヲ左ニ掲ク。

○江戸地進入之儀、今日軍議ニテ三道共ニ、來ル十五日進入之御決定ニ候、於東山道モ右御心得期限相違不仕様、夫々御手合セ可有之候、

一肩印之事、於當道ハ悉右之肩ニ附有之候間、尙右之趣ハ、

朝廷へ御申上可然候、此段、

大總督宮被仰出候間申入候也。

三月六日

二白、別紙一通進入候、御落手可給候。○上

大總督府

參

謀

岸倉大夫殿
同 八千九殿

○別紙

一江城進擊期限、來十五日御決定之事、

一攻撃戰爭等之儀ハ、先鋒總督へ御委任ハ、勿論候事、

一若旗下或ハ諸藩ヨリ慶喜歎願儀杯申出候共、先鋒ニテハ、決テ御取上有之間敷、若可然實行モ相立有之候ハ、大總督府

へ申出候様可被相答、歎願等ニハ、無頓着ニテ、學城拔巢之策速ニ御配運之事。

大總督府

參

謀

東征總督府叢記
東山道總督府叢紙

○二督、金澤城ヲ檢ス。

○北征紀事ニ云、三月六日、金澤城内ヲ點檢ス、參謀モ亦從フ。

○是ヨリ先、舊幕府、加賀藩ヲシテ能登、羽咋、鹿島、鳳至、珠洲四郡ノ地ヲ管セシム、是ニ至リ督府、更ニ本藩ニ命シテ、假ニ本地及ヒ土方某兼三郎、舊旗下士、時ニ江戸ニ在リノ采邑、能登ニ在ル者ヲ管セシメ、越前藩ニ、舊代官管地ノ越前ニ在ル者ヲ管セシム、又土方某ニ命シテ、速ニ京師ニ至ラシム。

高合一萬四千三百六十八石九斗三升七合四勺五才

能登國

羽咋郡敷浪村

鹿島郡川田村等六十二ヶ村

鳳至郡鹿島村

珠洲郡眞脇村

右、從前德川家ヨリ被預來候處、當分其藩へ可被預置旨被 仰出候間、諸事取締撫恤方可被取計候、猶追々、太政官ヨリ御
差圖可有之間、其旨可被相心得候、但、去卯年貢未納金上納方之儀ハ、會計局へ可被申談候。

辰 三月

北陸道 督 府

加賀宰相中將殿 北陸道先鋒記
金澤藩記

加賀宰相中將殿 留守居へ

能登國內高壹万四千石餘天領之分、今般當藩へ御預地被 仰出候付テハ、去卯年貢金納壹万五千兩未納之分、申立之通、當
今半高七千五百兩可差出、残り半高七千五百兩ハ、御指圖次第上納可有之事、
一當辰年貢租稅取箇之儀ハ、太政官へ可伺出事。

辰 三月

會計局 金澤藩記

○加賀藩へ達書

土方兼三郎

右本人在東ニ付、朝旨遵奉勤 王實跡相顯候迄、同人采地、當分其藉へ可被預置旨被 仰出間、此旨可被相心得事、但
家來在住之者共、追テ御沙汰有之候迄ハ、此迄同様心得可罷在旨、相達可被申事。

辰 三月

北陸道 督 府

北陸道先鋒記
金澤藩記

能登國之内、只今迄德川家ヨリ之預所、今度御改之上、重テ私藩へ御預ケ就被 仰付候、昨年德川家ヨリ預ケ高ニ申渡候、

以前仕來之通、諸事相心得申候、此段御届申上置候、以上。

三月

加賀宰相中將

金澤藩記

○本條、上申ノ日ヲ俟ス。

○請取申金子之事、

合金七千五百兩也 但、濠分銀六千五百兩、
壹朱銀千兩 外金七千五百兩 御指圖次第上納有之分、

都合金壹万五千兩 納高

右ハ能登國內高壹万四千石餘 天領之分、今般其藩へ御預地被 仰出候ニ付テハ、去卯年貢納金壹万五千兩未納之内、書
面金之通被相納候ヲ、正ニ請取申候、重テ代請取手形ヲ以、御勘定仕上拂可被相立者也。

慶應四辰年三月七日

北陸道御總督府會計方

國枝岩太郎

加賀宰相中將殿内 關屋佐左衛門 金澤藩記

○本日達書

越前國內ニテ代官支配地之儀ハ、當分其藩へ取締向被 仰付候條、其旨可被相心得候。

三月

北陸道 督 府

越前少將殿 北陸道先鋒記
松平茂昭家譜

○此度 朝命之御趣意奉畏入候ニ付テハ、急務之御用モ可被爲在間、其旨、急飛ヲ以主人兼三郎へ相傳、急速上京勤 王可有

之様ト之事、

右住返登京之日限御請書、即今可差上置事、此日限、四月中御猶豫奉願候、
右被 仰渡之趣奉畏候、依之、御請上之申候、以上。

辰 三月 六日

土方兼三郎家來

小 原 直 江書判
城山與右衛門書判

御總督 御兩卿様御隨從 參謀御職中北陸道先鋒記

七日、二督、將サニ軍ヲ高田榑原政敬ニ進メントス、因テ越後諸藩ニ令シ、重臣ヲ高田ニ出シテ、
以テ之ヲ迎ヘシム、又沿道諸藩ニ令シテ、行營及ヒ驛邑ヲ警守セシム。

○北征紀事ニ云、三月七日、越後諸藩へ檄ヲ移シテ云、總督、近日高田ニ至ル、諸藩重臣ヲシテ會シテ之レヲ待テ。

○檄文ハ原記ヲ佚ス。

○沿道諸藩へ達書

今度 御總督御通行之藩々、其領内御宿營中御本陣御門之内外、且宿驛取締向番衛等之儀、嚴重ニ被申付候様被 仰出候
間、此段可被相心得候事。

三月

北陸道督府

執

事

北陸道先鋒記

○間部詮道、召ニ應シテ行營ニ詣ル、督府、命シテ速ニ京師ニ至ラシメ、其質ヲ還付ス。

○北征紀事ニ云、三月七日、間部下總守國ニ歸ル、東海道荒井驛ニテ、大總督府ニ奉スル所ノ書ヲ上ル、其略云フ、徳川慶喜、
朝廷ヲ欺キ兵端ヲ禁闕ノ下ニ開キ、赫怒親征ノ舉ニ至ル、恐懼ノ至リニ堪ヘス、臣、素ヨリ王臣王事ニ勤勞スルノ外、豈他

念アラシヤ、謹テ書ヲ奉スト、之レニ因ツテ、向キニ献スル所ノ質五十嵐亮助ヲ放還ス。

○間部詮道家記ニ云、三月四日、東京ヨリ在所表へ歸著、同五日、勅使御行先へ發足、七日加州金澤勅使御本陣へ罷出、勅
使へ拜謁、御主意之趣奉畏候旨申述ル、高倉敏、左之通御達シ、
今般早速行先へ被罷出感佩ニ存ル、尙急上京、愈勤 王可被致旨、
同日、參謀職ヨリ左之通、家來へ御達シ、

今般御主人御受書被差上候ニ付テハ、越前守様へ御預ケ相成居候人質五十嵐亮助、下總守様衆へ御引渡可申旨、早打ヲ
以、越前守様へ御沙汰相成候ニ付、御同所へ御使者被差向、人質御申請可被成旨、
下總守様御上京期限、御請書可被差上旨、被中間候ニ付、左之通差出之、

今般下總守御請書奉差上候ニ付テハ、急速上京、愈勤 王可仕旨奉畏、四月上旬迄ニ上京可仕候、右御請奉申上候、以上。

間部下總守家來

植田 志 津 摩

三月 七日

同日、爲證人差出置候五十嵐亮助、福井ヨリ御引渡有之引取申候、同十二日、加州金澤ヨリ歸城仕候。

○按スルニ、詮道、晦日ヲ以テ封邑ヲ發シ、四月五日、京師ニ至ル。

○越前藩へ達書

間部下總守

同藩人質、兼テ其藩へ被預置候處、本人參營直ニ御請有之候ニ付、右人質、本藩へ可被差戻旨被 仰出間、其旨可被取計候、
但、人質預リ御請書ハ、追テ 太政官ヨリ御差戻シ可有之候事。

三月

北陸道

督府

執

事

大井 彌 十 郎 殿

千本彌三郎殿北陸道先鋒記

間部下總守

同藩人質、兼テ當藩へ御預ケ之處、本人參營直ニ御請有之候ニ付、右人質、本藩へ可差戻旨被仰出候間、此段可取計旨、御達之趣奉拜承取計申候、右御請申上候、以上。

但、人質預リ御請書ハ、追テ太政官ヨリ御差戻可有之旨奉拜承候事。

三月

越前少將内

大井彌十郎
千本彌三郎

松平茂昭家譜

○本條、上申ノ口ヲ伏ス。

復古外記 北陸道戰記 第二終

元修史局掌記 豊原資清纂輯

復古外記

稿本

北陸道戰記 第三

自明治元年三月八日
至同晦日

三月八日、二督、金澤ヲ發シ、今石動驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月八日金澤ヲ發シ、越中今石動ニ次ス。

○是ヨリ先、前田利飛驒守、大聖寺藩主、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京師ニ赴カシム、是日、督府、利命ニ命シ、疾癒ルヲ俟テ、速ニ京師ニ至ラシム。

前田飛驒守殿

右所勞快氣次第、急速登京、勤王可有之様御沙汰候事。

三月

督府 執

事

北陸道先鋒記

○按スルニ、利命、四月十四日ヲ以テ封邑ヲ發シ、二十一日京師ニ至ル。

九日、二督、今石動驛ヲ發シ、高岡驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月九日高岡ニ次ス。

○督府、酒井某部ニ命シテ、速ニ京師ニ至ラシム、又有馬道純京師ニ至リ、勤王ノ實蹟アルヲ

以テ、其質ヲ還付ス。

此度、朝命之御趣意奉畏候付テハ、急務之御用モ可被爲在候間、其旨急飛ヲ以織部へ相傳へ、急速上京、勤王仕候様ト之趣奉畏、早々上京可仕旨相達可申候、

右往返登京之日限御請書、即今可差上置旨奉畏候、來月五日頃迄ニハ上着候様爲仕可申候、右御請、不取敢申上置候、以上。

辰 二月 九日

酒井織部家來 千田伴右衛門
酒井右京大夫家來 梅田大二

御參謀方 御役人御中

○越前藩へ達書

有馬遠江守

同藩人質、兼テ其藩へ被預置候處、本人登京御請有之候ニ付、右人質、本藩へ可被差戻旨被仰出候、其旨可被取計候事。

三月 九日

北陸道 督府 執事

大井彌十郎殿

千本彌三郎殿以上北陸道先鋒記

○

有馬遠江守

同藩人質、兼テ當藩へ御預ケ之處、本人登京、速ニ御請有之候ニ付、右人質、本藩へ可差戻旨被仰出候間、此段可取計旨、御達之趣奉拜承取計申候、右御請申上候、以上。

三月

越前少將内 大井彌十郎

千本彌三郎

松平茂昭家記

十日、二督、高岡驛ヲ發シ、富山前田利同ノ治所ニ抵ル。

前田利同山藩主來候ス、是ヨリ先、利同疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京師ニ赴カシム、是日、督府、利同ニ命シ、疾癒ルヲ俟チテ、速ニ京師ニ至ラシム。

○北征紀事ニ云、三月十日、富山ニ次ス、富山藩主松平稠松來謁ス。

前田稠松殿

右、所勞彌快氣次第速登京、勤王可有之様御沙汰候事。

督府

辰 三月

執事

北陸道先鋒記

○按スルニ、閏四月ニ至リ、利同書ヲ朝ニ上リ、隣境騷擾スルヲ以テ、入觀ノ期ヲ延ヘンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

○是ヨリ先、親征ノ議決スルヲ以テ、列藩ニ詔シテ、軍備ヲ爲サシム、是日、督府、富山、高田以下十一藩ニ申令シ、兵備ヲ嚴整シテ、以テ不時ノ徵發ニ供セシム。

御親征被

仰出候ニ付テハ、其藩人數致用意置候様トノ義ハ、兼テ御沙汰ニ相成居候得共、此節臨時出兵之御指揮モ可

前田稠松

有之候間、猶無油斷、其覺悟可有之候事。

北陸道督府

執

事

北陸道先鋒記

三月

高田藩	椎谷藩	長岡藩
與板藩	峰山藩	

○ 御親征被 仰出候ニ付テハ、其藩々人數。以下、上文ニ同シ、○北陸道先鋒記、井伊直安、牧野忠泰家記

新發田藩	村松藩	三日市藩
黒川藩	村上藩	

○ 御親征被 仰出候ニ付テハ、其藩々人數。以下、上文ニ同シ、○北陸道先鋒記、溝口直正家記

十一日、二督、富山ヲ發シ、魚津驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月十日魚津ニ次ス。

十二日、二督、魚津驛ヲ發シ、泊驛ニ抵ル、書ヲ京師ニ致シ、會津兵、越後地方ニ嘯聚スルヲ以テ、將サニ之ヲ勦蕩セントスルヲ告ク。

○北征紀事ニ云、三月十二日泊驛ニ次ス、書ヲ以テ京師ニ奏ス、會賊兵ヲ出シテ越後ニ據ル如、之レヲ擊スンハ、上州ノ路通セス、是ヲ以テ預シメ戰爭ヲ期スルノ事ヲ云フ。

○本條、所謂京師ヘノ移牒ハ、原記ヲ佚ス。

十三日、二督、泊驛ヲ發シ、絲魚川松平直春ノ治所ニ抵ル、松平直春日向守、清崎藩主來候ス、乃チ命シテ速ニ京師ニ至ラシム。

○北陸道先鋒記節畧ニ云、三月十三日、絲魚川御泊、松平日向守ニ參陣拜謁。

御請書、

上京可仕旨被 仰渡奉畏候、右日限之儀、來四月中旬上京仕候、此段奉申上候、以上。

三月十四日

松平日向守

北陸道先鋒記

○按スルニ、直春、四月十七日ヲ以テ封邑ヲ發シ、二十八日京師ニ至ル。

○是ヨリ先、督府、星野某養齋、越後郷士ノ請ヲ聽シ、命シテ越後諸藩ノ形狀ヲ訶察セシム、是日、某絲魚川ノ行營ニ至ル、尋テ其徒星野某藤兵衛、越後郷士等ト共ニ軍後ニ扈從セシム。

○北陸道先鋒記節畧ニ云、正月十九日、越後柏崎郷士之内、京住星野養齋參殿、於國元有志之輩、勤王爲致度段、不取敢申出ル、三月十三日、星野養齋參陣、右先達テ御奉書頂戴後歸國、彼是探索筋相求、當御泊迄申上罷出候由、依之、參謀衆下宿ヘ差向ル、十八日、養齋儀、高田表ヨリ隨從被 仰付候事。
左之名前之者、高田表ヘ罷出候事。

柏崎郷士 星野 藤兵衛 同 遠平 同 達平

同志	中田村	尾崎修藏	同	美名平	同	東作	同	孝太郎
	高田町	長野金次右衛門	關	茂左衛門	同	廉五郎		
	鉢崎町	戸田七左衛門				民次郎		

十九日、御印鑑八枚、御肩印壹枚、星野藤兵衛へ被下。

十四日、二督、絲魚川ヲ發シ、名立驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月十四日、名立ニ次ス。

○督府、本願寺門徒ノ力ヲ王事ニ致セシヲ賞シテ、之ヲ罷歸ス。

○本願寺記ニ云、御暇願御聞濟ニ付、三月十四日、各寺御本陣へ被召、御兩卿ヨリ御直達之趣、左ニ、

今般隨身有之、軍事ヲ始メ、内外御爲筋盡力之段及 奏達候ハ、 叡感不斜 思食候、使節ニ於テモ深ク辱存候條、

御用濟歸洛之上ハ、其寺へモ厚挨拶ニ可及候事、

右相濟、三月廿四日、越後高田出立、歸京。

十五日、二督、名立驛ヲ發シ、高田榑原政敬ノ治所ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、三月十五可高田ニ至ル。

○是ヨリ先、督府、監察小笠原某彌右衛門ヲ東山道總督府ニ遣シテ、軍事ヲ議セシム、是ニ至リ山道總督、書ヲ二督ニ致シテ、速ニ軍ヲ江戸ニ進メンコトヲ促ス。

今般 御親征被爲在候ニ付テハ、御廟算之通り、其御手ト萬事御示談申入候筈ニ付、早速別飛ヲ以不取敢申入候筈之處、當道之儀ハ最早戰爭ニ及ヒ候ニ付、彼是繁用延引之段、不惡御聞取願入候、却テ御人使ニ相成、恐懼千萬ニ候、將是迄諸大名之處置、竝大號令等之事件ニ付云々之御沙汰、御尤之御事ニハ候得共、最早東征御打入之日限モ御決定ニ相成候上ハ、一日モ速ニ御進軍之方可然哉ニ奉存上候、定メテ所察、東海道大總督之宮ヨリハ御沙汰不被爲在御事ト御察申入候、當道之儀ハ戰爭相始リ候事ニ付、過日來ハ晝夜兼行仕リ、漸ク今日榑川宿著仕候事ニ付、明後日ハ關東打入モ出來仕候得共、何分ニモ御日限之處モ、來十五日三道一時ニ攻入候様トノ御沙汰ニ付、十五日ハ必攻入之覺悟ニ候、何卒御兩公之處モ、片時モ早ク御進軍願入候、假令十五日ニハ御間ニ不合候トモ、十六七之中ニハ必御攻入之様願入候、尤從是ハ日夜御兼行ニ無之候テハ不相成事ト存上候、猶又委曲ハ長藩小笠原氏ヨリ御聞入願入候、先ハ概御請迄如此候也。

三月十一日夜

於榑川宿認○上

具 定
八 千 丸

高倉 三位 殿
四條 大夫 殿北陸道先鋒記

○按スルニ、本書ハ報復ニ係ル、而シテ二督ノ移牒ハ、之ヲ佚ス。

○北征紀事ニ云、三月二日、小笠原彌右衛門ヲシテ齋書、東山道督府ニ詣リ、軍事ヲ議セシム、十五日、小笠原彌右衛門東山道ヨリ至ル、云、東山道既ニ熊谷驛ニ於テ戰フ、勝ツニ乘シテ日々ニ軍ヲ進ム、北道亦宜シク速ニ進軍スヘシ。

十六日、督府、榑原政敬式部大輔、高田藩主、溝口直正誠之進、新發田藩主ニ命シテ、速ニ京師ニ至ラシム、井伊直安召ニ應シテ行營ニ詣ル、亦命シテ京師ニ至ラシム。

各通 榑原式部大輔 溝口誠之進 井伊右京亮

御趣意御請之上ハ、速ニ登京 御沙汰相待、王事勉勵可有之候。

但、此ヨリ四拾日内ヲ限り、上着之事。

三月 北陸道先鋒記、榊原政敬家記、與板藩記

○井伊直安家記ニ云、正月十日、今度依 召藩地出立、一ト先當府指^{江戸}ス、へ罷登、二月二十八日當府發途、中山道旅行登京仕候處、北陸道御總督、不日越後國へ御下向ト相窺、途中ヨリ越後高田へ相越候處、御總督御書付御渡シ、且速ニ登京仕候様ニ御達御座候ニ付、夫々御受奉申上、同所ヨリ北陸筋罷登、四月五日着京仕候。

○政敬、直正ハ明日更令シテ、其入覲ヲ止ム、參看スヘシ。

十七日、大總督府、東海、東山、北陸三道先鋒總督ニ移牒シテ、江戸進擊ノ期ヲ延フ。

○三道總督へ達書各通

三月十五日、江城進擊之布令致シ置候處、方略之儀モ有之、改テ期限可申達候、其内諸兵嚴肅輕舉無之様可爲肝要之旨、大總督宮被 仰出候事。

三月

大總督府

參

謀

北陸道先鋒記
東海道先鋒記

○是ヨリ先、會津人、越後諸藩ニ移書シ、國情洵擾、藩士越後地方ニ遁逃スルヲ以テ、兵ヲ發シテ之ヲ鎮撫スルヲ告ク、加賀、新發田二藩其狀ヲ督府ニ稟ス、是日、督府越後諸藩ニ令シ、會津兵管内ニ入テハ、諭シテ本藩ニ歸ラシメ、其命ニ抗スル者ハ之ヲ誅夷セシム、因テ榊原政敬、

溝口直正ノ入覲ヲ止メ、互ニ相救應シテ其事ニ服セシメ、又諸藩老臣ヲ延見シテ、勗シムルニ會津兵鎮壓ノ事ヲ以テス。

○五日加賀藩上申書

會津御家中、先達テ以來追々脱藩御人數有之様子ニテ、今度右御取縮方^{縮カ}之儀ニ付、御同家御軍事方ヨリ、越後筋御大小名へ御廻章相廻候旨承リ申ニ付、聞合之者指遣候處、別紙寫取參リ申ニ付、相添之小紙ヲ以御達申上候、以上。

○會津ニテ人心動搖仕、脱走之者モ有之、右爲鎮撫人數差出候段、廻達有之趣相聞候付、實否如何可有之哉、在所表へ打合遣置候處、昨日用向ニテ著仕候者有之、相尋候處、去月廿日頃、越後筋諸藩へ廻文有之候儀ハ無相違、右文面心覺形別紙之通申聞候付、此段申上候、以上。

三月 六日

溝口誠之進内

宮北郷 左衛門

○別紙

以剪紙致啓上候、寡君儀、數年在京精忠ヲ抽候ニ付、先帝以來度々御稱譽ヲモ奉蒙候之處、不計モ朝敵之汚名ヲ負候ニ付、人心不穩候之處、今般勅使御巡行之間等有之候ニ付、猶又動搖致脱藩イタシ候者共モ有之、固陋之國風、萬一御不敬等之儀有之候テハ、對 天朝奉恐入候間、右爲鎮撫大砲組一隊、備組二隊、番頭組一隊、其外遊擊隊之者共、猶又追々出張申付候間、右爲御心得申述置候、以上。

二月 日

會津

軍事方

新發田 三 日 市
黒川 村 上

以剪紙致啓上候。以下、上文

五泉御陣屋	御郡掛り扱	村松	御軍事方扱
一ノ木戸御陣屋	御役人中扱	三根山	御郡方扱
長岡	御郡方扱	推谷	御郡方扱
栢崎	御郡方扱	高田	御領奉行扱
糸魚川	御郡方扱	以上北陸道先鋒記	御町奉行扱
			御表奉行扱

○本日達書

會藩脱走之者有之ニ付、爲鎮定兵隊繰出候儀モ可有之段、其藩々へ廻狀差越候哉ニ相聞候得共、差當リ右脱走躰之者、潜伏罷在候箇所モ無之趣候處、自然鎮定ヲ名トシテ、妄ニ他境へ兵隊繰出候等之儀於有之ハ、奉對 朝廷妄動不敬之至リニ付、萬一兵隊通行致シ候ハ、其旨申諭シ差歸シ候様、若強テ押通候者有之候ハ、兵力ヲ以テ討取可申候、其節別紙書附之藩藩、迅速救應之手當、兼テ盟約取結置可申事。

糸魚川藩	高田藩	椎谷藩
與板藩	長岡藩	峰山藩
新發田藩	村松藩	三日市藩
黒川藩	村上藩	北陸道先鋒記、榑原政敬、井伊直安家記

○北征紀事ニ云、三月十七日、十一藩ニ命シ、警備ヲ嚴ニス。

急速上京御請可仕旨、兼テ達置候義ハ有之候得共、不及其義候間、溝口誠之進ト萬端示合、別紙^{上ノ達書ヲ指ス}之通、非常救應筋精々盡力可有之候。

三月

別紙之通、御沙汰有之間、致御通達候。

督府

執

事

北陸道先鋒記
榑原政敬家記

溝口誠之進

○北陸道先鋒記ニ云、三月十七日、
急速上京御請可仕旨。以下、上文ニ同シ、但シ溝口誠之進ヲ榑原式部大輔ニ作ル

榑原式部大輔家老	伊藤彌總	瀧見九郎兵衛
溝口誠之進家老	溝口半兵衛	牧野駿河守内
内藤紀伊守内	美濃部貢	堀左京亮内
井伊右京亮内	松下源左衛門	小野八郎左衛門
牧野伊勢守内	神戶十郎右衛門	柳澤彰太郎内
		柳澤隼之助
		堀右京亮内
		山田秀助

右一統 御前へ被召出、當國內ニ會藩士潛匿罷在候間へ有之二付、一同ニ兼テ申合置候テ、必取締可有之候様ニトノ御沙汰有之候事。

柳澤伊勢守家來

加川 出石

右出石儀一同ニ罷出之處、遲參ニ付不罷出、御沙汰之趣ハ當藩^{高田藩}ヲ指ス、ヨリ申聞候様、及指圖之。

○堀直弘家記ニ云、三月十七日、越後各藩之重臣、御兩卿拜謁被 仰付、今般北陸道爲鎮撫使發向ス、會藩鎮靜方可致盡力、太儀ニ被思召候段、高倉殿御意有之、十八日、此度會藩鎮方之儀、各藩重臣申談、見込可申上旨御達ニ付、集議之上、精々謹慎方之儀、會藩へ可申入外、見込無之、尙後日新發田藩へ集會、篤ト申談可取計、何分明朝之御發途、追詰談判モ行届兼、此下取計方之儀ハ、居掛重臣得ト申談度旨申上候處、御聞届相成。

○堀之美、^{右京亮、推}行營ニ詣テ二督ニ謁ス、乃チ命シテ速ニ京師ニ至ラシム。

堀 右京亮

御趣意御請之上ハ速ニ登京、御沙汰相待、王事勉勵可有之候事。

但、此ヨリ四十日内ヲ限リ、上著可有之事。

三月 此陸道先鋒記

○之美家記ニ云、三月十七日、於越後高田、鎮撫使兼總督高倉三位殿、四條大夫殿へ面謁仕候。

○按スルニ、之美、二十六日ヲ以テ封邑ヲ發シ、京師ニ至ル。

○督府、越後諸藩ニ令シ、重臣一人ヲ出シテ、軍後ニ扈從セシム、又長岡藩ニ命シテ兵ヲ行營ニ發セシム。

絲魚川藩	高田藩	椎谷藩
與板藩	長岡藩	峰山藩
新發田藩	村松藩	三日市藩
黒川藩	村上藩	

北陸道

督 府

三月 別紙之通被 仰出候間、被相心得、無用之從者ハ可成丈減少、御隨從可被致候。

督 府

執 事

北陸道先鋒記、柳原政敬
井伊直安、牧野忠泰家記

○ 兼テ御沙汰ニ相成居候通、兵隊御用候間、國力相當之人數、急速高田表へ可被差出候、同所參著之上、御指揮之旨可有之候事。

牧野 駿河守

北陸道督府

執 事

三月 〇十八日再達書

其藩人數、高田表迄可被繰出旨、兼テ御達ニ相成候得共、當表御引拂、信州追分筋御進發ニ相成候間、御押先へ兼行追付可

被申旨、御沙汰候條、此段致通達候。

北陸道督府

三月

執

事

牧野駿河守 役人衆中以上北陸道先鋒記

○是ヨリ先、舊幕府、高田、新發田二藩ヲシテ越後頸城、蒲原二郡ノ地ヲ管セシム、是ニ至リ二藩書ヲ督府ニ上リテ、其進止ヲ取ル、令シテ舊ニ仍リ假ニ之ヲ管セシム。

○十一日申請書

越後國頸城郡之内ニテ高四万八千石余、右ハ是迄德川領地之分、式部大輔へ從來預所ニ被申付置、支配致來、竝此度高三万七千石余、當分預所ト被申付候分、右兩所共支配方之儀如何心得候テ宜敷御座候哉、今般 勅使御下向ニ付テハ、御沙汰之品モ可被爲在候哉ト被奉存候ニ付、德川家へ相伺候處、勅命之儀ニ候ハ、遵奉可致旨差圖有之候、尤右三万七千石餘之分ハ、未タ鄉村請取不申候儀ニ御座候、依之、此段各換迄御内慮相伺候様申付越候、以上。

榊原式部大輔家來

三月五日

丹羽六太夫

○十一日督府批紙

追テ差圖有之候迄ハ、是迄同様可被心得候。榊原政敬家記

口上之覺、

德川料預リ之箇所、租税是迄未納皆納竝殘金穀共取約、早急 太政官へ可申出旨御道之趣奉畏、早々取調之上可奉差上處、

差當越後國蒲原郡之内、高一万五千四百八十七石余、卿村別紙之通、是迄預之分、以來如何相心得可然哉、此段奉伺候、以上。

溝口誠之進内

宮北郷左衛門

三月十七日

○別紙

覺、

一高一万五千四百八十七石六斗一升六合

溝口誠之進 越後國蒲原郡

幕料預高

此村別、

星飯野新田	大月奥野新田	太田上奥野新田	太田奥野新田	下奥野上新田
天王新田	飯嶋新田	市嶋請新田	福島湯新田 <small>十三ヶ村</small>	三倒新田
土地龜新田	下奥野新田	濁川新田	濁川奥野	大谷内新田
川前村	小嶋村	嘉瀬嶋村	關屋村	小河原村
前山村	月崎村	分田村	東町村	江端村
保田村	六野瀬村	渡場村	下道湯上新田	下道湯中新田
下道湯下新田	新飯田湯上新田	新飯田湯下新田	大嶋新田	代官嶋新田
新飯田村	上新田	井戸場新田	嶋森村	眞野代新田新田
中條新田新田	西野新田新田			

右之通御坐候。以上。

辰三月 北陸道
先鋒記

○本日達書

各通 榊原式部大輔

溝口 誠之進

督 府

從來、徳川氏ヨリ預リ來候地所、竝今般預リ候地面共、其藩へ當分可被預置旨被 仰出候間、撫恤取締向盡力可致候。

右之通、御沙汰有之間、御心得可有之候。

督 府

執

事

北陸道先鋒記
榊原政敬家記

三月

○附錄一條

乍恐以書附奉願上候、

越後國頸城郡之内、是迄高田御預所ニ相成居候二百五拾ヶ村、役人一同奉願上候、今般私共村々、天朝御預ニ可被 仰附趣、遙ニ承知仕冥加至極難有仕合ニ奉存候、抑私共村々之儀、去ル文政三辰年ヨリ、此節迄四拾九ヶ年間、高田柵之御支配ヲ請來リ候處、凶年ハ勿論、村々之内不時之災害等有之候節ハ、高田柵御手限ヲ以、窮民救方被成下、將又年柄ニ寄、金子融通惡敷、御年貢金上納期月ニ相成候テモ、調達差支難澁仕候様之節ハ、御立替御上納被成下候儀度々有之、其上御預所掛リ御役人方廉直ニテ、萬端御仁慈御舍、正路潔白賞罰嚴密ニ御取扱被下候故、村々取締方モ行屈、大小之百姓一統歸伏仕、安穩農業出精罷在候故、近隣御代官所支配之村々之者迄、高田御預所之支配ヲ請度趣、平常申合羨ミ居候仕合ニ御座候、今

般、彌 天朝御領ニ被 仰付候上、萬一他之御支配ニ相成候テハ、村役人共ハ勿論、小民ニ至迄、一統數ヶ敷奉存候、何卒此上御寛大之御所置ヲ以、是迄之通高田御預所ニ御居置被下置候様、只管奉願上候、然上ハ、鼓腹シテ百姓永續奉獻貢、奉報天恩候御儀ト難有仕合ニ奉存候、乍恐出格之御仁惠ヲ以、願之通御聞濟被下置候ハ、二百五拾ヶ村、大小之百姓一同難有仕合奉存候、以上。

慶應 四辰年 三月

稻谷村 庄屋 加藤 多助 印

北陸道先鋒記

○以下二百四五九村、庄屋人名ハ略ス。

○四月六日達書

榊原式部大輔

其方御預地越後國頸城郡之内、天朝御料村々、去卯年貢納殘穀、先達テ所拂伺之通被 仰付、代金之分急速取調、當御本陣へ可被相納旨 御沙汰候事。

但、納期月、是迄之振合ニ不拘可相納事。榊原政敬家記

○政敬家記ニ云、右取調相納候書類等無之、詳悉相分リ不申候。

○同上達書

溝口 誠之進

其方御預地越後國蒲原郡之内、天朝御領村々、去卯年貢殘金之分急速取調當、御本陣へ可相納旨御沙汰候事。

四月 溝口直
正家記

○四月十二日申請書

越後國頸城郡村々之内、榊原式部大輔へ徳川家ヨリ從前預所高四萬八千九百石餘、竝當正月中當分預所ニ達御座候高三萬

七千石餘之分共、先般 御下向之節、心得方奉伺候處當分可被 御預置旨被 仰付候間、撫恤取締向精々勉勵可仕旨被 仰渡御座候、然ル處、右之内高三萬七千石餘之分ハ、郷村諸書物未タ受取不申儀ニ付、引渡日限之儀、御預所掛リ之者ヨリ、先支配廿利八右衛門手代へ別紙壹印之通及掛合候處、貳印之通、返書ヲ以、北陸道 御督府執事ヨリ新潟奉行へ御達書等貳印、壹綴之通相廻候、右御達書之内、越後國內代官支配所、並旗下領地共不殘ト御座候儀ハ、朝廷ヨリ外々へ未タ改テ御預所等ニ不被 仰付、現今代官支配地之儀ニテ、前文式部大輔へ、過日 御下向先ニオキテ當分御預所被 仰付候三萬七千石餘之分、郷村未タ受取不申候共、右ニ關係仕候譯ニハ有之間敷儀ト奉存候、萬一關係仕候儀ニモ候ハ、式部大輔方へモ、猶又其段 御沙汰可被爲在奉存候處、何等之 御沙汰モ無御座上ハ、全ク新潟奉行等之意味違ニ可有之ト被存候間、則御預所掛リ役人出雲崎表迄差出、委細及掛合候趣、三印之通御座候、就テハ郷村引渡等、彼是遅々相成候テハ、先般被 仰渡御座候撫恤、竝取締筋等之儀ニ付、於式部大輔モ深ク心配仕候次第モ御座候間、郷村諸書物等早々引渡候様、新潟奉行並廿利八右衛門支配向へ、早速 御沙汰被成下候様仕度、乍然、新潟奉行へ別段被 仰付之 御趣意柄モ被爲在候テ之儀御座候哉、此段各様方迄御内慮奉伺候様申付候、以上。

四月七日

榊原式部大輔内

丹羽 六 大 夫

北陸道先鋒記
榊原政敬家記

○本條、所謂別紙壹印及ヒ三印ハ、竝ニ原記ヲ佚ス、貳印新潟奉行へノ達書ハ、二十二日ノ條ニ載スル者ヲ指ス、參看スヘシ。

○四月十五日達書二通

元出雲崎代官廿利八右衛門支配地、頸城郡之内、高三萬七千石餘、兼テ其藩へ 御沙汰通、郷村受取取締可有之候事。

北陸道督府

四月

執 事

新潟

奉 行

越後國頸城郡之内、高三萬七千石餘、兼テ榊原式部大輔へ當分可被預置旨、御沙汰ニ相成候條、此旨相心得、廿利八右衛門手代之者へ其旨申達、郷村引渡方、早々爲取計可申候事。

北陸道總督府

執 事

以上榊原政敬家記

戊辰 四月

○稻葉某、左衛門、舊旗下士、時ニ江戸ニ在リ家臣ヲ督府ニ遣シテ、奉上ノ意ヲ陳シ、公事ニ服センコトヲ請フ、安西某^{安太郎、舊旗下士、時ニ江戸ニ在リ}モ亦家臣ヲ遣シテ、奉上ノ意ヲ陳ス。

口上覺、

今般、御勅使様御下向ニ付、左衛門早速罷越、御機嫌可奉何答ニ御座候處、病氣ニ付長途步行仕兼、乍恐私共ヨリ御機嫌奉候様申付越候、尤 尊王之儀、勿論之義、小給相應之御用筋モ御座候ハ、被 仰付被下置度様奉心願候、右各様迄、私共ヨリ宜敷御取成被下置度様可奉願上旨、申付越候、以上。

稻葉左衛門家來

久須美七左衛門

久須美三郎右衛門

○本條、指令見ル所ナシ。

○ 一高千石 越後國三島郡 小島谷村

内高六拾石八斗七升一合小物成高入 高四百二石九斗七升九合 徳川領

外

寺社領無御座候、

右ハ私知行所、高國郡村名、書面之通相違無御座候、以上。

慶應 四辰年 四月

稻葉 左衛門

○ 本條、上申ノ日ヲ佚ス。

口上書之覺、

高八百五十石

越後國菟羽郡上高町村 安西保太郎

今般、御勅使御下向ニ付、早速主人保太郎罷出、御用可奉何之處、所勞ニテ平臥罷在、地役人私ヲ以御用伺ニ參上可仕旨申遣候ニ付、不取敢參上仕候、勿論 尊王之儀ハ奉申上候迄ニモ無之候間、万石以下御取扱之義モ御座候節ハ、萬端宜御取扱被下置候様、主人保太郎ヨリ厚申遣候間、此段偏奉願上候、以上。

三月 十七日

安西保太郎家來 土田市右衛門

書判

參謀 御用掛御中以上北陸道先鋒記

十八日、浮浪ノ徒、越後地方ヲ劫掠スルノ聞アルヲ以テ、督府越後諸藩ニ令シテ、之ヲ緝捕セ

シム。

近日、浮浪無賴之徒、義名ヲ借り所在横行、金穀ヲ掠取候族モ有之趣、不屈之至ニ付、向後右體之者ハ勿論、督府中之者タリ共、亂暴ケ間敷所業於有之ハ、無遠慮召捕可申、萬一手向ヒ致シ候節ハ、打捨不苦候條、此旨國中へ布告可有之候。

三月

右之趣被 仰出候間、左之藩々へ、早々御順達可有之候。

督府 執事

糸魚川藩 高田藩 椎谷藩

與板藩 長岡藩 峯山藩

新發田藩 村松藩 三日市藩

黒川藩 村上藩 北陸道先鋒記 榑原政敬家記

○是ヨリ先、督府、肥前、小濱ニ藩兵ヲ以テ先鋒ト爲シ、安藝藩兵ヲシテ牙營ヲ警守セシム、是ニ至リ安藝藩兵ヲ改メテ先鋒ト爲シ、肥前藩兵ヲシテ牙營ヲ警守セシム、因テ銃器ヲ高田藩ニ借り、之ヲ安藝藩兵ニ貸與ス。

藝州

其藩人數、兼テ本陣警衛申付置候處、當所ヨリ肥前人數交代、先手若州人數ト合進有之、萬事同藩ト可申合候事、右之旨被 仰出候條、此段致通達候。

三月 十八日

督府 執事

北陸道先鋒記
淺野長勳家記

○

當表ヨリ藝州人數、肥前人數ト交代、先手其人數ト合進申付候條、萬事同藩ト可申合候事、
右之趣被 仰出候間、致通達候。

若 州

三月

督 府 執

事
北陸道先鋒記

○肥前藩兵ノ達書ハ、原記ヲ佚ス。

○北陸道先鋒記ニ云、三月十八日、高田藩ヨリ借用、藝州へ御借渡相成候野戰筒付屬之品共、左之通。

覺、

一百五十目玉野戰筒壹挺 但車臺付 一輕柯壹本

一カラセ、ル壹本 一胴亂壹提

一口藥壹挺 但鷲管貳百本添 一火門針壹本

一玉百五拾玉 一合藥拾貫目 但藥袋百

右之通ニ御座候、以上。

右引渡請取書、榊原へ當局ヨリ差出候事。

○舊桑名藩士ノ其舊管地柏崎ニ在ル者、屏居恭順ノ聞アルヲ以テ、督府令シテ舊ニ仍リ、假ニ

其地ヲ管シ、且本地ノ簿書等ヲ太政官ニ上ラシム。

別紙柏崎役人へ之御達書、其藩ヨリ通達方可被取計旨、御沙汰候間此段御達申候。

三月

北陸道督府

執 事

榊原式部大輔 役人衆中

○別紙

柏崎詰合 役人並年寄共へ

其方共儀、至極謹慎罷在候哉之間へモ有之、神妙之儀ニ付、太政官ヨリ追テ 御沙汰有之候迄、諸事取締向、最前同様心
得可罷在候事。

三月

北陸道督府

執 事

○二十三日達書

北陸道先鋒記
榊原政敬家記

柏崎陣屋 詰 合 之 者

右之者、謹慎罷在候哉候哉之間有之、神妙ニ付、追テ御沙汰有之候迄、諸取締最前同様様心得可罷在旨兼テ達置候、就テハ
別紙 御沙汰書四通、其藩ヨリ相達シ、違背無之候得ハ、早々御出先へ御請書差出、領地水帳、郷帳並租稅未納、皆納夫々取
調、太政官へ急速可被出旨、被 仰付候條、此段其藩ヨリ相達可被申候事。
但、御請書ハ、其藩ヨリ取次差出可被申事。

三月

榊原式部大輔殿 執政家中北陸道先鋒記

○本條、所謂達書四通ハ、原記ヲ佚ス。

○督府、酒井忠溫ヲ罷歸ス。北征紀事

十九日、二督、將サニ軍ヲ江戸ニ進メントス、是日、高田ヲ發シ、關山驛ニ抵ル、越後諸藩ノ重臣之ニ從フ。

○北征紀事ニ云、三月十五日、太政官、諸道督府ニ勅シテ、大總督府ト共ニ荏、土ニ會セシム、大總督亦諸道督府ヲシテ、荏、土ニ會スルヲ促ス、於是兩參謀意ク、太政官暨ヒ大總督命重シテ任、土ニ行クコトヲ主張ス、星野養齋之レヲ聞キ、與衆之レヲ論シテ曰、命固ヨリ重ンセサル可カラズ、然リト雖トモ、兩帥此ヲ去レハ、此地必ス擾亂ヲ生セン、何トナレハ長岡及其他諸藩ノ情實ヲ察スルニ、皆一心アリテ王命ニ伏セルヲ必トセス、願クハ一卿ヲ留メテ、是ヲ鎮撫セハ、則全國平穩ナラント、衆皆同之、遂ニ小林、津田ト共ニ抗議スレトモ、皆是ヲ肯セスシテ云ク、關東ハ賊ノ積幹ニシテ、會長ハ則枝葉也、其積幹ヲ折カハ、枝葉何ソ繁茂スルコト是アラシ、必其積幹ヲ折カンノミト、此時星野密ニ聞クコトアリ、長岡密ニ戎備ヲ設クト、乃チ假參謀酒井十之丞ニ告テ曰、國情云云、二郷去テハ則大事ニ至ル者アラシ、君以爲如何、酒井曰、餘亦是ヲ憂フト、星野曰ク、然則君亦宜シク議ヲ盡スヘシ、於是酒井亦津田、小林ト抗議スレトモ決セス、兩謀者亦固ク前議ヲ執テ移ラス、十七日、大總督府、東山道鎮使、共ニ日々ニ軍ヲ進ムト聞キ、議ヲ進撃ニ決ス。

○北陸道先鋒記ニ云、三月十九日、越後高田御發向、辰刻半關山御著泊、申刻過。

高田藩 榎谷藩 與板藩

長岡藩 三根山藩 新發田藩
村松藩 三日市藩 黒川藩
村上藩

右、明十九日辰半刻 御出發ニ付、兼テ御達之通、御隨從可有之候事。

戊辰三月十八日

督府 執

事

北陸道先鋒記
井伊直安家記

○堀直弘家記ニ云、三月十七日、御兩郷近々江戸表へ御發向ニ付、越後各藩之重臣、御隨從被 仰付候旨御達有之、十九日辰之半刻、御兩卿高田御發途、越後十藩之重臣ハ小荷駄ノ次、鍋島銃隊之跡へ御隨從被仰付旨、御達有之。

○榊原政敬家記ニ云、三月十九日、勅使高倉、四條、御兩卿御發興、信州路へ御越被遊候ニ付、領分境迄爲御見送、重臣村上主殿一手之人數、召連罷越候。

○越後諸藩扈從重臣姓名

榊原式部大輔重臣	久代勘右衛門	上下十七人	溝口誠之進内	宮北郷右衛門	上下十人
牧野駿河守内	植田十兵衛	上下六人	内藤紀伊守内	美濃部 貢	上下五人
堀左京亮内	野口彦兵衛	上下六人	井伊右京亮内	岡 吉左衛門	上下四人
牧野伊勢守内	多賀谷 貢	上下四人	柳澤伊勢守内	加用 出石	上下五人
柳澤彰太郎家來	關口勘右衛門	上下五人	堀右京亮内	山田 秀助	上下四人

北陸道先鋒記

○是ヨリ先、榊原政敬書ヲ朝ニ上リテ、徳川慶喜ノ爲メニ哀ヲ乞フ、是ニ至リ督府ニ就キテ其

請ヲ申ヌ。

德川慶喜過失 御宥赦、且宗社永存之御所置懇願之儀ニ付、別紙之通、重臣之者登京申付、乍恐追々奉哀訴置候次第、何卒厚御差含、宜敷御執成被下置候様奉願候、誠恐誠惶謹言。

榊原式部大輔

政敬印

三月十九日

○別紙

歎願書、

德川慶喜、從來過失有之候處、又々早春於伏見、鳥羽邊、先供之者戰爭ニ及候處、斷然御征討被仰出、天威嚴重不堪恐懼、戰慄之至奉存候、私儀ハ德川氏三河以來、世祿之舊臣ニ御座候處、年少不肖故、扶持匡救モ不行届ケ様之場合ニ至候テハ、實以其罪難遁、上ハ奉對 天朝、中ハ德川氏、下ハ私祖宗ニ對シ、面目モ無之次第奉存候、私儀遠方隔處仕居候事故、早春之戰爭始末纖悉ハ、承知不仕候得共、全慶喜不行届、一時之過失ヨリ奉惱 宸襟候次第立至、恐懼之至可奉陳謝様モ無御座候、然ル處、普天之下、率土之濱、皆王土ニ付、聖朝ニ於テ必罰必誅之御決斷ニ相成候テハ、慶喜天地間ニ身之措所有之間敷、右様相成候テハ、痛癢不關之者ニテモ不堪憐愍可奉存候、況ヤ私上ニテハ實以日夜痛哭仕候テモ悲哀不滅、水漿モ難入口次第ニ御座候、何卒天地包含之 大恩ヲ以、今般之過失御宥赦被成下置候様奉懇願候、且德川家康天下ニ大勳勞有之、櫛風沐雨、應仁以來之大亂ヲ掃蕩、三百年大平之基ヲ開キ、奉安 宸襟、其ヨリ以來列世恭順崇敬之誠ヲ盡シ、列聖 御寵待不淺、然ルニ慶喜一身之過失ヲ以、宗社忽諸不祭事ニ相成候テハ、泣血悲痛無此上奉存候、仰願ハ德川氏先祖以來之勳勞恭敬、深ク 思召被下置、厚ク御仁恩ヲ被爲垂、宗廟社稷永存仕候様、御處置被成下候ハ、德川臣民一同、再造之大恩ヲ感戴可仕、此段奉哀訴候、六拾餘州皆一王之民ニ御座候得ハ、私祖宗以來、無量之天恩奉荷、聖明之雨露ニ沐浴仕候得ハ、從來勤王之志願厚心掛罷在候、此度奉哀訴候趣、莫大之 聖意ヲ以 御許容被下置、德川氏宗社、依然血食仕候ハ、恩上之恩、

惠上之惠、如何報効可仕哉、實以感激奮發、向後 皇國之爲ニ益盡心竭力可仕奉存候、哀痛憂懼之餘、不憚尊嚴奉哀懇願候間、宜敷御取計被下度奉願候、誠恐誠惶頓首謹言。

正月二十九日

榊原式部大輔

榊原政敬家記

○政敬家記ニ云、三月十九日、勅使御本營へ式部大輔出頭、差出候書面、右之通。

○北征紀事ニ云、三月十八日、蓋十九日ノ誤、榊原式部大輔來リ送別ス、且德川赦罪ノ歎願書ヲ出ス、之レヲ内國局ニ送ル。

○是ヨリ先、督府、高橋某竹之助、越後郷士、請ヲ聽シ、義徒ヲ糾合シテ以テ官軍ヲ迎ヘシム、是日、某其徒ト共ニ高田ノ行營ニ至ル。

○北陸道先鋒記ニ云、正月十八日、元越後下今町在杉之森溝口家領所之郷士、當分澤様へ出勤、高橋竹之助、右ハ此度御發向ニ付、手前於國元有志之輩打寄、勤 王仕度段、過日出願、澤様ヨリ御頼之旨旁罷出、依之、參謀方へモ其旨及示談御聞濟相成、則如左御下ケ書一通被下之、歸リ御待申上候トノ事、御下ケ書之寫、

北陸道爲鎮撫不日發向ニ付、勤 王之勇士有之由、兼テ及御聞神妙感佩 思召候、當此御時節早々馳集、先鋒可有盡力之旨、被 命候趣執達如件。

辰正月十八日

高橋竹之助 彦

三月十九日、高橋竹之助、吉田省之進、兒島恒之助、右三人當表指ス、へ罷出候事。
二十日、二督、關山驛ヲ發シ、牟禮驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿日、雨、關山御發馬卯半刻、牟禮御著申半刻。
二十一日、二督、牟禮驛ヲ發シ、善光寺驛ニ抵ル。

○陸道先鋒記ニ云、三月廿一日、晴、牟禮御發馬辰刻、善光寺御著未刻。

○軍防局、督府ニ牒シテ部下ノ兵員ヲ問フ、督府復書シテ見兵ノ數ヲ報ス。

○北征紀事ニ云、三月十八日、軍防局、書ヲ致シテ兵數ノ多少ヲ問フ。

○軍防局ノ移牒ハ、原記ヲ佚ス。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿一日、今日京都へ御出狀ニ付、軍防局へ御届、左之通、
覺、

一惣人數三月廿日有高 千貳百十五人

内 八十五人 本陣并隨從人數 六十二人 榊原式部大輔外九藩家來上下人數

五百三人 肥前侍從人數 百六十五人 安藝少將人數

三百卅三人 酒井右京大夫人數 十五人 酒井左京亮人數

以上

外ニ 總督府乘馬四疋 肥前乘馬四疋 同夫方三百卅三人

若洲乘馬壹疋 同夫方五十人

一探索、斥候等差出有之候人數除之、

一越後長岡牧野駿河守へ、國力相當之出兵申付有之候間、出兵次第言上。

辰 三月

二十二日、二督、善光寺驛ヲ發シ、坂木驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿二日、晴、善光寺御發馬辰刻、坂木御著酉刻前、廿三日、晴、於坂木宿、副總督様御違例ニ付、御逗留之事、但、御先手並肥前藩、總テ此段申達ス。

○軍防局、書ヲ二督ニ致シ、車駕親征、昨日ヲ以テ京師ヲ發セシヲ報ス。

聖上益御機嫌克被爲成恐悅奉存候、昨廿一日、御親征大坂 行幸被爲 在候間、此段申入候、尙亦、御宸翰寫、誓文之寫、日誌五六等爲持差出候、御落手可被下候、以上。

三月 廿二日

尙、日々軍事御繁務、御苦勞存候也。

軍 防 局

高倉 三位 殿
四條 大夫 殿北陸道先鋒記

○是ヨリ先、督府、舊新潟奉行白石千別下總守ヲ高田ノ行營ニ召ス、時ニ千別疾アリ、此日、僚吏田中光儀藤太郎代リテ、坂木驛ノ行營ニ至ル、乃チ命シテ其舊管地ノ簿書ヲ齎シ、入京シテ之ヲ上ラシム、光儀、徳川慶喜ニ告テ、命ヲ奉セント請フ、之ヲ聽ス、又之光儀ニ令スル者ヲ越後舊代官、及ヒ舊旗下士ニ令シ、光儀ヲシテ之ヲ傳達セシム。

○五日達書

新 潟 奉 行 へ

今度、御兩總督先鋒兼鎮撫使トシテ、北陸道へ御發向、就テハ被申達候御用之儀モ有之候條、越後高田表へ參營可被致候、尤差急候御用之儀候間、此狀着次第、無遲滯早々參著可被致事。

北陸道督府

執事

三月

○本日達書二通

新潟奉行へ

御沙汰御趣意御請有之候上ハ、其方支配地、水帳、郷帳並租稅未納、皆納、有合金穀共、精細取調、本人早急上京、太政官へ申出、御指圖可相待旨、被仰付候條、此段可相心得候事。

北陸道督府

執事

戊辰三月

○

新潟奉行へ

今般、其方へ御沙汰有之候御趣意書之趣、越後國內代官支配所、並旗下領地共、不殘其方ヨリ及通達、諸取調向等、其方へ御達取計、早々上京御請之義ハ、御出先へ持參可致旨、被仰出候間、此旨相心得、早急處置可有之事。

北陸道督府

執事

三月廿三日

○

但、代官所並旗下領地共、取締之義ハ、追テ御沙汰候迄ハ、最前同様可心得事。

御元服ニ付、大赦之御書付並大號令、制札、農商布告等之御沙汰書御渡相成、支配地、水帳、郷帳、其外精細取調、早速上京、太政官へ可申出云々、御達書之趣共拜承仕候、右ハ累代之主家、莫大之厚恩請居候儀ニ付、此際ニ立至候共、直ニ御請奉申上候テハ、臣子タル者、何分心濟モ不仕候間、差急關東へ申立、都テ御沙汰之通候上ハ、速ニ上京仕、御達之通遵奉可仕候得共、申立方相濟候迄之間、凡日數廿五日御猶豫御座候様、御聞濟之程偏ニ奉願候、恐惶謹言。

新潟奉行 白石下總守名代 兩番上席 新潟奉行支配組頭

田中廉太郎

三月廿三日

○

今般、新潟奉行へ、御沙汰候御趣意書之趣、越後國內代官、支配所、旗本領共、不殘及通達、諸取調向等、其方へ御達通取計、早々上京御請之儀者、御出先へ持參可仕旨被仰出候間、此旨相心得早速所置可仕旨、御達之趣承知仕候、尤越後國代官、當今詰合無之候間、手附手代共へ、御沙汰書等相渡候儀如何ニ付、御受罷出候迄ハ、新潟奉行ニテ相心得居候様可仕奉存候、御請旁此段申上候、以上。

新潟奉行 白石下總守名代 兩番上席 新潟奉行支配組頭

田中廉太郎

三月廿三日

○

○白石千別筆記ニ云、戊辰三月十三日、高田表北陸道總督ヨリ之召狀、新潟官舎へ相達候處、其頃所勞ニ付、名代トシテ組頭田中廉太郎差出、同月廿二日、大赦大號令等之御沙汰書、於御旅館御渡相成、其節右御請猶豫之儀申立、廉太郎罷歸、前段御沙汰之次第具ニ承知仕候處、右御請書之儀ハ、一應舊主徳川慶喜へ申立候上ニテ差出度所存之處、其頃一時道中筋混亂、江府音信一切絶果、不能其儀、病中押テ參府イタシ候、後四月十九日、淺草千束村舊六郷邸内、北陸道總督御旅館へ罷出御請書差出候、但四月五日、新潟發足、同月十六日江戸著、尤田中廉太郎儀モ同道、參府イタシ候、再度新潟へ出港不致候、

五月二日、舊幕府ニテ新潟奉行被免、勤仕寄合並ニ成、同年六月廿三日、願出之通隱居イタシ候。
 ○田中光儀手記節略ニ云、慶應四年戊辰之春、光儀新潟之官舎へ在勤之時、北陸道官軍總督高倉三位、四條大夫ヨリ新潟奉行高田表迄可罷出旨、三月十六日御達ニ付、翌十七日出立參趨之處、最早同所出立ニ付、信州坂木宿ニテ追付、本陣へ罷出候處、徳川慶喜反狀云云、制札揭示、其外之儀、參謀津田山三郎、小林柔吉ヲ以蒙御達候處、其頃北海之僻濱へ在勤之光儀、上國之形勢確説更ニ不相辨、江戸表ヨリ之申越モ無之、惟街談巷説ニ迷ヒ居候折柄ニ付、愚慮之趣、左之通御答仕候。
 不容易御達之趣拜承仕候、然ル處、累代之主家、莫大之高恩受居、此際ニ立至候テモ、御達之趣直ニ御請仕候テハ、臣子タル者、何分心濟不仕候間、至急關東へ伺之上御答可申上、夫迄御猶豫之儀奉願候、誠恐謹言。

辰三月廿二日

右之趣、口上書ヲ以申立候處、北陸筋、加州、越前、神原其外皆御請相成候趣、參謀ヨリ談之次第有之候得共、前意固執懇願、遂ニ御聞届相成、一ト先新潟表へ引取候上、取締方其外申談、直ニ江戸表へ出立仕候處、途中通行屢屬支、於宇都宮ハ香川某之陣中ヨリ被差留候得共、譯柄辨解、四月初旬江戸府へ着、前顯相伺候處、舊主家ヨリ下知狀相渡候、文面左之通、
 覺、

救命ニ候得ハ、都テ御沙汰之通遵奉可致事、

辰四月

右之書付受取之、四月廿三日江戸府出立、三國峠へ差掛候時ハ、戰爭之翌日ニ有之、北越六日町驛着之節ハ、戰爭中ニ候得共、同所ヨリ強テ川船ニ乗組、戰陣前乘下リ、小千谷驛ニオイテハ、通船被差留、兵隊ニ被取圍、軍艦岩村高俊之前へ被引出、賊黨ニ候得ハ、既ニ刎首ニ可被處語氣ニ候處、三月以來之顛末、並戰爭之圍ミヲ受居候新潟地へ罷越、官賊兩軍之間ニ孤立シテ、管民鎮撫可罷在見込等演説之處、光儀之節操了解相成、此陣中通行被差許、五月二日新潟表へ著船之處、市民之歡不ト方、老弱男女、市中大半新潟之川端へ出迎ヒ、戰爭中之安著ヲ祝シ、兵火亂暴等之防キ等歎願申出、直ニ登廳、其節之支配、

組頭、廣間役、定役以下一同呼出シ、主家恭順之趣意申聞セ、軍事ニ關セス、戰爭傍觀落著可相待旨申諭シ候處、詰合之面々ハ何レモ領會仕候。

○按スルニ、尋テ千別職ヲ罷メ、會津以下ノ逋逃者、交新潟ニ來リテ光儀ヲ脅迫ス、故ヲ以テ、光儀遂ニ簿書ヲ齎シテ、入京スルヲ果サス、五月晦日ニ至リ、光儀本廳ノ事務ヲ米澤人ニ交付ス、其條ヲ參看スヘシ。

○二十四、二督、坂木驛ヲ發シ、上田^{松平忠禮}ノ治所ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿四日、坂木御發向已刻、上田御著未刻、御兩卿様御違例ニ付、於當驛御逗留被仰出候事。

二十五日、安藝藩兵軍令ヲ犯ス者アルヲ以テ、督府、本藩ニ令シテ、其罪狀ヲ按檢セシム、本藩乃チ犯者ヲ罰ス。

藝藩 隊 長 中へ

其藩人數、是迄往々不法之義有之候得共、寛大之 思召ヲ以、其儘被差置候處、此節又々坂木宿ニオキテ、不容易舉動有之趣相聞へ、重々不届之至、此條於軍法難差免、此度可被處嚴科候條、左之方止宿被在候者、嚴重取調、罪科輕重相糺、早々御本陣へ可被申出事。

三月

坂木宿立町	松葉屋五郎兵衛	大門町	油屋安右衛門
同立町	松屋八五郎	督府	參

北陸道先鋒記

○先鋒記ニ云、三月廿七日、過日藝藩へ御達有之處、隊長中ヨリ御斷書差出、不埒之者三人、隊中ニテ所置之旨届來ル、左之通り。

切腹	新田嘉介	同堀田與介
----	------	-------

歸京片桐太三郎

○ 其藩人數之内、往々不法之義有之候得共、寛大之思召ヲ以、其儘被差置候處、過日於坂木宿不埒之間有之候ニ付、糺明被仰付候處、軍令且其藩法律等ニ相背候義ヲ以、新田嘉介、堀田與介、右兩人切腹被申付候段、達 御聞候處、法律トハ乍申、不便ニ被爲 思召候、依之、葬送可爲勝手之條御沙汰候事。

三月廿七日

督府 執事

藝州隊長 中北陸道先鋒記

○二十六日、二督、上田ヲ發シ、小諸ノ牧野康濟ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿六日、晴、上田御發向辰刻、小諸御著未刻。

○土御門氏ノ臣田中某^{内藏}等、小諸傍近ヲ横行シ、良民ノ妨害スルヲ以テ、督府、小諸藩ニ令シテ之ヲ緝捕シ、京師ニ護送セシム。

土御門殿家來

田中内藏介

右之者、兼テ 御沙汰通、其藩ニテ召捕被遂吟味候處、其儘難被差置義有之候條、本人附屬之者共、其藩ニテ京都御取締役所へ嚴重護送可被引渡旨、被 仰出候條、此段致通達候。

三月

北陸道督府

執事

牧野遠江守殿 役人衆中

○再達書

本人 田中内藏介 附屬 池田鹿之助

辰ノ五十歳

辰二十八歳

同 岡村山城 同 三惠野松藏

辰三十九歳

辰二十歳

右之者、兼テ 御沙汰之通、其藩ニテ被遂吟味候處、其儘難被差置義有之條、其藩ニテ本人附屬之者共、太政官へ護送可有之旨、被 仰出候間、此段致通達候。

北陸道督府

執事

三月

牧野遠江守殿 役人衆中

○二十七日小諸藩上申書 覺、

牧野遠江守家來 押兼文三郎 小林俊左衛門

警固 足輕小頭 壹人

足輕 拾人

右之通、囚人召連上京仕候、此段申上候、以上。

三 月以上北陸道先鋒記

○北征紀事ニ云、三月廿六日、土御門家臣田中内藏等ヲ捕へ、小諸藩ニ命シ、護シテ京ニ送ラシム、廿七日、東山督府ニ書ヲ致シ、告ルニ田中内藏ノ罪狀ヲ以テス、東山道管ニ囚テ也。

復古外記 北陸道戰記 第三 明治元年三月二十六日

土御門家家來 田中内藏介 並隨從者

右ハ難捨置始末ニ付、取調候處、不埒之儀有之、迅速其御府へ可申入本意之處、掛り合之次第、不得止事別紙之通り所置致候間、此段爲念申入候、尤 太政官へハ早速申入置候間、左様御承諾可給候、仍早々如此候、不音。

三月廿七日

永隆平 祐

追申、津田山三郎ヨリ定テ荒々可申上ト存候、此段申入候也。

岩倉大夫殿 八千丸殿

○別紙

田中内藏介

右之者、土御門家ヨリ陰陽道爲取締方致出張候旨ニテ、此頃信州小諸滞在、領内賣卜活計之者ハ勿論、書肆、印刷師並賣曆、修驗等之者、一々呼集、押テ許狀金進納申付、莫大之金子ヲ食リ取、旅籠料壹人ニ付百一文定ニテ押拂イタシ、其上自分並附屬之者而已ナラス、右呼集候族ニ至迄、滞在中ハ同様之振合ニ取行ヒ、時々ハ數十今日之止宿無料ニテ立去候个所モ有之趣、右之者順歴之藩々ニハ、上下共同様迷惑在候趣、彼是ヨリ歎訴不少候、然處、過日此先手探索方之者、同表迄罷越候節、當役人共、右之次第申入候様子ニ付、此時機ニ乘シ、万一無頼之徒、此等之所業ニ及候哉ト相心得、直ニ本人へ致應接候由ニ候得共、一圖ニ我意ヲ申募リ、悔悟之體モ無之趣、手元へ及注進候故、早速同藩へ召捕、可達吟味旨申付處候、最前トハ大ニ相違、即別紙之通ニテ謝罪申出候趣候、素ヨリ土御門家出張之者ニ相違ハ無之哉ニハ相聞候得共、此一新之御場合、右體之者 朝威ヲ假リ横行候様ニテハ、人心ニ關係之儀不少、如何ニモ難默止ニ付、右附屬之者共都合四人、同藩へ護送申付

差上セ申候、御詮議之上、御裁判可給候也。

但、信州地方ハ、此手專任之个所ニ無之儀ニ候得ハ、卒爾右様之所置ニ及候テハ、如何敷儀ニ候得共、各所ヨリ歎訴之廉モ有之、土人眼前苦情難致猶豫候ニ付、無據右之次第ニ取計候間、御斟酌可給候也。

三月 東山道總督府叢紙

二十七日、二督、小諸ヲ發シ、輕井澤驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿七日、小諸御發馬辰刻、輕井澤御著未半刻。

二十八日、二督、輕井澤驛ヲ發シ、松井田驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿八日、兩、輕井澤御發馬辰刻、松井田御著酉刻前。

二十九日、二督、松井田驛ヲ發シ、安中^{板倉勝殿}ノ治所ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月廿九日、晴、松井田御發馬辰半刻、安中御著午刻前。

晦日、二督、安中ヲ發シ、高崎^{大河内輝}ノ治所ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、三月卅日、晴、安中御發馬午刻前、高崎御著木刻。

復古外記 北陸道戰記 第三 終

元修史局掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

北陸道戰記 第四

自明治元年四月朔日 至同 十八日

○四月朔日、二督、高崎ヲ發シ、熊谷驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、四月朔日、高崎御發馬卯刻、熊谷御著酉刻。

○督府、青山幸宜、勤王ノ實蹟アルヲ以テ、其越前ノ管地ヲ復ス。

○青山幸宜家臣歎願書

主人峰之助儀、越前國ニ領分有之候處、主人彌以勤 王可仕旨、分明御分被遊候迄、福井侯へ御預相成候旨、去ル二月十八日、於福井表被 仰渡候儀ニ御坐候、然ニ弊藩之儀ハ、東山道鎮撫岩倉殿ヨリ、飛州高山、並濃州笠松取締被 仰付、夫々出勢仕、且又御巡向ニ付出兵被 仰付、是又出勢、自今御後軍相勤罷在、主人儀、當今上京罷在、勤 王實効相顯候付、士民王化ニ服候様可仕旨被 仰渡、本國濃州郡上領分之儀モ、無異儀領知罷在候儀ニ付、越前國領分之儀モ、福井侯御預之儀、何卒速ニ被爲 免被下候様仕度、御進軍先へ出願可仕旨、重臣共申付候間、此段奉歎願候、以上。

四月 一 日 青山幸宜家記

濃州郡上

青山峰之助

其許儀、勤 王實効分明之條御聞届ニ付、兼テ越前家へ御預置之領知、如舊御渡被成候間、從越前家御受取可被成候事。

辰 四月

北陸道督府

執

事

○幸宜家記ニ云、四月一日、北陸道總督高倉殿熊谷驛御陣營へ、越前詰家來之者ヨリ歎願書差出候處、別紙御達書ヲ以、如舊同所領地御戻被成候間、越前家ヨリ請取候様被 仰渡候。
北陸道先鋒記 青山幸宜家記 上ノ達書ヲ指ス

濃州郡上

青山峰之助

右、越前國內ニ有之領地、先般勤 王實効相顯候迄、越前家へ御預ケ置之處、今般彌以勤 王實効分明之旨御聞届ニ付、右御預ケ之領地、如舊青山家へ御渡相成候條、被 仰渡候間、其旨御取計可被成候事。

北陸道督府

執

事

辰 四月

越前少將殿 役人衆中

濃州郡上

青山峰之助

右、越前國內ニ有之領地、先般勤 王實効相顯候迄、當家へ御預置之處、今般彌以勤 王實効分明之旨 御聞届ニ付、右預ケ之領地、青山家へ如舊御渡相成候條、被 仰出候間、其旨御達之趣奉拜承取計申候、右御請申上候、以上。

復古外記 北陸道戰記 第四 明治元年四月朔日

四月十四日

越前少將内

大井彌十郎
千本彌三郎

○主人峰之助越前國領地如舊御渡被成下候段、四月二日、朔日、於熊谷驛被仰渡、其段主人へ申聞、同十四日、越前家へ及掛合、領地如舊請取安堵仕候、此段御届可申上旨、從國許申越候、此段御届奉申上候、以上。

青山峰之助家來

坂田又右衛門

閏四月日

御總督府 御執事中様以上北陸道先鋒記

○本條、上申ノ日ヲ佚ス。

二日、二督、熊谷驛ヲ發シ、大宮驛ニ抵ル。

○北陸道先鋒記ニ云、四月二日、熊谷御發馬卯刻、大宮御著酉刻。

三日、二督、大宮驛ヲ發シ、千住驛ニ抵ル。

○北征紀事ニ云、四月三日、千住ニ次ス。

四日、二督、千住驛ヲ發シ、江戸ニ入り、淺草東本願寺ニ次ス、諸藩兵ヲ部署シ、緩急互ニ相救應セシム、又北陸道諸藩ニ令シテ、軍糧ヲ購買シ、之ヲ行營ニ運輸セシメ、且藩兵及ヒ、銃器ノ江戸藩邸ニ在ル者ヲ徵ス。

○高倉永祐事蹟ニ云、四月四日、東京淺草本願寺懸所へ砲陣ヲ構フ。

○北征紀事ニ云、四月四日、陣ヲ淺草本願寺へ轉ス。

○附錄一條

當月四日朝、武州千住筋ヨリ松平越前守殿家來之由、南部彦助ト申者、當懸所へ罷越申談候ハ、今日北陸道御總督高倉三位殿、四條大夫殿、右御附添越前守藩士始、諸侯藩士ニテ凡人數千人餘罷下リ候間、御附添共一纏ニ當懸所、并懸所境内寺々等借用致シ度旨申聞候ニ付、則懸所内夫々明渡シ申候由ニ御座候、仍テ右之段御届被申上候事。

本願寺東御門跡使

石井左傳治

四月十九日

辦事御役所辦事局 叢書

○諸藩兵部署

- 一 淺草先手急有時ハ、西道筋若州勢之手ヲ分チ、傳法院裏門間道ヨリ應援スルヲ要ス、
- 一 西道筋若州手急有時ハ、同筋田中止宿之越後勢、並大音寺前肥前半隊、駿速救應スルヲ專要トス、
- 一 大音寺前肥前手非常之節ハ、越後勢、若州手共、前條同様覺悟スヘシ、
- 一 本陣裏肥州一手事アル節ハ、馬道高田勢相應シ、高田勢事アル節ハ、馬道肥前勢相援ケ、淺草勢急アレハ、肥州勢ヨリ相救ヒ、都テ結連一貫スルヲ要ス、
- 一 淺草近邊放火之時ハ、勢ヲ門内へ荅メ、應變ノ策ヲ建ルヲ要ス、
- 一 馬道筋放火之節ハ、肥州、高田兩勢、速ニ勢ヲ本陣東道筋へ纏、賊徒ノ攢入ヲ防クヘシ、
- 一 諸手共、夜分ハ別テ巡邏ヲ嚴重ニシ、白晝タリトモ遠出ヲ禁ス、放火ノ節、決テ動搖無之、自分々々ノ持場ニテ、列伍ヲ整ヘ動靜ヲ窺フヘシ、
- 右、防禦ノ大概ノミ、餘ハ臨機ノ活斷有ンコトヲ要ス。

辰 四月 北陸道先鋒記
淺野長勳家記

○本條、原記日ヲ闕ク、因テ此ニ合叙ス。

○北征紀事ニ云、四月三日、三日蓋四日ノ誤、北越十一藩ニ命シ、江戸在陣中ノ兵食ヲ給セシム、十一藩ノ士卒、江戸ニ在ルモノニ命シ、諸處ヲ警備セシム。

○北陸道藩々、高壹万石ニ付糶米六石宛之割合ヲ以、糶米方被 仰付候條、其旨被相心得、東本願寺御本陣へ急速運輸可被取計候、尤代料ハ追テ御下渡可有之候事、
但、石數多少ニ不係、調次第可被相納候。

北陸道督府

執事

四月四日

高田藩 新發田藩 村上藩

與板藩 村松藩 椎谷藩

黒川藩 三門市藩 三根山藩神原政敬、溝口直正、堀直弘家記、三門市藩記

○五日達書

北陸道藩々、高壹萬石ニ付糶米六石宛之割合ヲ以、糶米被 仰付候條、其旨被相心得、東本願寺御本陣へ草々運送可有之候、尤代料ハ追テ御下渡ニ相成可申事。但白米、

督府 執事

四月

大野藩留守居家中土井利恒家記

北陸道藩々、高壹万石ニ付糶米六石宛之割合ヲ以、糶米方被 仰出候條、其旨被相心得、東本願寺 御本營へ、早々運送可有之候、尤代料ハ追テ御下渡ニ相成可申候事、
但、石數多少ニ不係、買入次第、白米ニテ可被相納候事。

督府 執事

四月

加州留守居 中前田慶寧家記

○本條、宣達ノ日ヲ佚ス。

○藩々當邸中詰合之兵隊人數、並砲器彈藥多少ニ不拘、御本陣へ可差出候旨、御沙汰ニ候間、此段御達申候。

督府

執事

四月四日

越後國九番 御髓從衆中神原政敬、溝口直正、堀直弘家記

○政敬家記ニ云、四月四日、參謀役小林柔吉口演、

一 砲器彈藥之儀ハ、有次第可差出旨、大砲御不足ニ付、其方御拜借之方被 仰出候、別段調達差出ニハ不及旨、

一 糶米之儀ハ、高並ニ不揃候共、少々成共、淺草御本營へ可差出候、

一 諸藩へ御順達之御書付、以模寄急速、夫々ヨリ御本營へ御請可申出候、

○十日達書

一 其藩當邸内詰合兵隊砲器等、當御本陣へ被差出候様被 仰出候事、

一 北陸道筋藩々、高壹萬石ニ付糶米六石宛之割合ヲ以、糶米方被 仰付候間可差出候、猶代料ハ追テ可被下、依テ買入次第、

白米ニテ多少不係、早々調達可有之事。

北陸道總督

執

事

四月 酒井左京亮 役人中 酒井忠經家記

○ 其藩邸詰合之兵隊人數、並砲器彈藥多少ニ不係、御本營へ可被差出旨 御沙汰候事。

督府

執

事

四月

加州藩留主 居中 前田慶寧家記

○ 本條、宣達ノ日ヲ佚ス、按スルニ、自餘北陸道諸藩モ亦、前件ノ命アリシナラン、然レトモ其宣達書ハ諸書見ル所ナシ。

○ 今般當地御下向ニ付、邸内詰合之兵隊人數、並砲器彈藥多少ニ不拘、御本陣へ可差出旨被 仰渡奉畏候、然處、先般於京都表御届申上候通、左京亮一先歸邑仕候ニ付、人數召連出立仕候、就テハ當邸内之儀ハ、全屋鋪守之心得ヲ以テ、極々少人數殘置候儀ニテ、別紙相認候通ニ御座候、砲器彈藥之儀モ、追々人數引拂候儀ニ付、有合之分不殘、去月廿六日、船積ニテ在所へ相廻候ニ付、御用辨ニモ不相成奉恐入候、不惡御聞濟奉願上候、此段御届申上候。

堀左京亮家來

野口彦兵衛

政名花押

四月五日

御兩卿様 參謀 御用掛 御中

○別紙

當邸内兵隊人數覺、

士分四人

足輕以下 四人

足輕 七人

外ニ 中間體之旨^(者數) 十二人

小銃 五挺

右之外、人數武器等一切無御座候、以上。

堀左京亮家來

野口彦兵衛

北陸道先鋒記

四月五日

○堀直弘家記ニ云、四月糶米方被 仰付候米拾八石、五日、六日、七日ト三度ニ上納仕、會計方ヨリ左之通證書請取置申候、請取申糶米之事、

合米拾八石也 此高三萬石 但高壹萬石ニ付米六石ツ、
右ハ北陸道 御總督並御先鋒御進軍ニ付、爲糶米買上ケ差出候様被 仰付候處、書面之通被相納候ヲ請取申候、重テ代金御下渡、此手形引替可申モノ也。

北陸道

御總督府會計方

國枝岩太郎印

南部彦助印

慶應四辰四月七日

堀左京亮殿 留守居へ

昨日重臣之者へ、壹萬石ニ付糶米六石之割合ヲ以テ、糶米可仕旨、此間、恐クハ、脱文アラン、右京亮高二萬石ニ付拾二石、今日皆納仕候、代金追テ御下渡相成候様被 仰渡候、右ハ、獻米仕度、此段奉伺候、以上。

井伊右京亮家來

笹本務

井伊直安家記

四月五日

○本條、指令見ル所ナシ、閏四月ニ至リ、越後諸藩ト共ニ獻糧ノ再請アリ、閏四月九日ノ條ヲ參看スヘシ。
○直安家記ニ云、四月四日、總督府ヨリ藩々、當邸内ニ詰合之兵隊人數、並砲器彈藥等多少ニ不係、御本陣へ可差出御達ニ付、則人數差出申候。

- 一兵士 三人 一足輕 五人 一大砲 壹挺 一玉 二拾位 一火藥 二貫目位

右之通、當邸内ニ用意御座候、此段御届申上候、以上。

柳澤伊勢守内

加用出石

正信香

四月五日

御兩卿様 參謀 御中 北陸道 御用掛 御中 先鋒記

○ 藩々、當邸内詰合之兵隊、並砲器彈藥多少ニ不拘、御本陣へ可差出御沙汰之旨、被 仰渡奉畏候、然ル處、當時多分在所表へ差遣シ、江戸表家來人少御座候、依之、兵隊之者五人差出シ可申候、其外、砲器彈藥有合無御座候、此段御届申上候、以上。

柳澤彰太郎家來

四月五日

參謀 御用掛 御中 柳澤德 中 忠家記

柳澤隼之輔

○ 德忠家記ニ云、四月五日、兵隊五人、北陸道總督府御本營へ出張、又云、四月四日御達ニ付、翌五日御本營東本願寺へ相納候糶米六石也。

○ 御書付之趣奉拜承、御用米並兵隊人數、砲器彈藥多少ニ不係、御本陣へ差出候様、御沙汰之趣奉畏、早速御用米買入方手配仕候處、漸米六拾石出來ニ付、不取敢相納申度奉存候、且又人數之儀ハ、追々總引拂、居合人數無御座候、且兵器之分モ、都テ國許へ差遣候ニ付、此表ニ更ニ無御座、乍少分合糶二百貫目餘在合候ニ付、御差圖次第差出申度御座候、宜御沙汰可被成下候、以上。

越前少將内

白井又次郎

北陸道先鋒記

四月六日

○ 覺、

- 高五萬九拾石餘 一糶米 三拾石五升四合 但白米
- 一ホートホウイツル 壹挺 一ミニヘール銃 三拾挺 一ケヘール銃 二拾挺 但玉藥共
- 一人數 七人

内藤紀伊守家來

四月六日

美濃部 貢

○ 覺、

- 一 亞國ホート 壹挺 附屬之品共
- 一 フリツキ彈 二拾五放
- 一 火藥三貫 壹樽
- 一 マサツカン 百放
- 一 引繩 二把
- 一 ハトロンタス 二提
- 一 カンタス 壹提 但、火門針付、

右之通御座候、以上。

四月七日

内藤紀伊守家來
美濃部 貢

以上北陸道先鋒記

○ 内藤信美家紀ニ云、四月、勅使御附添出兵被 仰付候ニ付、乍寡少人數、並米穀器械等差出候。

○ 高田藩上申書

- 一 兵隊人數 拾壹人 一野戰筒五百目 壹挺 但玉藥百發
- 一 自在砲百目 壹挺 但同斷

右之通御座候、以上。

四月七日

久代勘右衛門

榊原政敬家記

○ 政敬家記ニ云、四月四日、御達御座候ニ付、糧米之儀、即刻白米有合拾俵、先不取敢差出候ニ付、御附添之用人目附兩人ニテ爲持罷出、參謀役へ差出之、餘ハ追々指出候事、

同七日、勅使御本營へ池端下邸ヨリ納米運送ニ付、目付竹尾藤右衛門罷出、兵糧方へ相納候、米數左之通、

一 糧米白米拾五俵 但四斗入

此米六石

一同拾五俵

但三斗八升五合入

此米五石七斗七升五合

メ米拾壹石七斗七升五合

同八日、曉七時頃、淺草 勅使御本營ヨリ用人長谷川唯四郎、目付竹尾藤右衛門、池之端下邸へ罷越演說左之通、

勅使御本營へ、新發田藩重役宮北郷左衛門御呼出ニ付、同人罷出候處、參謀御用掛小林柔吉申聞候ハ、差向兵隊御必用ニ付、精々吟味致シ、當邸内詰合之人數、明日晝時迄ニ指出候様、尤其藩、未タ引殘之人數モ有之趣ニ致承知候間、可成丈人數増差出候様申聞、畢テ高田藩重役呼立可申渡儀ニ候得共、夜更ニ相成候間、乍憚御許ヨリ傳達致吳候様ニトテ、郷左衛門、久代勘右衛門下陣へ罷越、前條之趣申聞候事、

右ニ付、精々吟味取調之上、左之通兵隊指出之、

覺、

一 平士貳拾貳人 内差圖役四人 一物頭七人

一 鐵砲足輕三拾貳人 但此内去ル六日、恐クハ七日ノ誤、拾壹人指出候分共組込差出候事、

一 太鼓役 貳人 一醫師 壹人 一目付 貳人

一 中間目付 三人 一物持中間 拾人

○ 閏四月十一日、池之端邸ヨリ納米白米五拾壹俵差送、勅使御本營兵糧方へ、目付竹尾藤右衛門ヨリ納之。

記

當邸内詰合之兵隊人數、並砲器彈藥多少ニ不拘、御本陣へ差出候様御達ニ付、詰合人數砲器共取調、左之通奉伺候、

一兵隊之義ハ、京都並在所表へ差遣、當時詰合無御座、尤家中取始末之爲少々居殘之者モ御座候得共、何レモ必用之者ニテ、無程差下候者ニ御座候得ハ、如何可仕哉之事、

一砲器之義、不殘在所表へ差下、尤「フランスポルト」一挺、兼テ京地人數ヨリ爲登之義申越候ニ付、相殘置候處、尙又此度、東征二ノ手出張被 仰付、去月廿六日、京地發足致シ候ニ付、砲器類用意致置候様、申述候義ニ御座候間、是又如何可仕哉之事、

一火藥五十貫目程、近在屋敷ニ有之候處、前條同様、京地ヨリ申越候義ニ御座候間、夫是如何可仕哉、御差圖被下度事、右之通奉伺候、以上。

溝口誠之進内
宮北郷左衛門

○批紙

四月七日

第一條 被差出ニ及不申候事、

第二第三條 「フランスポルト」竝彈藥共、早々當府へ可被差出候事。溝口直正家記

○直正家記ニ云、參謀中へ右之伺書差出候處、付札之通、御指令ニ付、砲器彈藥相添、御本陣へ相納候事。

覺、

- 一拾二拇ホート 壹挺 但壹包 一車臺竝車カルカ共 但二包
- 一打藥割藥共 半長持一棹 但壹包 一榴彈 五拾 但五包
- 一散彈 二拾 但壹包 一諸道具長持 壹棹
- 内
- タス 一二ツ 水桶 壹ツ 打鐵 一組 ナツフセト 一組 鷲管 七拾本

- 摩管 三拾本 紙管 二拾本 木ホイス 三拾本 引綱 壹本
- 打木 壹本 アラ木 壹本

右之通奉差上候、以上。

四月八日

溝口誠之進内
宮北郷左衛門

○

覺、

一フランスポルト 壹挺 但小道具無御座候、 一合藥 三拾八貫匁 但二タ箱
右之通奉差上候、以上。

四月七日

牧野伊勢守内
多賀谷 貢

以上北陸道先鋒記

○牧野忠泰家記ニ云、四月中、於東京有合人數竝器械糧米差上候様、從御兩使御達之處、詰合人數無之ニ付、左之通官納致シ候、

一アメリカポルト 壹挺 一糧米 六石六斗

其後、ポルトハ御用濟御下渡ニ相成。

○

今度糧米運送方之儀、以 御書付被 仰渡奉畏候、就テハ急速手當方可仕筈ニ御座候處、先般遠江守上 京、引續家族共在

所へ引越候付、莫大之入費差湊、其上役々一同、當邸引拂候折柄、如何ニモ即今之御用辨難調、進退失途之仕合御座候、然ル上ハ、遠江守方へ申遣、上納仕法之儀申付越候迄、日限御猶豫之儀、只管奉願候、以上。

四月九日

有馬遠江守家來

久能(失) 柄

○ 今般糧米運送之儀、以 御書付被 仰渡奉畏、則上納方之儀、其初歎願仕候通之次第柄ニ付、不願恐入候、一時日限 御猶豫奉願候得共、元々 御趣意柄之儀ハ、厚奉敬承居候儀ニテ、其後無油斷盡力仕候、乍去、當時勢柄兎角不行届、時日延引相成深奉恐入候、然ル處、此節聊糧米操合モ相整候ニ付、不取敢上納方仕度奉存候、此段奉伺候、以上。

四月十五日

有馬遠江守家來

鷹屋 堅藏

以上北陸道先鋒記

○ 本條、指令見ル所ナシ、蓋、其請ヲ聽セシナラン。

○ 一白米 六石 此依十五俵 但四斗入
右之通相納申候、以上。

四月十五日

酒井左京亮家來

藤井安右衛門

○ 請取申糧米之事、

合米六石也 此高壹萬石

右ハ北陸道 御總督、並御先鋒御進軍ニ付、爲糧米買上ケ差出候様被 仰付候處、書面之通被相納候ヲ請取申候、重テ代金御下ケ渡、此手形引替可者也。

慶應四年辰四月十五日

北陸道 御總督會計方

國枝 岩太郎

南部 彦助

酒井左京亮 留守居以上酒井忠經家記

○ 土井利恒家記ニ云、四月五日、御達ニ付、翌日白米十二石相納候處、同八日、御模様替ニ付、跡米ハ不及差出旨御達有之、同十一日、代料御下ケ渡ニ相成候事。

○ 前田利惣家記ニ云、三月、四月、因御達北陸道御進軍先へ、兵糧白米指出。

○ 附京師へ申請書

北陸道 御總督様ヨリ於江戸、御本營へ家來之者被 召呼候ニ付、居殘候留守居役之者參上仕候處、御沙汰之條、別紙上ノ違書ヲ指ス、寫之通被 仰付候、依之、糧米之儀、貯無御座候得共、買入御用相勤申候、人數之儀ハ一切詰合不申ニ付、御請難仕段、參謀案へ申達候處、左候ハ國許へ申運可差出旨申談之由、國許へ告越候ニ付、人數差立候手筈之旨、此表へ申越候、然處、今般北陸道鎮壓被 仰付、出兵仕候儀ニテ、既ニ御當地詰人之内、差戻シ申度奉願候趣モ御座候間、江戸表へ人數差出候儀ハ、被爲 免被下候様仕度、此段奉願候、以上。

加賀中納言内

里見亥三郎

四月

○ 京師批紙

復古外記 北陸道戰記 第四 明治元年四月四日

江戸表人数出張被 免候事。北陸道先鋒記

○本條、申請及ヒ批紙ノ日ヲ俟ス。

○肥前藩兵六百、江戸ニ至ル。北陸道先鋒記 鍋島直大家記

八日、軍防局、軍行規約及ヒ饋餉ノ費額ヲ定メテ、督府ニ牒報ス。

別紙二通之通、今般御規則被爲立候ニ付、三道出兵之藩々へ御通達可被成候、以上。

四月 八日

軍防局

○別紙二通

一行軍之節、駕籠一切可爲無用事、

一病氣足痛等候ハ、驛所へ滞在、加療養平愈次第、其手々々へ可致參陣候事、

一軍醫診察之上、急ニ出陣難調病症之者ハ、夫々へ可送返事、

右規則之通、永世可相守者也。

四月 八日

軍防局

○

壹日壹人ニ付 一白米六合 一金 壹朱

右之通、諸軍一同現人数ニ應シ、藩々頭立候者へ十日分ツ、出張之會計方ヨリ可相渡候事。

四月 八日 北陸道先鋒記

○是ヨリ先、東海道先鋒總督、勅旨ヲ傳ヘテ、徳川慶喜ヲ水戸ニ幽ス、是ニ至リ慶喜、江戸ヲ去リテ、水戸ニ赴カントス、途千住驛ヲ經ルヲ以テ、督府、諸軍ヲ戒飭シテ、粗暴ノ舉動アルコト

勿ラシム。

○諸軍へ達書

徳川慶喜、明後十日水戸表へ引取候趣ニテ、千住宿晝休致候旨及注進候、就テハ諸手飽迄鎮靜、暴發箇間敷養有之間敷旨御沙汰候間、此段執達如此候、以上。

戊辰 四月 八日

會議所

與板藩記

○北征紀事ニ云、四月八日、田安中納言、使ヲツカハシ云ク、徳川慶喜、明後十日水戸ニ退去ス、千住驛ニ於テ晝舖ス、故サラニ督府ノ許可ヲ請フ、之レヲ許ス、十日慶喜上途、明十一日ニ延緩ス。

九日、二督、移テ本莊藩邸淺草ニ在リニ陣ス、明日、傍近庶民ニ諭令シテ、各其堵ニ安セシム。

○北征紀事ニ云、四月九日、陣ヲ六郷兵庫頭淺草邸へ轉ス、是ヨリ先キ、東本願寺掛所ニ在リ、此地、本營ノ地ニアラス、此ニ轉陣ス。

○六郷政鑑家記節略ニ云、四月九日、北陸道總督高倉三位殿、四條大夫殿、是迄東本願寺ニ御陣營相成居候處、俄ニ淺草觀音後兵庫頭屋敷へ御旅館ニ相成。

○千住驛御不便利ニ付、東本願寺へ 御本營被爲据候處、徳川慶喜、恭順奉 勅之實効相立、水府へ引取ニ相成候趣、就テハ市中御在陣被爲在候テハ、當地人心安堵居合兼候儀モ可有之間、一先市中御引拂、六郷邸へ御移陣ニ相成候、右御趣意爲御心得相達候事。

四月 九日

督府 執

事

越後 十藩御中 若州 隊長衆中
藝州 隊長衆中 肥州 隊長衆中

追テ、早々御順達返上候様致度候事。榑原政敬家記 井伊直安家記

○政敬家記ニ云、右ニ付常藩人數ハ淺草田町へ宿陣、御本陣近所御番所一ヶ所へ番人差出候様、御達ニ付足輕差出置候。

○六郷邸へ御移後御定之事、

一御本陣人數並詰込、都テ是迄之通り兵糧方ニテ取扱之事、
一御本陣外賄之分ハ、其藩々糧米壹人ニ付、七合ト金壹朱ト錢百文御渡申候間、其藩々ニテ小荷駄ヨリ取賄可有之事、
一夜具其外道具類、是迄御渡シ、其儘其陣所々々へ、其藩々ニテ引取候様可有之事、
一本陣詰之藩々、今夕腰兵糧御渡申候間、爲御心得申入候事。

四月九日

右之通、會計所ヨリ申出候事。榑原政敬家記

○十日、淺草傍近庶民へ達書

千住宿御不便利ニ付、當本願寺へ 御本營被爲据候處、徳川慶喜、愈恭順奉 勅之實効相立、水府へ引取ニ相成候趣、就テハ當地御在陣ニ相成居候テハ、人心安堵致兼候儀モ可有之間、一先ツ市中御引拂、六郷邸へ御移陣ニ相成候間、市中一同安心渡世可罷在様、近邊在町共無遺漏可申觸候事。北陸道先鋒紀事

十一日、督府、土井利與、大炊頭、古河藩主 秋元禮朝、但馬守、榑原藩主 二命シテ、警急ノ際、官軍ノ糧餉ヲ措辨セシム。

土井大炊頭

北陸道 御總督府并御先鋒官軍總御人數、非常之節兵糧仕出シ取扱方被 仰付候事。但、秋元但馬守申合可取計事。古河藩記

秋元但馬守

北陸道 御總督府并御先鋒官軍總御人數、非常之節兵糧仕出シ取扱方被 仰付候事。但、土井大炊頭申合可取計事。古河藩記

秋元興朝家記

○御法令、

一火之用心、禁酒等、堅可相守事、 一身之分限ヲ以、禮節正敷可致之事、 一喧噪口論イタス間敷事、
其外、萬事 督府之可指揮應之事。

辰 四月

北陸道督府

執

事

○本條、發令ノ日ヲ佚ス。古河藩記
非常 兵糧方衆中

○督府、柳澤光昭、伊勢守、黒川藩主 二命シテ、速ニ京師ニ至ラシム、時ニ光昭疾アリ、因リテ子光邦、伊織 ヲシテ代リ赴カシム。

今航伊勢守儀、早々 上京可仕旨、 御達之趣奉拜承候、依之、急速 上京可仕之處、長病ニ付爲代嫡子伊織儀、 上京仕候、此段御届申上候、以上。

柳澤伊勢守内

飯

島

貢

四月十一日

○柳澤光邦家記ニ云、三月十三日、父伊勢守爲名代江戸表出發、四月四日著京仕候。
十二日夜、副總督、諸藩兵營ヲ巡視シ、兵士ヲ犒フ。

○北征紀事ニ云、四月十二日、今夜戌刻余陣中ヲ巡視ス、諸兵一隊毎ニ酒肴ヲ賜フ、但、參謀兩士隨之。
○諸藩兵へ達書

出精之段、太儀被 思召候、依之一統へ御菓子被下候事。
戊辰 四月 淺野長勳、井伊直 安城直弘家記

○直安家記ニ云、四月十二日、於東京出兵屯所御總督御見廻有之候節、參謀中御達。
○直弘家記ニ云、四月十四日、十四日、恐ッハ 右之通御書付ヲ以テ、御菓子被成下、尤代料金壹朱御渡有之。

十三日、徳川氏、歩兵ノ歸順ヲ肯セサル者、田安門傍近ニ屯集スルヲ以テ、東海道先鋒總督、將サニ之ヲ招諭シ、如シ命ニ從ハサレハ、則チ之ヲ勦討セントス、因テ督府ニ移牒シ、兵ヲ要地ニ配置シテ、不虞ニ備ヘシム、督府、乃チ諸藩兵ヲ分チテ、昌平、兩國二橋間ヲ扼守セシム、既ニシテ歩兵、順ニ歸スルヲ以テ、其兵ヲ撤ス。

田安門邊明地ニ屯在之歩兵等凡六百人、歸順不服之様子相見得候ニ付、當手先鋒六藩へ、別紙之通今日相達候、就テハ不虞之暴舉、何方ヨリ差起候哉モ難計存候間、其御手ニオイテモ、別啓之箇所へ御出兵、臨機之御處置被下度、此段得各貴意候様、當府兩總督被申付、仍テ如此候也。

東海道 先鋒總督府參謀

四月十二日

木梨精一郎
海江田武次

北陸道 總督府 參謀御中

別啓、

昌平橋 筋違橋 和泉橋 新橋
淺草見附 兩國橋 柳橋

右之各所へ御出兵被降度候、尤本文明地之歩兵等敗走之節ハ、多分半込又ハ水道橋方角へ落去可致ト相察候間、其段東山道府參謀中へ得貴意置候間、是亦御承知置可被下候、東山道出兵之箇所書人貴覽候間、御落手可被下候。

○別紙

田安門近邊之明地ニ屯在候歩兵共、不服之形容相見へ候ニ付、明十三日早朝、今一應及諭誨、其上ニモ猶不順伏之様子有之節ハ、速ニ可打取之旨被 仰出候、就テハ砲聲等相聞候節、他之暴徒等、何方ヨリ突起候モ難計候間、諸隊申合、別紙之各處、夫々配兵警衛臨機之處置可有之事。

四月十二日

別紙、

東海道先鋒 配兵場所

虎門 新橋 幸橋 見附山下門 數寄屋橋 鍛冶橋
吳服橋 常盤橋 神田橋 一橋 雉橋 清水門
田安門 半藏門 日比谷門 馬場先見附 櫻田門 和田倉

復古外記 北陸道戰記 第四 明治元年四月十三日

右

一會藩人處々潛伏之儀、彌以相違無之趣、其心得可有之事、
一田安門明地之歩兵及砲擊候節ハ、多分牛込、又ハ水道橋方角へ散落可致ト被察候條、其旨、東山道官軍へ申入置候條、爲
心得猶申入候也。

○東山道 出兵場所

赤坂見付 喰違門 四ツ谷門 市ヶ谷 牛込 小石川 水道橋

右以上北陸道先鋒記
東海道先鋒記

○北征紀事ニ云、四月十二日、子刻、東海先鋒參謀ノ書至ル、云ク、逆徒ノ暴發料ルヘカラスト、因テ直ニ人ヲ遣ハシ、諸督
府參謀ト密カニ之レヲ議シ、警備ヲ爲ス、

十三日、昨夜遣ル所ノ使返ル、遂ニ諸隊ヲ整頓シ、賊ノ動靜ヲ覘フ、

東海參謀、書ヲ我參謀ニ致シテ云ク、今日賊徒ト應接シ、如シ不服ンハ速ニ之レヲ擊ツノ議決セリト云々、酉ノ刻ニ至リ、
又書ヲ致シテ云ク、賊既ニ順ニ歸ス、諸軍宜シク兵ヲ收メテ退クヘシ。

○酒井忠祿家記ニ云、四月十三日、九段坂上ニ罷在候歩兵共、歸順不仕候ニ付、精々申諭承伏不仕候ハ、速ニ討取可申旨、熊
本隊へ被御達候間、自然落散候者有之候ハ、於御門討取可申段被 仰出、弊藩儀ハ、總人數筋違御門へ相詰、昌平橋、和泉
橋へ一小隊ツ、分兵仕候、然處、今日ハ、談判御差延相成候付、夕刻引揚申候、同十四日、同處歩兵屋敷諸藩ニテ取圍、熊本隊
ニテ談判有之候由、御門々へモ昨日之通被 仰渡候ニ付、弊藩人數、筋違橋御門昌平橋へ一小隊ツ、差出候處、歩兵共我器
等差出歸伏仕、熊本隊へ御預相成候由ニ付、夕刻引揚申候。

○兇徒、東橋傍近ニ潛匿スルノ聞アルヲ以テ、督府、高田藩ヲ遣シテ、東橋ヲ扼守セシム。

○榊原政敬家記ニ云、四月十三日、敕使御本陣ヨリ御呼出ニ付、御隨從重役久代勘右衛門罷出候處、會議所ヨリ御達左之通、

爲御本陣押東橋へ

榊原 一手

右ハ東橋向へ、胡亂之者潛伏致候哉ニモ相聞候間、諸家人數出張被 仰付、就テハ其藩ニテモ、右場所へ人數差出候ニト
御達御座候ニ付、不取敢繰出シ申候。

○是ヨリ先、古屋某、作左衛門、舊幕
府歩兵奉行其黨千八百許人ト江戸ヲ去テ、會津ニ走ル、既ニシテ越後ニ入
リ、與板ヲ劫掠ス、是日、與板藩、書ヲ督府ニ上テ、其狀ヲ申ス。

井伊右京亮在所越後國與板へ、當月十一日、歩兵頭、同組頭ト唱へ、古屋作左衛門、今井信郎、内田庄司杯申者、歩兵四百人計
召連來リ、重役之者ニ面會致度段申聞候ニ付、則家來小申半兵衛罷出候處、此度當表へ出張致候ニ付、住居明渡候歟或ハ軍
資十萬金指出候歟、孰レ共返答可致旨及強談候間、不容易事柄ト申、右京亮留守中之儀ニ付、一藩熟議之上、返答可致申述
引取、役人共論判致候内、賊兵四方ニ分配、其餘市中横行、商戸へ押入、家財金子等侵掠致候ニ付、兎モ角防戰可致決心ニ
テ、夫々用意候處、何分ニモ少人數ニテ手配等難相付、彼是隙取候内、夜モ明ケ翌十二日ニ相成、賊兵共寺泊、地藏堂兩驛邊
へ引取申候、即刻此段不取敢御届申上候、猶委細之儀ハ、取調、追テ御届申上候、以上。

井伊右京亮家來

小野司之介

北陸道先鋒記

四月十三日

○奥越戰爭日記舊幕府士
某所著、節略ニ云、二月七日夜、三番町屯所ヨリ五、七、八、十一、十二聯隊、砲兵隊等、砲發ヲ合圖トシテ脫
走致シ、下谷廣小路ニ枚橋ニテ勢揃ヲ致シ、會津表へ落延候様ト相定メ、總勢凡千八百人程、三月廿五日、會津若松へ著、夫
ヨリ廿七日、越後國へ出張ト相極リ、四月十日、越後寺泊へ參リ、逗留中、古屋作左
衛門、被仰出候ハ、此度越後口へ出張ノ手

始ニ、與板ト中ス所ニ榊原兵部大輔井伊右京亮ノ誤之皆有之、第一大隊ヲ呼出シ、出張用意嚴重ニ取揃ヘ、今井新太郎後御相談アリテ、今井添隊長ト相定リ、榊原村ヲ越ヘ、役々兵士三百人程ニテ、八時頃ヨリ出張、此日、雨天ニテ笠笠ニテ身ヲ固メ、與板ヘ入込、大手先ヲ固メ、百五十人計ニテ御殿後御庭先之山ヘ籠リ掛合ニ及候處、榊原井伊ノ誤、方降參ニ及候印トシテ、軍用金壹萬兩、兵糧米五百俵差送り、明十一日寺泊リ宿ヘ引戻シ、人數一統ヘ格別之御手當被下候。

十四日、松平容保肥後、藩會津藩主官軍ニ抗シ、其勢益猖獗ナルノ報アリ、是ニ於テ、薩摩、長門、加賀、富山、府中門、五藩ニ令シ、兵ヲ越後ニ出シテ、討會官軍ニ應援セシメ、加賀、越前、郡山、小濱、四藩ニ、薩摩、長門二藩兵ノ供億ヲ措辦セシム、尋テ新發田、村上、村松、與板、三根山、清崎、黒川、三日市八藩ニ令シ、薩摩藩兵等ト共ニ容保ヲ討セシム。

各通 島津修理大夫

毛利大膳大夫

右四方へ人數差出候儀ニハ候得共、松平肥後、益暴激ニ募リ官軍ニ抗シ候段、相聞得候ニ付、北國路へ人數差向ケ、奥羽之官兵へ應援イタシ候様 御沙汰候事。

四月十四日 毛利元徳家記 島津忠義家記

加賀宰相中將

右松平肥後、益暴激ニ募リ官軍ニ抗シ候段相聞ヘ、言語同斷之次第ニ候、依之、今般重テ薩長之人數、北陸道へ被指向候間、三藩申合、北國筋鎮壓致シ候様、被 仰付候旨 御沙汰候事。

四月十五日 金澤藩記

前田 稠松 人數三百人

四月十八日

富山へ

右松平肥後、益暴激ニ募リ官軍ニ抗シ候段相聞候、依之、北越へ被指向候旨 御沙汰候事。

毛利宗五郎 人數二百人

四月十八日

長府へ

加賀、薩州、長州、富山之四藩ヘモ。以下、上文ニ同シ。

四月以上毛利元敏家記

○島津忠義家記ニ云、奥羽ノ官兵ヘ應援被 仰渡ニ付、十番隊隊長山口鏡之助、二番遊撃隊隊長西千嘉、外城三番隊隊長有馬誠之丞、外城四番隊隊長中村源助、大砲半座隊長久永龍助出軍被仰付、黒田了介ヘ應援出軍差引被仰付。

○長門藩戊辰征戰紀略ニ云、戊辰四月十四日、詔シテ曰ク、會賊益暴抗、北陸ヲ擾亂ス、急ニ精兵ヲ以テ奥羽ノ官軍ニ應援

シ、其巢穴ヲ蕩平セヨ、我奇兵六小隊四砲門、菊章ノ大隊旗ヲ受ケ、薩兵ト共ニ京都ヲ發ス、長府報國隊モ亦、朝命ヲ受ケ海路ヨリ能州七尾ニ上陸。

○二十四日、加賀小濱二藩へ達書

今般北陸道爲鎮撫官軍應援、別紙之通り出兵被 仰出候間、國々道筋通行之節、兵糧金米人馬繼立之儀、會計局出張之者へ申談、無差支取計可申様 御沙汰候事。

辰 四月

○別紙

覺、

一人數三百九拾三人 薩 州 一人數貳百六十九人 長 州

メ六百六拾貳人

右四月廿五日進發、

一人數三百四拾七人 薩 州 一人數貳百九拾八人 長 州

メ六百四拾五人

右同廿六日進發、

泊宿附

大 津	但シ同所ヨリ海津迄湖水船行	海 津	敦 賀	今 庄
府 中	淺 水	金 津	小 松	松 任
津 幡	石 動	高 岡	岩 瀬	魚 津
泊	絲魚川	名 立	高 田	

以上、

覺、

一海津ヨリ正田迄 柳澤甲斐守

一正田ヨリ二ツ屋迄 酒井右京大夫

一二ツ屋ヨリ細呂木迄 松平越前守

一細呂木ヨリ高田迄 加賀宰相中將

右割合之通、引受取計可申事。

辰 四月 金澤藩記 酒井忠祿家記

○本條、金澤藩記、宣達ノ日ヲ佚ス、今忠祿家記ニ據ル、又越前、郡山二藩ノ宣達書ハ、原記ヲ佚ス。蓋金澤、小濱二藩ト同文ナラン。

各通 溝口 誠之進 内藤 紀伊守 堀 左京亮

井伊 右京亮 牧野 伊勢守 松平 日向守

柳澤 伊勢守 柳澤 彰太郎

松平肥後、賊徒ヲ集メ、隣境ニ兵ヲ出シ、官軍ニ抗シ、暴激益相募候段、相聞候ニ付、今般薩、長之兵、越後路へ被差向候條、藩々申合、速ニ追討可致旨 御沙汰候事。

四月 廿五日 日溝口直正、内藤信美以下各家記

○松平直靜家記ニ云、四月廿五日、堀左京亮、井伊右京亮、柳澤伊勢守、柳澤彰太郎、右藩々申合、尤指揮之儀ハ、薩長藩へ出先ニテ万端問合、指揮相受候様於京地御達。

○柳澤光邦家記ニ云、別紙上ノ達書之通、御沙汰御座候ニ付、早速在處表へ申達處候、陣屋向收納米取扱兩三名、竝伊勢守附屬兩三名程、其上伊勢守、持病之疝癰發起、日夜難儀罷在、且嫡子伊織儀ハ、家來召連上 京仕居、何分無人ニテ出兵仕兼

候ニ付、右之段越後新發田表御出張先御掛へ御届仕候。

十六日、大總督、昨日ヲ以テ江戸ニ入り、増上寺ニ次ス、是日、諸道總督、及ヒ參謀ヲ行營ニ會シテ、軍事ヲ議ス、二督之ニ蒞ム。

彌御勇健御在陣珍重存候、然ハ明十六日、御軍議被爲在候間、已刻大總督宮、御本陣芝増上寺へ御參陣可有之候、尤參謀御引率可有之候、此旨大總督宮被命候、仍申入候也。

四月十五日

大總督府 參 謀

高倉 三位 殿

四條 大夫 殿北陸道先鋒記

○有栖川宮東征紀略ニ云、四月十六日、東海、東山、北陸、三道並海軍等之先鋒總督、且參謀以下列座、於御前御評議被爲在。

○北征紀事ニ云、四月十五日、津田山三郎ヲシテ書ヲ持シ、東海先鋒府ニ詣リ、軍事ヲ議セシム、答書ニ云、大總督府已ニ著陣、明日營中ニ入りテ事ヲ議セン、十六日、大總督府、諸道督府參謀ヲ召シ、營中ニ於テ軍議ス、已ヨリ西ニ至リテ罷ミ、各歸陣。

○大總督、將サニ明日ヲ以テ、牙營ヲ江戸城ニ移サントス、東海道先鋒總督、乃チ江戸城諸門警守ノ部署ヲ定メテ、督府ニ牒報ス、督府、乃チ諸藩兵ヲ分チテ、昌平、筋違等諸門ヲ警守セシム、既ニシテ大總督、故アリテ移營ノ期ヲ延フ。

明十六日四時、大總督宮御入城ニ付テハ、三道之兵隊、別紙之各處へ夫々配兵警衛可有之、吟味イタシ候間、左様御納得可被下候、若外ニ御心附之儀モ御座候ハ、早々承度候事。

四月十五日

東海道總督府 參謀

木梨 精一郎

海江田 武次

北陸道 總督府 參謀御中

○別紙

北陸道官軍警衛所、

昌平門

筋違門

神田橋

吳服橋

一橋門

右

東山道同斷、

半藏門

田安門

清水門

赤坂門

喰違門

四ッ谷門

市ヶ谷門

牛込門

小石川門

水道門

右

東海道同斷、

和田倉

薩州

馬場先

佐土原

日比谷

外櫻田門

肥後

虎ノ門

伊州

山下門

幸橋

紀州

鍛冶橋

備前

數寄屋橋

右

○但 常盤橋閉切。
雄橋閉切。

大總督宮、明十六日御入城可被爲在之旨御達ニ相成候處、明後十七日ト改メ被 仰出候、尤門々御警衛之儀ハ、過刻御談申入候通り、明十六日ヨリ御守衛ニ相成候様、御取計可被下候、仍此段、更ニ御達申入候事。

東海道總督參謀

四月十五日

木梨精一郎

海江田武次

北陸道 總督府 參謀御中

○ 明十七日、大總督宮御入城之儀御延引被 仰出候、日限之儀ハ追テ可被 仰出旨ニ候、仍此段可得貴意旨ニ付、如斯御座候、以上。

東海道總督府 參謀

四月十六日

木梨精一郎

海江田武次

北陸道 總督府 參謀御中 以上北陸道先鋒記

○北征紀事ニ云、四月十五日、大總督府、十七日城ニ入ル、諸軍各兵ヲ出シテ之レヲ衛護ス、十六日、大總督府明十七日入城ノ期ヲ緩フス。

○酒井忠祿家記ニ云、四月十六日、大總督宮様御入城ニ付、東海、東山、北道三道之兵隊、諸御門へ配兵御警衛可仕旨被

仰出候ニ付、弊藩儀ハ筋違橋御門へ、昌平橋相兼一小隊、神田橋御門へ一小隊差出申候、然ル處、御入城御延引相成候得共、以後常詰被 仰付候儀ニ付、其儘爲相詰申候。

○二十一日ニ至リ、大總督、牙營ヲ江戸城ニ移ス、參看スヘシ。

○附錄一條

昨廿四日、北陸道 御總督會計方ヨリ急御用之儀有之候間、私共組合世話掛壹人ツ、可罷出旨、御沙汰ニ付罷越候處、吳服橋御門外、神田橋御門外ヨリ下谷、淺草邊町々、右 御總督持場ニ相成候ニ付テハ、市中鎮靜方厚世話可致ハ勿論、都テ異變等有之候ハ、早速可届出、尤右御届向取扱之タメ、御持場内町々名主共モ申合、御宿陣最寄へ兩三人ツ、モ日々相詰候様、會計方南部彦助殿ヨリ被申聞候、依之、此段申上候、以上。

辰 四月廿五日

壹番組 貳番組 三番組

四番組 拾壹番組 拾貳番組

拾三番組 廿壹番組 世話掛 名主共 北陸道先鋒記

十七日、東海道先鋒總督、督府ニ移牒シテ、江戸城外郭諸門ノ譏察ヲ弛ムルヲ報ス。

一簡拜啓、時下薄暑之節愈御清健珍喜此事ニ存候、然ハ、處々固場所ニオキテ路人問糺之儀、外曲輪之向ハ四民往來之通路ニ候得ハ、餘リ嚴確ニ過候テハ、公使用便ニモ相支候儀モ有之、苦情之趣モ相聞へ候ニ付、當手諸藩へハ、別紙之通相達申候間入貴覽候、其御許ニオキテモ可然思召候ハ、宜敷御取計可被下候、若又御賢慮モ被爲在候ハ、無御覆藏御返諭被下度候、以上。

東海道先鋒總督府 參謀

四月十七日

木梨精一郎

海江田武次

北陸道總督府 參謀御中

○別紙

凡固所見張之儀ハ、素ヨリ防姦之爲ニ候條、城之内外ヲ論セス、精々嚴確ニ可有之ハ、當然之事ニ候、乍然、當城外郭之儀ハ、平常土人之通衢ニ仕來リ、朝夕之來往殊ニ不少、處々糺問ヲ經テ自然時移リ候テハ、苦情之程モ被察候間、内郭ハ彌以嚴密ニ糺察可有之、外郭之向ハ姑ク寛假之意ヲ用ヒ、格別可怪之風姿ニモ相見ヘ不申者ハ、四民ニ不拘、一應問糺之上ハ、目裁ヲ以テ速ニ通行可被差免候、是以テ佚怠輕忽ヲ示スニ非レハ、心得違有之間敷トノ御沙汰候事。

四月

參

謀

北陸道先鋒記

十八日、大總督府、二督ニ令シテ、牙營ヲ東叡山ニ移サシム、故アリ、遂ニ果サス。

彌御安全御在陣珍重存候、抑其御陣所、明十九日、上野寛永寺へ可被移候様、大總督王被命候、尤探索之次第、不容易大事件ニ付、精々御都合御轉陣可有之候、巨細、御使太田銈太郎ヨリ可申入候、御面會之上御聞取可給候、尙其上、精々御心ヲ被附御探索一々御報知可有之候、仍早々要用計如是候也。

四月十八日

大總督府

參

謀

高倉三位殿

四條大夫殿

○督府、大總督府ニ遺ル書

一昨十八日、上野寛永寺へ移陣之積ヲ以、一應使節差立候處、彰義隊之者共、門番イタシ居、入門不許仍之、引取其手筈詮議之折柄、今日未明、大總督宮御命、彌移陣之旨被 仰下候ニ付、今朝當地取鎮方、徳川家來目附田付筑後守呼出シ、右入門之手續申付、直様使節二三輩差立候處、門番之者ヨリ昨日同様、尤何方ヨリ之御使ニテモ、支配頭ヨリ差圖無之内、入門無用之由申答候、其時巳刻前也、

一田付筑後守ヨリ田安家へ及引合候處、田安家ヨリモ使者相立候得共、通門不許、尤 宮ヨリ直ニ御命ヲ以、御守衛罷在候ニ付、宮ヨリ御免無之内、入門不許候趣申答候、此時午刻頃、

一前文之次第ニ付、當府兵隊上野之四境へ操出シ置候事、

一強テ及應接之儀申入候處、彼門前常樂寺ト申處へ、應接所ヲ構、酒井宰助ト申者罷出候ニ付、使命之旨申入候處、直頭分へ可申通旨ヲ以、引入候跡へ追々入代リ、應接之者罷出候得共、一向不辨之者計、終ニ山内執事覺王院罷出、而會可致旨迄掛合候、此時八ツ時過、

一右之内ニ若州藩ヨリ山内へ探索差入候處、彰義隊之者至極謹慎之由、追々及日沒候ニ付、參謀津田山三郎、押テ入門イタシ可及應接旨申入候處、覺王院面會之趣ヲ以、時刻ヲ移候ニ付、彰義隊小田井藏太へ及談判候處、無子細退去承服之旨御請仕候、乍併、俄之儀ニ付、明日迄御猶豫申立候、依之、何分今日操出シ候兵隊ハ山内へ操込、門々々所請取、本陣ハ明朝辰刻移陣之覺悟ニ御座候、今日應接中、段々強情之儀モ有之ニ付、不得止兵力ヲ以、可操込之決心仕、別紙之通隨從兵隊へ申渡候事、

右、今日應接之荒増如此御座候事。

四月十九日

○別紙ハ之ヲ佚ス。

北陸道總督御兩卿、當山へ御轉陣被成度段、 宮御方へ及言上候處、御承知被成候、依之、徳川家重器、其外御預リ之品々御取片付、且固メ人數等、天王寺へ爲引取可申候、御轉陣日限之儀ハ可及御談候間、其御役筋覺王院へ御越可被下候。

四月廿一日

覺王院
龍王院

津田山三郎處

○ 一官軍、當山へ御操込ニ相成候ハ、兵隊人數之儀ハ、各藩宿坊へ相當候事、
 一各院御貸渡申上候間席之儀、客殿書院御貸渡、尤表門貸渡可申候事、
 但、居間、茶之間、僧俗住居之分ハ御斷、院内通路ハ裏門車門等相用候事、
 一官軍御人數賄方之儀ハ、御斷申上候事、
 一門々取締之儀、官軍御人數被相詰候ハ、御本坊其筋印鑑、竝各院印鑑ヲ以通行致度、尤委細之儀ハ、田村權右衛門ヨリ御引合申上候事、
 但、他向ヨリ要用ニテ相通リ候ハ、吟味之上怪敷筋無之候ハ、相通シ、尤歸之節ハ、夫々印鑑ヲ以、通行爲致候事、
 一山諸堂社、其外ノ切之場所へ、一切立入無之様致度候事。

○ 本條及ヒ下條、先鋒記、竝ニ月日ヲ署セス、蓋本條ノ、前條ト同シク輪王寺執當覺王院、龍王院ヨリ參謀ニ上リシモノナラン。

○ 去ル十九日、御轉陣之儀御掛合中、山内外廻リ大砲小銃玉込ニテ、御固メ相成候ハ、何方ヨリ之御差圖ニテ御座候哉奉伺候事。

一山老分 佛頂院
 年行事 修禪院
 東叡山 目代 田村權右衛門
 以上北陸道先鋒記

○ 北征紀事ニ云、四月十九日、大將軍府ノ參謀、書ヲ致シテ東山督府ノ言ヲ學テ云ク、東叡山内賊徒屯集、日光王亦謀ニ預ル、宜シク今十九日、陣ヲ彼ノ地ニ移シ之レヲ壓倒スヘシ、又云ク、輪王寺王脱走ノ企テアリ、其意、日光山ヲ根據トシ、大ニ兵勢ヲ張り、官軍ヲ破ラント欲ス、期スルニ來ル二十日ヲ以テス、倘シ官軍、早ク日光ニ據レハ、錦旗ヲ翻シテ京師ニ向ハントス、其議已ニ決セリ、此言、輪王ノ臣、反シテ山道督府ニ告ケ、督府、我王ニ上言スル所ナリ、又云、越後、信濃ノ際、會桑脱走ノ賊、屯集スルノ聞アリ、宜シク密ニ探索シテ、共ニ其實ヲ得ヘシ、且大督府命シテ云ク、明十九日、陣ヲ上野ニ移セ、但シ、賊徒據ル所ノ地、輒スク之レヲ聽ス可カラズ、其方畧、宜シク熟議スヘシ、應接方ヲシテ寛永寺ニ詣リ、告ルニ山内ヲ借ランコトヲ以テス、聽サス、更ニ津田山三郎、往之レニ説ク、辭スルニ輪王寺王ノ命ヲ以テシ、固ク拒ミテ聽サス、小林柔吉、小西直記家侍ヲシテ、大總督大將軍府ニ詣リ之ヲ告、且命ヲ請シム、二十日巳時、小西直記、大將軍府ヨリ歸リ、未時小林參謀、假參謀大ニ上野ノ事ヲ論ス、廿三日、使ヲ大總督府參謀ニ遣ハシ、上野移陣ノ事ヲ請フ。

○ 酒井忠祿家記ニ云、四月十九日、御總督様、東叡山へ御陣替被 仰出候處、同所ニ彰義隊之者多人數入込罷在、謹慎之趣ニ候得共、今日中可爲立退段、御掛合之處、故障申立、急々熟談難仕、且内實山内御不審之儀モ有之候間、兵隊差向、嚴敷可被及御應接旨、尙又御達有之由ニテ、當道之諸藩出兵被 仰出、弊藩儀ハ黑門前へ三小隊差出申候處、翌廿日御陣替ハ暫時御見合、大總督宮様ヨリ御直ニ御掛合之儀モ有之候間、人數ハ先引揚候様、夕刻御達ニ付、則引揚申候。

○ 寛永寺記ニ云、四月十九日、今四ツ時頃ヨリ官軍、佐賀、若州等之人數、當山ヲ取圍、大砲小銃門々へ被差向、官吏四五人、黑門へ被相越、御兩卿當山へ御移陣有之候間、寺院明渡候様嚴敷有之、覺王院出會致候事、但御移陣無之事

同廿日、當山へ御移陣之儀、御掛合有之ニ付、一山之者存寄、執當中ヨリ尋ニ付、一山僧侶答之趣如左、
 御追討使御下向已來、徳川家ヨリ御頼モ有之、且ハ萬民塗炭ニ陥入候儀、御心痛被爲在、遙ニ駿府迄モ被成御發興、種々御苦心被遊、既今日迄干戈ヲ動シ候事モ無之處、此度當山へ御陣替有之、爲御警衛相詰居候彰義隊之者共、如何様之儀仕出シ候哉モ難計、萬一當山ヨリ事起リ候テハ、第一 朝廷へ被對不相濟、且徳川家ヨリ御頼ニ付、御預ニ相成候御代々靈牌、其外重器類混亂有候之候テハ、御信義相立兼、進退共御不都合之義ト奉存候、駿府以來御鎮靜之御艱苦モ、水ノ泡ト相成候ニ付、當山 御陣替之儀ハ御免被成、猶又彰義隊之者共御疑念有之候ハ、何方へモ御移被成候上、御陣營ニ相成候様致度

旨、執當へ申入候事、
 同廿一日、昨廿日、大總督宮御方ヨリ岩井左衛門輪王寺宮御呼出シ、去ル十九日、官軍轉陣之儀ニ付、御尋之次第有之、同人ヲ以、件々覺王院ヨリ御答申上候所、此節御軍事ニ付、急々東叡山へ轉陣ニ相成候様被成度ニ付、明後日移陣ニ相成候様取計可申旨、同人御使、同様之趣ヲ以テ被仰進候事、
 同廿二日、參謀壹人、覺王院方へ被相越、轉陣期限之儀云々掛合有之、日限治定無之事、
 廿三日、御轉陣之儀、明後廿三日蓋二十五日、誤ナラン拂曉ト相聞候間、御預之品々、明日中天王寺へ相移、警衛人數モ同寺へ引取候様、且總督轉陣ニ就テハ、不敬之儀無之様、下々迄急度可申付旨達、但、右達手違ニテ延引、今日晝後轉陣ニ相成候由也、
 右御轉陣御見合ニ相成候由申來ル、
 同廿四日、昨日、大總督宮御方ヨリ岩井左衛門御呼出シ、今日登城之處、參謀正親町殿御逢有之、北陸道總督御兩卿、當山へ轉陣之儀ニ付、昨日覺王院ヲ以、右御兩卿へ被仰入、且彰義隊長ヨリ申上候趣、逐一、大總督宮御方へ言上之處、御門主思召之次第、覺王院盡力之段、竝彰義隊精忠之旨、委細御承知、御感不料被思召候、右御轉陣之義、御見合被成候段、御口達之事、猶又被仰聞候ハ、此上彰義隊鎮撫之儀精々盡力候様、御門主へモ申上、猶覺王院へモ委細可申聞旨之事。
 ○督府、高田藩兵ニ命シテ、千住小塚原ニ移屯セシム。
 ○榊原政敬家記ニ云、四月十八日、勅使御警衛人數、千住小塚原へ陣替被仰付、御番所壹ヶ所番人差出候様、御達御座候ニ付、則本日夕刻、同所へ陣替致候事。

復古外記 北陸道戰記 第四 終

元修史局掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

北陸道戰記 第五

自明治元年四月十九日至同 閏四月十八日

四月十九日、北陸道先鋒總督兼鎮撫使高倉永祐ヲ以テ、北陸道鎮撫總督兼會津征討總督ト爲シ、黒田清隆了介、薩摩藩士、山縣有朋狂介、長門藩士ヲ參謀ト爲シ、參謀津田信弘、小林隆麟ヲ更テ、佐渡鎮撫使參謀ト爲シ、監察小笠原貞清ヲ罷ム、又新潟裁判所ヲ置キ、北陸道先鋒副總督兼鎮撫使四條隆平ヲ、新潟裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督ト爲ス。

高倉 三位

北陸道鎮撫總督兼會津征討總督被仰出候事。

慶應 四辰 四月

總裁 朱 印職務進退錄 高倉永祐事蹟

高倉 三位

北陸道鎮撫總督兼會津征討總督被仰出、附テハ諸事四條大夫申談、商量可有之 御沙汰候事。

○ 四 月職務進退錄 高倉永祐事蹟

四條大夫

新潟裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督被 仰出候事。

慶應 四辰 四月

總裁 朱 印 太政官日誌 職務進退錄

○ 新潟裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督被 仰出候、就テハ諸事高倉三位申談、商量可有之 御沙汰候事。

慶應 四辰 四月 職務進退錄 四條隆平事蹟

○ 黑田清隆ヘ口達

北越征討ニ付、參謀申付候事。黑田清隆 履歷書

○ 履歷書、口達ノ日ヲ佚ス、按スルニ、下ノ書東ニ據レハ、山縣有朋ハ當時東國ニ在ルヲ以テ、大總督府ヲシテ參謀拜任ノ命ヲ傳ヘシメシナリ。

○ 軍防局、大總督府ニ遺ル書翰節錄

- 一 高倉三位殿、北越鎮撫使被仰付候ニ付、參謀トシテ薩州黑田了介、長州山縣狂令被差添候事、
- 一 薩兵四百人、長兵四百人被差向候事、
- 一 山縣狂介江戸ニ候ハ、高倉、四條兩卿之御供ニテ、北越高田ヘ可差出旨、御沙汰書並御傳言之事、
- 一 津田山三郎、小林柔吉、兩卿參謀被免、佐渡鎮撫使滋野井殿參謀被仰付候間、高、四兩卿之御供ニテ、高田ヨリ佐渡ヘ渡海之事、
- 一 長藩小笠原彌右衛門、是迄四條大夫殿ヘ附屬罷在候處、此度四條侍從殿御頼ニテ、新潟判事被仰付候間、四條大夫殿並ニ

彌右衛門ヘ其段申通之事。東征總督記

○ 本書、總督記、閏四月五日ニ收メ、其發日ヲ佚ス、因テ此ニ合收ス。

○ 附北征紀事ニ云、鎮撫中前後相從フテ、奔走周旋スル諸藩士、及ヒ艸莽ノ人士、姓名左ノ如シ。

小笠原彌右衛門長州	榎崎郁之進長州	高須梅三郎長州	村上雅之介長州
鈴木平 助加州	小林文 作加州	嶺 幸右衛門加州	成田八九郎加州
山崎傳太郎加州	神保八左衛門加州	榊原三郎兵衛加州	雪野淵之進加州
中村石 平加州	丹羽權兵衛加州	岡田助三郎加州	澤田覺之助加州
宮原大 輔因幡	木村幾次郎越前	木村弘一郎	南部 彦 介越前
小西直 記四條家	林 多 仲富山	高橋 高田	稻垣 平 助高田
菊地又 藏宇和島	山田 勘 助宇和島	宮部六右衛門宇和島	本田彌右衛門薩州
渡邊儀右衛門	高田 真人	石川 文 藏	神取佳久馬
杉本行 藏	富樫	澤原源太郎	北澤 金 平
星 野 齊	渡邊 詰 藏	高野藤四郎	桑原忠右衛門
秋山顯 藏	植田宗平	加藤 司 馬	高嶺 清 八
井上謙 藏	松尾源六郎	白川 七 郎	宮地友三郎
富田金二郎	岡村 爲 藏	竹内庄右衛門	北村
島田祐三郎			

二十日、大總督府、徳川氏處分ノ議ヲ諸道總督ニ下ス、督府、參謀意見書ヲ上ル。

○ 東征總督記ニ云、四月廿六日、徳川氏相續之儀ニ付、諸道總督ヘ御策問。

○ 一即今御處置之御急務ハ、旗下並市中心之居合候御仕向、一日モ早々御施行有之度、其御處置之次第ハ、當府之義、已ニ田安殿へ御委任ニハ候得共、方今更始御一新之折柄、人才御擢用第一之義ニテ、當地ニテハ大久保一翁、勝安房杯、徳川恭順今日ニ相運候次第ニ付テハ、大ニ盡力有之候事故、右兩人、田安輔佐トシテ、府内萬般之處置筋被 仰付候ハ、不日ニ鎮靜、人心居合可申、此義、尤以御差急御下命被爲在度候事、

一徳川家名相續並封地之義ハ、如何ニモ急速御沙汰有之度候、乍併、大事件之義ニ付、萬一御處置不得宜時ハ、如何之勢ニ押移候モ難計ニ付、後日天意人心相定候上ニテ、至公至平之御處置被爲在候テ、不晚義ト奉存候、
一大軍之長陣ハ、尤以不宜義ニテ、日々之御入費、土地人民之困窮無申計、且御滯陣ニ相成候得ハ、諸兵隊之内、強ハ暴ニ流、弱ハ情ニ陷、日々醜態相顯レ、人心ヲ御失ヒ被成候場ニ立寄可申、此義、尤以奉恐入候事ニ御座候、依テ上下總、野州邊之賊徒、平定ニ至リ候ハ、當府ニハ鎮臺被立置、速ニ 御凱陣被爲在度候事、
右急務之大綱、不取敢奉言上候。

四月

北陸道 督府

參

謀

中

總裁局記

○ 按スルニ、本日、大總督參謀林通顯ヲ京師ニ遣シテ、速ニ徳川氏ノ處分ヲ定メンコトヲ請ヒ、且諸道總督以下ノ意見書ヲ上ル事ハ、東海道戰記ニ詳ナリ。

二十一日、大總督、牙營ヲ江戸城ニ移シ、諸道總督及ヒ、參謀ヲ會シテ軍事ヲ議ス、二督、之ニ蒞ム。

明廿一日、已刻轉陣候間、爲御心得申入候、尤同刻城内集會可有之事。

四月二十日

熾

仁

高倉 三位 處

四條 大夫 處

御道筋、

土器町、西之窪、相良小路、虎之門、櫻田。

○

明二十一日、大總督宮御入城之旨被仰出候、此段爲御心得可申入旨、總督府御沙汰候條、如斯御座候、以上。

四月二十日

東海道總督府

參謀

木

梨

精

海江田 武次

北陸道 總督府 參謀御中以上北陸道先鋒記

○ 北征紀事ニ云、四月廿一日、大將軍王城ニ入ル、諸道督府參謀モ亦、入ツテ共ニ軍事ヲ議ス、未ヨリ酉ニ迄テ罷ム。

二十二日、館林藩、書ヲ督府ニ上テ、境封有虞ノ狀ヲ陳シ、糧餉措辦ノ任ヲ解カシテ請フ。

東山道 御總督様御中軍へ兼テ大砲方拾五人差出置候、其後去ル十三日頃、御同所様ヨリ之御差圖ニテ、結城城之方へ持筒組壹組、先手組壹組差出候得共、戰爭不仕、直野州中田宿邊へ相廻リ戰候處、存外勝利ニテ生捕等モ御座候、夫ヨリ野州小山宿在所々ニテ、去ル十六日、同十七日戰爭有之候處、者頭壹人、足輕兩人討死、持筒組壹人手負、其外五六人程在所表へ落參、其他持筒頭始、唯今以行衛相知不申、生死之程難計御座候、猶又去ル十七日、在所表ヨリ持筒組壹組、右最寄へ操出候處、小山宿在戰爭之次第不宜趣承、直引返シ、猶小性組壹組、持筒組、先手組二組相増出陣仕候、然ル處、去ル廿日、野州宇都宮城落城之趣探索差出置候者、昨日在所表へ罷歸申間候、尤右落城ニ付テハ、野州王生、夫ヨリ在所館林表へ責寄セ參候趣之由ニ御座候處、小家之儀ニテ、人數少之上、所々へ出兵等御座候ニ付テハ、猶々人數モ無之、殊ニ館林城ハ、至テ手薄之

場所故、早打ヲ以、昨夜東山道 御總督様迄御援兵之儀歎願罷出候家來ヨリ、今曉注進申越候、當表家來共ハ、追々在所表へ爲引移候得共、殘人數聊御座候間、即刻出立申付候、依テハ兼テ被 仰付置候兵糧仕出方取扱之儀ハ、大切之御用向ニ付、右人數ハ相殘置候、就テハ彼是自由ケ間敷段奉恐入候得共、前文之次第、何卒厚御汲取被成下置、兵糧仕出取扱方 御免被成下候ハ、右取扱候家來共モ、即刻在所表へ差立申度、此段偏奉歎願候、以上。

秋元但馬守家來

押田 六 兵衛

北陸道先鋒記

四月廿二日

○本條、指令ヲ佚ス、蓋其請ヲ聽セシナラン。

二十三日、徳川氏、臣隸ノ歸順ヲ肯セサル者、千住驛ニ嘯聚スルヲ以テ、督府、小濱藩兵ヲ遣シテ、之ヲ招諭セシム、藩兵至レハ、則チ其徒、既ニ東海道官軍ノ軍門ニ降ル、明日、又藩兵ヲ小梅村ニ發シテ、其餘黨ヲ招諭セシム、餘黨、路ヲ轉シテ他ニ赴ク。

○酒井忠祿家記ニ云、四月廿三日、水府へ御送り込之人數戎器相携、千住通罷歸候由、恭順之筋ニモ關リ候儀ニ付、人數差出申諭、承伏不致候ハ、其處置可仕旨御達ニ付、即刻一小隊、千住表へ差出候處、右之者共承服仕、戎器佐土原隊へ相渡候趣ニ付、翌朝引揚申候、

同廿四日夕、右同様之多人數、小梅村筋罷歸候由ニ付、前同斷人數差出、應接等可仕旨御達ニ付、即刻小梅村へ一小隊、并士隊長以下半小隊、牛島牛御前境内へ一小隊差出申候、

同廿五日、前書出兵之模様承込候哉、當道筋へ掛リ候者ハ、引返シ候趣相聞候ニ付、伺之上牛島へ差出候一小隊ハ、引揚申候、同廿六日、前同斷ニ付、小梅村へ差出候人數、見切次第引揚不苦旨御差圖御座候處、探索不分之儀モ御座候ニ付見合申候、

同廿七日、探索之者追々罷歸、江戸表へ立歸候人數多分、於新宿市川宿歸順致シ、平穩之趣申出候ニ付、小梅村出張之人數ハ、引揚、士分七八人殘シ置、近邊爲相探申候。

二十五日、入道公現親王輪王寺宮、使ヲ督府ニ遣シテ諸軍ヲ勞フ。

○北征紀事ニ云、四月廿五日、輪王寺王使ヲ遣ハシ師ヲ勞ス。

二十八日、軍防局、書ヲ督府ニ致シ、越後人吉田某等、北越ノ賊警ヲ報スルノ功アルヲ以テ、北陸道官軍ノ嚮導ヲ命スルヲ報ス。

別紙越後國郷士、依報警之功官軍嚮導被 仰付、今廿八日、薩長出兵之先へ發途致候、此段爲御心得申入候。○上、下略、

四月廿八日

軍防局

北陸道總督府

○別紙

越後國郷士

吉田省之進

芳賀嘉之七

井田年之助

右、今度依報警之功、北陸道官軍嚮導被 仰付候間、明廿八日ヨリ發途可致候事。

四月廿七日北陸道先鋒記

○海軍先鋒總督、督府ニ移牒シ、關宿下、栗橋武、地方物情騷擾スルヲ以テ、速ニ兵ヲ發シテ海軍ニ應援シ、之ヲ鎮輯センコトヲ請フ、督府、乃チ部兵ヲ發シテ之ニ赴カシム、東山道先鋒總

復古外記

北陸道戰記 第五 明治元年四月二十五・二十八日

八六一

督モ亦、書ヲ致シテ、再ヒ山道ニ赴クヲ報シ、且江戸水路ノ守ヲ嚴ニセンコトヲ請フ。

○北征紀事ニ云、四月廿八日、海軍先鋒大原侍從、書ヲ致シテ云ク、關宿、栗橋ノ地、物情騷然タリ、請フ、速ニ兵ヲ出シテ我カ應援ヲナセ、津田山三郎ヲシテ諸隊ニ命シ、直ニ之レニ赴カシム。

○大原俊實ノ移牒ハ、原記ヲ佚ス。

日々御勤勞奉想像候、扱兩官、昨二十七日出馬可仕之處、無餘儀子細有之延引仕、今日進發仕候、就テハ當地之儀、何共掛念ニ御座候間、諸公宜御畫策被爲在候様奉希上候、尤過日言上致シ置候川筋御取締之儀、偏ニ御配慮之程奉願上候、萬一命ヲ保テ凱陣仕候ハ、其節縷々可申上候、稽首敬白。

四月廿八日

八千九百具定

高倉殿

四條

殿北陸道先鋒記

○北征紀事又云、四月廿八日、東山道總督府、書ヲ致シテ嚴ニ我カ所部ノ舟路ニ備ヘンコトヲ請フ。

二十九日、是ヨリ先、督府、肥後藩兵ニ命シテ、東橋ヲ警守セシム、是日、之ヲ罷メ、小濱藩兵ヲ以テ之ニ代フ、又小濱藩兵ヲ小梅村ニ遣シテ、柳島傍近通行ノ船舶ヲ譏察セシム。

○酒井忠祿家記ニ云、四月廿九日夜、早朝ヨリ出兵、吾妻橋番所熊本隊ト交代可仕、柳島、曳船通ヘモ出兵、船改可仕旨御達ニ付、翌閏四月朔日、一小隊小梅村ヘ差出、右兩所ヘ分兵仕候。

是月、是ヨリ先、東山道先鋒總督、横瀨某侍從、舊高家ノ勤王ノ請ヲ聽シ、命シテ其實効ヲ奏セシム、

是ニ至リ、某、督府ニ就キテ京師ニ至リ、王事ニ勤メンコトヲ請フ。

私儀、兼テ奉勳勤 王度志願御座候ニ付、京都詰同席大澤右京大夫、京極丹後守ヘ度々書狀打合申候得共、遠路懸隔候儀故、何分行届不申候ニ付、上京仕奉伺 天機度奉存候得共、當正月ヨリ疝積、其上足痛ニテ相勝リ不申、空敷心痛仕罷在候處、去々月中、中條兵庫歸京、其後父左衛門督モ歸京仕候ニ付、父子共年來熟懇之者ニ御座候間、心中打明ケ申談、何卒志願相叶候様、周旋致吳候様仕度旨、家來差添相頼申候、然處、私病氣追々快方相成候ニ付、去月十日夜、江戸表出帆、同十七日領分下野國足利郡粟谷村ヘ土著仕候ニ付、速ニ御先鋒總督府 御本陣ヘ罷出、奉伺 天氣且勤 王之志願申上候處、別紙之通被 仰渡難有仕合奉存、去ル二十五日領分ヘ歸邑仕候處、尙又 御下向之趣ニ付、不取敢奉伺 天氣度參上仕候、何卒志願之通、京住ニテ勤 王之實効相立候様、精々盡力仕度、此段奉願候、以上。

辰四月

横瀨侍從

○別紙

横瀨侍從

是迄雖爲徳川旗下之士、普天下盡ク 王臣ニ候條、主人慶喜、朝敵ト相成候上ハ、向後爲 國家忠勤仕度趣ニ付、本領可爲安堵様、總督府ヨリ 朝廷ヘ御奏問可有之候間、君臣主從之差別篤ト相辨、不失大義實効相立候様、精々盡力可致旨御沙汰候事。

戊辰三月

東山道總督府 執

事

北陸道先鋒記

○本條、指令見ル所ナシ。

閏四月朔日、督府、榊原政敬ノ形跡疑フヘキヲ以テ、藩兵ノ麾下ニ在ル者ヲ罷歸ス。

其藩、不審之筋有之、兼テ被差出置候御人數御用無之ニ付、勝手ニ本國へ可被引取候。

督府 執 事

榊原式部大輔 隊長中

○ 千住出張之御人數、交代之者著次第可被引揚候事。

督府 執 事

閏 四 月 朔 日

榊原式部大輔 隊長中

○ 千住出張之御人數、交代之者著次第可被引揚候事、右之趣被 仰渡奉畏候、今夕人數引取申候、此段御請御届奉申上候、以上。

榊原式部大輔家來

閏 四 月 朔 日

久代勘 右衛門
以上榊原政敬家記

○ 政敬家記ニ云、閏四月初日、東京詰重役原田兵庫ヨリ 勅使御本營へ差出候伺書、並御附紙左之通、一弊藩奉蒙 御不審候段、重々奉恐入候、此節柄、奉伺モ恐縮之至リ奉存候得共、右御不審之次第ハ、在所表歩兵通行爲致候哉之御廉ニ御座候哉奉伺候事、御附紙、御在所表歩兵通行之廉、御不審ニ候事、一兼々奉申上候通、先般御内命伺候ヨリ、度々在所表へ士分、又ハ、飛脚等差遣候得共、今日以、何等之儀モ不申越奉恐入候、私儀、在所へ急速罷越、右表重役出府委細事實奉申上可然哉、奉伺候事、

御附紙、御伺之通、御自分御出外御重役御出府可然事、一千住表へ出張人數引取候上、上屋敷内慎方奉伺候事、御附紙、御屋敷之思召次第ニテ宜敷候事、一在所表慎方、且以後心得方共奉伺候事、但、御不審之廉御解疑可相成、實効之儀奉待 御沙汰候事、御附紙、以後、御實効相立候様、一在所表ヨリ御隨從之面々ハ、其儘差出置可然哉、奉伺候事、御附紙、御隨從之面々ハ、其儘御差置候事、一御達之内本國へ可引取ト御座候ニ付、追々在所へ差遣候儀ニモ御座候哉、不取敢右件々奉伺候事、御附紙、御寬急ハ可有御座候得共、追々御國へ御遣可然候。

閏 四 月 朔 日

原 田 兵 庫

○ 舊幕府歩兵奉行古屋某^{作左} 衛門、等ノ高田ニ至リシハ、前月十六日ニ在リ、事ハ本月六日ノ條ニ載ス、參看スヘシ。

二日、督府、諸門警守ノ諸藩ニ令シテ、其守兵ヲ減セシム。
○ 酒井忠祿家記ニ云、閏四月二日、諸御門御警衛人數向後減少、大槩七八人ツ、手々之見込ヲ以詰合可申、但筋違橋御門ハ、最前之通可相心得旨御達ニ付、神田橋出兵之内半小隊相減申候。

三日、一督、移テ越前藩邸^{常盤橋} 二陣ス。

○ 北征紀事ニ云、閏四月三日、陣ヲ常盤橋越前藩邸へ轉ス。

○ 東海道官軍、下總ノ賊ト戰端ヲ開クヲ以テ、督府、小濱藩ニ令シテ、小梅村ノ守兵ヲ増加セシメ、又安藝、肥前、小濱三藩兵ヲ發シテ、新宿驛ヲ扼守セシム。

○酒井忠祿家記ニ云、閏四月三日、下總國葛飾郡八幡表ニ、脫走人共大勢屯集ニ付、兼テ爲鎮靜、備、伊兩州人數出張之處、談判難整、今朝ヨリ戰爭相成候趣ニ付、不取敢小梅村へ増出兵御達御座候ニ付、即刻一小隊、並大砲一門差出申候、同月、右人數之内、四ッ木村迄分兵可仕旨御差圖ニ付、追々繰出候處、新宿表、備、伊之兵、八幡之方へ繰詰、新宿御手薄相成候ニ付、同所迄繰詰候様、尙又御差圖之通、柳島へ半小隊相殘、吾妻橋人數ハ引揚、一同繰詰申候、同夜半、新宿へ尙又増出兵御達ニ付、即刻一小隊、並大砲一門差出、總勢合三小隊半、大砲二門砲手共、肥、藝ト合兵相詰申候、同四日、猶又進兵御達ニ付、松戸宿迄相進申候、同六日、府下混雜之趣ニ付、不虞之備可仕旨、大御總督宮様ヨリ御達御座候處、追々出兵御手薄ニ有之、賊徒ハ遠ク引退、再ヒ襲來之形勢更ニ無之候間、北陸之諸隊ハ、引揚可申旨御達ニ付、翌七日引揚申候、但、柳島船改之半小隊ハ、依御差圖其儘差置申候。

○是ヨリ先、督府、堀直賀佐京亮、村ニ命シ、期ヲ刻シテ京師ニ至ラシム、是ニ至リ直賀、書ヲ上リ、浮浪ノ徒、越後地方ヲ劫掠シ、邑民騷擾スルヲ以テ、姑ク入觀ノ期ヲ緩クシ、管内ヲ鎮撫セシコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

今般於高田表、五十日限上京可仕様被、仰渡候ニ付、早速上京仕、御請可申上之處、尙又當節脫走浮浪之者、當國內所々暴行之由ニテ、領内人心居合不申、甚以心痛罷在候、猶精々鎮撫盡力仕度奉存候、就テハ兼テ當三月朔日、於京地家來之者ヲ以、別紙之通奉伺候處、以御附札御暇被、仰出候儀ニモ御座候間、人心居合候上ハ、早速上京可仕候ニ付、今暫登京御猶豫成下候様仕度奉願上候、以上。

四月廿日

堀 左京亮

○別紙

私儀

兼テ被爲 召候處、舊冬以來申上置候通、病氣ニテ追々遅延罷在候、當今之形勢不容易ニ付、乍病中押テ上京仕度、夫々用意モ仕、來ル廿八日、發途之心組ニテ罷在候處、在所ヨリ以急飛申越候ニハ、今般賊徒御征伐ニ付テハ、人心不穩折柄、北陸道 御鎮撫使御下向ニモ相成候ニ付、種々浮說等申唱、不容易次第ニ相成、爲夫領内人心居合不申致動搖候趣、心痛當惑至極奉存候、此上、自然如何様之事情ニ可押移モ難計、殊ニ領分之儀ハ、會津最寄之儀、其上、居所間近ニ桑名預所等モ多分有之、當今之時勢、如何之變動ニ可相成哉モ難計被奉存候、然處、私留守中ニテハ、別テ取締方モ不行届、萬一心得違之取計方等御座候テハ、奉對 朝廷不相濟儀ト深ク奉恐入候、就テハ切迫之場合、片時モ猶豫仕兼、一先、在所へ罷越取締向等嚴重ニ申付、且領内人心居合方等迄、精々申諭之上、早速上京可仕候間、前顯之次第、御憐察之上 御聞置被成下候様、此段奉願上候、以上。

二月廿五日

堀 左京亮

○三月五日批紙

願之通御暇被 免候事。北陸道先鋒記 堀直弘家記

○直弘家記ニ云、閏四月二日、去四月廿日、越後村松表出立飛脚着、右之通願書相達候ニ付進達仕候處、翌三日、御附紙ヲ以テ御指令有之。

四日、是ヨリ先、督府、牧野忠泰伊勢守、三根山藩主ニ命シテ京師ニ至ラシム、是ニ至リ忠泰、書ヲ上リ、浮浪ノ徒、封疆ニ出沒シ、邑民騷擾スルヲ以テ、藩兵ニ在リテ鎮撫ノ事ニ服シ、老臣ヲシテ代リテ入觀セシメンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

今般於高田表、家來之者へ御書取ヲ以 上京可仕旨、被仰渡奉畏、依之、早々 上京可仕管之處、當國不穩形勢ニ付、取締之

所置仕居候内、追々浮浪之徒、會藩ト相唱、近邊徘徊致シ、取々之風説甚敷、人氣騷立粗暴之儀モ有之間敷哉ト痛心當惑仕候間、領内鎮撫精々盡力仕度奉存候、右ニ付 上京之儀、今暫延引仕度、就テハ爲名代可差出嫡子、並近縁之者モ無御座、依之、爲名代重臣中村富右衛門ト申者、上京爲仕度此段奉願上候、以上。

閏四月四日

牧野伊勢守

北陸道先鋒記
牧野忠泰家記

○忠泰家記ニ云、閏四月中、東京へ密ニ使者差出、御兩使へ御猶豫願差出、御落手相成、右之通。

五日、江戸物情騷擾スルヲ以テ、大總督府、二督ヲ戒メテ不虞ニ備ヘシム。

追テ、御氣ヲ被附候迄之事ニ候、左御承知可給也、

府下少々混雜之由有之候間、御陣中精々御堅固御用心可有之候様可申入旨、大總督宮被命候、仍早々申入候也。

閏四月五日

大總督府 參 謀

高倉三位 殿

四條大夫 殿北陸道先鋒記

○北征紀事ニ云、閏四月五日、大參謀令シテ云ク、物情混雜ニ涉ルモノ有リ、諸陣警備怠ル可カラス。

○是ヨリ先、古屋某作左衛門等、越後ヨリ信濃ニ入り、飯山本多助成城下ニ逗ル、尾張、松代等、諸藩

兵ヲ發シテ之ヲ討シ、北クルヲ追テ越後ニ入ル、東山道總督、乃チ監軍岩村高俊精一郎、土佐藩士ヲ遣シ

テ、諸藩兵ヲ督セシム、是日、書ヲ二督ニ致シテ、其狀ヲ報シ、且高田藩ノ形跡疑フヘキヲ以テ、

速ニ軍監ヲ派遣シ、本道軍監ト協議シテ、之カ區處ヲ爲サシメンコトヲ請フ。

從忍城中飛羽檄啓上仕候、日々御繁務不相變御勤勞奉遠察候、扱賊徒共、信州へ侵入致シ候處、飯山城下ニ於テ大敗、越後路へ遁去候ニ付、松代及ヒ尾藩之人數尾擊致シ、遂ニ高田表迄達候由、松代藩ヨリ届出候、彼地ハ貴府之御管國ニ候間、此段御斷申置候、右高田藩之儀、過日、賊徒、信州へ通行之節叮嚀ニモテナシ、賄等、彼藩ヨリ差出シ候ニ付、松代、尾藩等、何レモ切齒致シ居候處、賊徒敗走、官軍進入ニ付、彼藩、恐怖之躰ニテ、俄ニ賊之殘黨屯致シ居候川浦ト申處へ、兵ヲ向ケ候次第、其情實甚以疑敷、松代、尾藩等ヨリ談判中ニ御座候由、最弊府ヨリモ、軍監一人差向ケ置候間、貴府ヨリモ一兩人御指出シ可給候、立合之上取計ヒ仕候ハ、諸事都合宜哉ト被存候、御人被指出候儀、萬一難相成候ハ、弊府軍監之意ヲ以、臨機之所置爲致候テモ不苦候哉、兩様之内、何レカ御許容所希ニ候、尤軍事之儀猶豫難相成候間、即時御決答可給候、爲國家不憚忌諱不避嫌疑、區々之微忠諒察是祈、頓首頓首。

追啓、高田表ニ於テ嚴重之兵備無之テハ、賊徒、重テ飛驒、信濃等へ侵入之程モ難測、彼藩之情實ヲ糺シ候儀、今日之急務ト存候、願クハ彼藩ヲシテ悔悟奮發セシメ、賊徒追討之先鋒トシテ、實効相立候様致度候事。

閏四月五日

八千九百
具定

高倉三位 殿

四條大夫 殿東山道總督府叢紙
北陸道先鋒記

○北征紀事ニ云、閏四月五日、東山道督府書至ル、云ク、高田藩狀疑フヘキコト有リ、因テ之レヲ問フ。

○是ヨリ先、古屋某作左衛門等、高田ニ至ル、榊原政敬、之ヲ其封内ニ居ク、既ニシテ某等、飯山ニ

入り、尾張、松代等諸藩兵ト戰ヒ、敗レ還ル、是ニ於テ政敬、藩兵ヲ發シ、某等ノ川浦村ニ要擊

シテ之ヲ敗ル、是日、書ヲ督府ニ上テ、其狀ヲ申ス、督府、詰ルニ賊徒ヲ封内ニ納ル、ノ亡狀ヲ

以テス、政敬、答辨書ヲ上ル。

步兵古屋作左衛門、其外役々並兵隊共、去十六日、越後國柏崎泊ニテ信州松本迄之先觸到來、引繼作左衛門、並兵隊共、大凡人數五百七拾人餘、式部大輔領分通行ニ付、趣意柄相尋候處、先般信州邊ニタイテ、官軍先鋒、杯ト唱ヒ、亂妨之所業ニ及、人民艱苦不可言、代官所等人少之處ハ、別テ恐怖動搖之趣相聞候ニ付、鎮撫被申付、兵隊引纏出發致候處、勅使御先鋒、追々下向之趣ニ付、路次ヲ轉シ上州梁田表ニ止宿之處、何レ之兵隊トモ不相知、不意ニ襲來之兵有之趣ニ付、趣意承り度、應接之者差出候處、直ニ被及砲擊候ニ付、無餘儀防戰致候得共、元來真之奉對 勅使敵對等致候存意無之候、右之次等ニ付、速ニ人數相纏引退、是迄段々通行致候處、前條鎮撫被申付之趣意モ有之候ニ付、右場所迄、一ト度相越度、且梁田表之事情、信州何レ之藩へ成共、依頼申上度旨申間候得共、兼テ會津藩脫走人之儀ニ付テハ、御達之趣モ御座候得ハ、假令會津藩脱走人ニ無之候共、若不都合之次第等有之候テハ、奉恐入候ニ付、差留置キ、所置方御伺可申上心得ニテ、精々及談判、窺濟迄領内荒井驛ニ留置候事ニ議定致候處、去ル廿日朝、一應之斷モ無之、遠運動杯ト相唱ヒ、俄ニ信州飲山表へ立越候ニ付、約定違變之所業、嚴敷及談判候處、彼是行違相成、申譯無之趣深相詫ヒ、隊長古屋作左衛門始諸隊引戻候得共、一旦立越之儀ニ付、隊中之者少々、飲山表ニ殘置候旨ニ有之、元來是非共信州地罷越度素願之儀ニ付、何卒滞留不致、通行致度旨只管申出、夫是對談中、飲山表ヨリ使者差越中間候ハ、此表へ罷越候テハ、此表同様之趣申述候由、其上尾州家役人衆へ伺候處、沙汰之次第モ有之候ニ付、飯山領内相通候旨ニ相聞候得共、可成丈領内ニ留置、御處置筋相伺可申心得ニテ、猶又精々及談判候得共、前條之通、幾重ニモ奉命之廉有之候間、何卒信州地迄罷越度、勿論亂妨之所業ハ、決テ致間敷、中野條邊迄罷越、役方へ旨趣申達候上、引取度旨申間、無余儀次第ニ付、別紙之通り證書請取、通行爲致候儀ニ御座候、尤步兵共之義ハ、諸國寄集頑固無頼之者ニ付、取締致粗暴之義無之様、精々申間置候儀ニ御座候、依之、此段御届申上候、以上。

辰 閏 四 月

榊原式部大輔家來 森 文次郎

○別紙

步兵ヨリ差出候證書、

拙者共、先月中、信濃國鎮撫トシテ罷越候様申付請、江戸表出立、中山道上程ノ途中、勅使先鋒、追々下向之趣承候ニ付、行會候テハ自然不敬之儀等有之候テハ、恭順之意ニ背キ不相濟儀ト心得候ヨリ、路次ヲ轉シ、上州梁田驛ニ一宿罷在候、翌拂曉不意ニ襲來之兵有之模様注進ニ付、何レノ人數、且何等ノ趣意ニ候哉一應承度爲メ、即差出候應接人へ直ニ砲擊セラレ不能、其義候ニ付、不得止防戰之上、速ニ人數引纏、猶又大ニ路次ヲ迂轉シ、驛々通行、初メ奉命之地迄罷越候ニテ、固無名ニ輕舉暴行致候儀ニ無御座候上、件之旨趣不分明ニテ、萬一御疑惑之廉可有之モ難計存候ニ付、事實以書取此段啓述仕候間、御封内無滯御通可被下置候、以上。

四 月 廿 四 日

榊山三郎印 天野新太郎印 内田庄司印

榊原式部大輔 御執重中

步兵差 今井信郎印 同頭 古屋作左衛門印

步兵頭古屋作左衛門始、領内通行方之顛末、先般御届申上置候次第ニ御座候處、去ル廿五日、飯山表ニ於テ戰爭有之趣、注進有之候ニ付、情實ハ不相分候得共、鎮定トシテ人數手配仕候内、尙申出候ハ、步兵共追々領分へ遁來候旨、申出候ニ付、右ハ此中精々談判之上、證書取請置次第モ有之候得ハ、一步モ領内へ立入候義理合有之間敷管之處、不得其意、不届至極之義ニ付、一應詰問之上討取可申タメ、家臣村上主殿、伊藤彌總、竹田勘太郎三隊之人數追々繰出之上、使番差出及詰問候處、隊長作左衛門相答候ハ、段々御談判及證書差上置候次第モ御座候得ハ、決テ無名暴動之戰爭及候所置、更ニ無御座候處、過日分隊致、飯山表へ殘置候人數へ松代候人數ヨリ發砲被致候ニ付、無餘儀防戰致候義ニテ、荒井驛ヨリ罷越候局中之者ニハ、素ヨリ戰爭之積無之處、右様之次第柄ニ相成、何共不合之段申譯モ無之、御領内へ何ノ面目有テ可立戻筋無之候得

共、何分一時之餓可凌様無之ニ付、不得止立越候間、都合次第、早々間道ヨリ引退可申、幾重ニモ御容赦ニ預度旨、只管相訖、則中島弦之進、平田惠太夫等へ申付、前件申譯差出候旨ニテ、弦之進、惠太夫等、主殿、彌總陣所へ相越、只管謝辭申述候段、申越候得共、屢約定違變致シ、全ク當家ヲ相欺キ、不容易次第柄ニ相成、最早容恕之筋無之ニ付討取可申、乍然、深悔悟致、兵器不殘相預ケ、作左衛門始末々ニ至迄、厚謹慎致、御處置相待罷在候ハ、格別、左ニ無之候テハ、一切許容不相成、假令間道引取候共、討取可申候間、速ニ決意可致旨申聞候處、弦之進、惠太夫共罷歸、隊長作左衛門へ申聞、可及答旨申聞候得共、弦之進儀ハ、指押置キ、忠太夫壹人差戻候處、右等挨拶モ無之、追々五人拾人ツ、間道筋逃去候趣、斥候之者申出候ニ付、主殿、彌總隊分配致シ追駈、且川浦陣屋之方へ集屯可致様子有之旨、探索之者申出候ニ付、勘太郎隊ハ右へ相向候、追々集リ來候ニ付、繰詰大小銃打掛候處、歩兵隊ヨリモ相應之砲發ニ及候得共、闇夜之事故、人數之寡寡動靜モ分リ兼候ニ付、指出村ト申所へ放火致、猶嚴敷打掛候内ニ、主殿手モ一同ニ相成、火勢ニ乘シ陣内へ打入、討取人、生捕人、分捕品、荒増別紙別紙ハ之、之通ニ御座候、殘兵之分ハ東之方山之手へ散亂敗走致、近邊屯集之體モ相見へ不申候得共、主殿、彌總二隊、取締トシテ模奇へ出張爲致置、猶潛伏之者、嚴敷探索方申付置候儀ニ御座候、依之、先ツ不取敢御届申上候、以上。

榊原式部大輔家來

閏 四 日 六 日

森 文 次 郎

以上榊原政敬家記

○奥越戰爭日記ニ云、四月十六日、高田城下へ着、古屋處始メ今井新太郎、中島源之進、桃澤彦四郎、木村大作、天野新太郎、右五人馬ニ乘リ、城内へ參リ掛合中ニ、兵士不殘城下へ繰込ミ、榊原處ニモ降參致シ、此所ニテ中飯致シ、是ヨリ三里先キ新井宿ニテ不殘下宿致シ、此所ニテ逗留ニ相成候内、同廿日ニ分隊致シ、信州飯山本多豊後守處城下へ繰込ミ、是又降參ニ相成ル、依之、德川方一同勇ミ立、越後ハ不申及、信州路迄一呑ニト存候處へ、信濃表へ出シ置候忍之者注進ニハ、此度中之條ト申ス所ニ、官軍方凡三四百人計リ屯致シ、追々繰出候様子之趣申候ニ付、隊長ヨリ被仰出候ハ、此度官軍方、凡三千人

計リ押寄候風聞有之間、第二大隊ハ飯山ニ置キ、第一大隊ト、中軍隊ハ、新井宿へ引戻シ、本道ヲ嚴重ニ相固メ可申、飯山へモ嚴重ニ固メ候様申遣候所、廿五日曉七ツ時頃、官軍方、信州松代、同上田人數先陣ニテ、外ニ大名七頭程、家々之大旗小旗押立、川向ヨリ德川方之番兵所へ打込、九時迄烈敷戰候處、德川方小人數故引色ニ相成候處、新井宿ニ固メ候人數、迎ニ參リ早速引上ケ、且飯山城下へ中軍隊百人計リ、新手續込候處ニ飯山モ官軍方へ内通ニ及ヒ、裏切致シ、城中ヨリ德川固メ場へ、大小砲打出候故、德川方城下市中へ火ヲ掛ケ、峠迄引上候跡ニテ、城下ニ兼テ用意致置候哉ニテ、地雷火五發計リ發シ申候、其節、德川方一同ニ新井宿迄引上候所へ、高田人數五百人程、同所へ出張ニ相成リ、此所ニテ一宿致シ、廿六日九時出立ニテ、高田城下ヨリ三里東之方、川浦町ト申ス所ニ德川陣屋有之、不殘人數此所へ入込、暮六ツ時着致シ、支度イタシ候處へ、夜五ツ頃、官軍方三方ヨリ取卷キ、大砲打込候故、一統無是非出立、道順ヲ尋候得共、夜中故分リ不申、思ヒ思ヒ引上ケ、山道へ掛リ候處、雨降出シ、誠以難澁イタシ、山道ヲ柏崎迄引上候者モ有之、又小千谷へ引上候者モ有之。

○政敬答辨書

銃砲ヲ持シ兵隊數百人、鉢崎ヨリ新井迄數十里之處罷通候ヲ、柿崎驛ニテ既ニ談判ニ被及候末、任數願差留無之次第第一條、兵隊ニテ通行致候儀、當節柄不都合之儀ト存候ニ付、領内通行難爲致、跡道へ戻リ候様申聞候得トモ、最初鎮撫之命ヲ受、兵隊引纏罷出候儀ニ付、兵隊ニテ罷通度、且下越後筋藩々領分モ通り來リ、子細無之往還之儀ニ候間、是非通シ吳候様、只管彼是申候得共、辻モ兵隊ニテハ通行難爲致旨申聞候處、問道ニテモ罷通度ナト、申候得共、夫以爲致カタク、是非共兵隊ニテ罷通度儀ニ候ハ、當方ニオイテモ、可伺品有之候間、暫領内ニ差扣候中間、歎願ニ任セ候心得ハ無御座候得トモ、柿崎驛ハ場所都合不宜候ニ付、今町表迄差遣、同所談判之上差止メ置候事可致哉ト存候得トモ、今町表ハ海路ヲ始、下越後ヨリ通行自由之場所ニ付、含モ有之、且入置候相當之寺院モ無之候間、新井驛ニ滞留爲致候事ニ取極候事ニ御坐候、但鉢崎ヨリ新井驛迄、道法十里ニ御坐候。

新井驛引留被置候兵隊、約定ヲ侵シ飯山迄分兵突出候ヲ、御取計振一條、

新井驛ニ滞留可罷在之處、約定違變、飯山表罷越候ハ、全ク弊藩ヲ欺キ候儀ニ付、速ニ引戻候ハ、格別、不引戻候ハ、高田表ニ残り居候楠山三郎、中嶋鉉之進、松田昌次郎、木村大作、前田兵衛原註、但、何レモ、役方、頭分之由、等差押置、違約不義之罪ヲ問ヒ候所存ニテ、則藩内ヘモ決意之次第申聞、嚴敷及談判候處、右五人ノ者共、只管相詫、早速引戻候事ニ可致旨ニテ、則三郎、昌次郎、大作、早馬ニテ飯山表ヘ立越及談判、隊長佐久左衛門始諸隊、直様翌日引戻シ來、先ツ廉合ハ相立候得共、惣隊之内、少々飯山表ニ殘置候由ニ付、右ニテハ、領内ヘ差留置候趣意、不立候間、悉皆引戻候様、猶嚴敷再々申聞候得共、同所ニ示談之筋有之、迎モ可立戻様子無之運ヒ合ニ有之候旨相聞候上ハ、證書取受、無是非相通候儀ニ御坐候。

德川慶喜、舊命令ト稱シ、兵隊ヲ以テ信州筋爲取締、今更罷通度旨、御取立有之一條、罪名ヲ被蒙候後モ、家政向ニ拘リ候儀ハ、恭順之趣意被相諭候而已ニ無之、無據儀ハ夫々差圖モ有之候様子ニ付、代官所等不取締之分ハ、其節實ニ鎮撫方被申付候儀ニテ、虛偽ニモ有之間敷哉、且申付請候場所ヘ罷越候上、復命不致候テハ、身分之立場無之候ニ付、一旦罷越度旨再應申聞、無餘儀申立之様相聞候得共、虛實之處、并右之者共御處置筋モ相窺候上取計申度、罪之次第モ詳ニ承知不致、直ニ討取候モ仁恕之筋ニ無之哉ト存、兎モ角モ一應伺可申ト存差留置候儀ニ御座候。

松本迄先觸出居候道筋ヲ取違候、飯山迄罷通候ヲ、御詰問無之一條、

新井驛滞留議定之處、約ニ背キ候段ハ勿論、道筋ヲ違ヒ候儀モ、詰問ヲヨヒ候處、關川御關所等モ手配有之、殊ニ數ヶ所之切所モ有之、右ニテ挾打ニ被致候哉ナト、下々方疑惑甚々敷、兼々下越後ニ罷在候内、種々御疑ヒ申上候邊モ御坐候處、城下ヲ通シ被過、新井驛ニ止宿致候様之次第ニ付、自然之儀モ難計ナト、存、且飯山表ニハ未格別手當モ無之哉ニ付、速ニ罷越候ハ、宜敷歟ト、俄ニ出立致候儀ニテ、違約相成候段ハ申譯無之旨、申聞候儀ニ御座候。北陸道先鋒記

○本件、詰問及ヒ答辨ノ日ヲ失ス、因テ此ニ合叙ス。

七日、督府、榊原政敬、討賊ノ功アルヲ以テ、其嫌疑ヲ解キ、命シテ益勤王ノ實効ヲ奏セシム。

其藩御不審之義、兼テ 御沙汰ニ相成居候處、賊徒追伐稍御疑惑被爲解候、就テハ近日、其表ヘ御進軍相成候間、以後彌實効ヲ以、勤 王之誠心可被表旨被 仰出候事。

辰 閏 四 月

北陸道督府

執

事

榊原式部大輔 重役中 北陸道先鋒記 榊原政敬家記

八日、是ヨリ先、督府、内藤信民紀伊守、村上藩主ニ命シテ、京師ニ至ラシム、信民、封疆會津ニ接近シ、邑民騷擾スルノ虞アルヲ以テ、落地ニ在リテ鎮撫ノ事ニ服シ、重臣ヲシテ代リテ入覲セシメント請フ、之ヲ聽ス、是ニ至リ信民ノ家臣書ヲ上リ、信民、松平容保追討ノ朝命ヲ拜セシヲ以テ、姑ク重臣代覲ノ期ヲ緩クセント請フ。

私儀、上京可仕旨、於越後國高田表御達御座候付、早速上京可仕等之處、兼テ在江戸中、上京之御達御座候節、病氣ニ付追々延引仕候内、奥州會津表御征伐之趣ニテ、在所村上之儀ハ近隣ニ付、同所風説甚敷、領内人氣騷立、御總督様御下向之砌、粗暴之儀有之間敷共難申、痛心當惑仕候付、乍病中押テ在所表ヘ罷越、專鎮撫仕居候、然ル處、此上會津表之舉動ニ寄、領民動擾之程モ難計、實以心配仕候間、領内鎮撫精々盡力仕度奉存候、右ニ付、私爲名代重臣之内壹人上京爲仕度、此段奉願候、以上。

四 月 十 五 日

内藤 紀 伊 守

信 民 五

名前書、

内藤紀伊守家來

重臣

島

田

直

枝

差添

澤

村

吉

四 郎

○本條、指令ヲ佚ス、下條ニ據リテ之ヲ見レハ其請ヲ聽セシナリ。

紀伊守儀、上京可仕旨御達御座候處、隣領會津表動搖仕候付、在所表鎮撫方盡力仕度、依之、重臣之内、爲名代上京爲仕度段、奉願候通御差圖御座候處、今般於京都表、松平肥後追討之儀被仰出、藩々申合追討可仕旨、御沙汰有之奉畏候、然ル處、從來小藩寡人數之儀、殊ニ重臣之者モ人少ニテ、攻守鎮撫行届申間敷ト其痛心仕候、依之、前條願之趣、御聞濟被成下候處、猶又奉願候ハ、重々恐入奉存候得共、可相成儀ニ御座候ハ、重臣之者名代之儀、暫御猶豫被成下度、京都表御用向之儀ハ、在京留守居役之者へ被 仰付被下度、紀伊守在邑中ニ付、此段從私奉願候、以上。

閏四月八日

内藤紀伊守家來

鈴木

鍊次郎

正名取

以上北陸道先鋒記

○本條、指令見ル所ナシ、蓋其請ヲ聽セシナラン。

九日、大總督府、肥前藩兵ノ二督ニ隸スル者ヲ以テ、莊内征討應援ト爲ス。

別紙之通、從 大總督宮被 仰出候間、早々御取計可被成候也。

閏四月九日

大總督宮

參

謀

高倉三位 毅
四條大夫 毅

○別紙

肥前兵隊

三百人

右、莊内追討爲援兵、支度出來次第出張可致、大總督宮被 仰出候事。

閏四月九日

大總督府

參

謀

○北征紀事ニ云、閏四月九日、大將參謀命シテ云ク、肥前兵隊、羽州庄内ニ遣シ援タラシメン、鍋島孫六郎、請フテ之レヲ辭ス、十六日、肥前藩兵、庄内ニ赴クヲ辭スルコトヲ聽サス。

○督府、本道諸藩ニ令シテ、嚮キニ購辦スル所ノ軍糧ノ價額ヲ上申セシム、尋テ越後諸藩、連署上書シテ、其糧ヲ獻セント請フ、之ヲ聽ス。

其藩々、祿高ニ應シ追々買上被差出候糧米直段御用候間、取調之上、早々當 御本營迄可被差出候事。

北陸道總督府

會計局 執

事

辰 閏四月
次第不同

加賀宰相中將殿	越前少將殿	榊原式部大輔殿
溝口誠之進殿	前田稠松殿	内藤紀伊守殿
有馬遠江守殿	間部下總守殿	土井能登守殿
堀左京亮殿	井伊右京亮殿	小笠原左衛門佐殿
牧野伊勢守殿	柳澤彰太郎殿	堀右京亮殿
松平日向守殿	右留守居中 <small>榊原政敬家記 井伊直安家記</small>	

○覺、

一金五拾二兩二朱二匁九分三厘

兩二斗三升替
白米拾二石

右之通御座候、以上。

井伊右京亮家來

岡 吉左衛門

井伊直安家記

閏四月十日

○諸藩ノ上申書、與板藩ノ外見ル所ナシ、按スルニ、下ノ上申書ニ據レハ、敦賀藩モ亦錄上ノ命アリシニ似タリ。

○

一白米六石 兩二貳斗貳升替 此代金貳拾七兩壹分銀壹匁三分六厘三毛

右四斗入ニテ俵數十五俵、高並上納仕置候處、直段御尋ニ付、此段申上候、以上。

酒井左京亮家來

永 田 新印

閏四月十二日

會計御役 所以上酒井
忠經家記

○忠經家記ニ云、閏四月十二日、北陸道御先鋒御總督御進軍ニ付、去月十日、糧米納方之儀、依御達同十五日差出申候處、買上代金取調可差出旨、猶依御達、右之通書出申候事、

同十八日、御總督ヨリ左之旨、御書附ヲ以御達相成候事、

糧米代金御下ケ渡相成候ニ付、今十八日晝八時、請取之者可差出事。

北陸道會計

執 事

閏四月十八日

酒井左京亮 留守居中

右御達ニ付、家來之者爲請取差出候處、左之御書附ヲ以、代金御渡相成候事。

覺、

米六石 四月十五日納 兩二貳斗貳升六合

此金貳拾六兩貳分 銀貳匁九分貳厘 此錢五百八十四文

先般、藩々へ祿高ニ應シ、糧米上納被 仰付候處、此節買上代取調可申上旨、御達之趣奉畏候、右ハ御當節柄奉恐入候ニ付、右等之御達御座候節ハ、上納高獻米奉願候様、兼テ主人々々ヨリ申付越置候ニ付、此段奉願候、以上。

閏四月十九日

堀右京亮内	山 田 秀 助	柳澤彰太郎内	關口勘右衛門
柳澤伊勢守内	加 用 出 石	牧野伊勢守内	多 賀 谷 貢
井伊右京亮内	岡 吉右衛門	堀左京亮内	野 口 彦 兵 衛
内藤紀伊守内	鈴 木 鍊 次 郎	溝口誠之進内	宮北郷左衛門
神原式部大輔内	久代勘右衛門		

參謀 御用掛御中 神原政敬、溝口直正、井伊直安家記

○神原政敬家記ニ云、閏四月十五日、勅使御本營へ兼テ上納仕候糧米、獻納仕度旨、越後九藩中相談之上、黒川藩加用出石、三根山藩多賀谷貢、御本營へ罷出、參謀役津田山三郎方へ及内談候處、獻石可然旨ニ相成候段申聞候事。

○堀直弘家記ニ云、四月糶米方被仰付候糧米、乍少分獻納仕度段、後日ニ至リ願立候處、願之通御聞届相成候旨、閏四月中御達有之。

十二日、督府、小濱藩兵ヲ千住驛ニ遣シテ、行旅及ヒ船舶ノ出入ヲ譏察セシム。

○酒井忠祿家記云、閏四月十二日、千住宿往來、並同所船改トシテ出兵可仕旨御達ニ付、二小隊差出申候。

十三日、二督及ヒ參謀、書ヲ大總督府ニ致シテ、軍國事宜ヲ陳ス。

一都テ評議之主本ハ和親ニ有之候ニ付、和親而反覆再思有之度候、下參謀十分會評ノ後、言上ニ可及候、總督、參謀卿ニハ、右ヲ折衷シテ一意ニ決斷スルヲ要ト存候事、

一府和親ハ素ヨリ諸道參謀、隊長等、趣意一途ニ不出候テハ、合期難致候得ハ、兵隊以下ニ至ル迄、王師東下之大體鎮撫ヲ主ト仕候哉、攻撃ヲ專ト仕候哉、一決ノ御處置有之度候事、

一參謀ハ樞要ノ職務、萬機ノ總轄ニ預ル事故、別テ和同評論有之度、此局、一度隔執ヲ相生候テハ、諸隊離反ノ基必定ニ候、然ルニ 大總督府、參謀等、天下ノ大事ヲ一身ニ引受、英斷ノ策ヲ出候者少ク御座候間、因循ノ說日々生シ、議論矛盾ニ巨萬ノ財ヲ費候事、良策ト可申哉、速ニ御英斷有之度候事、

一大總督御著陣後、既ニ二句ヲ經候得共、王化更ニ潤澤不致、賊徒日ニ蜂起、都下人心恐々仕候間、速ニ 王政復古ノ實効相立、萬民草伏ノ御計策被回候様、懇願此事ニ奉存候、

右辭見愚存、猥ニ言上之儀惶惧候得共、不願萬死表拙毫候、此段宜御裁判可被下候、以上。

閏四月十三日

隆平 永祐

大總督府 參謀御中 東征總督記 高倉永祐事蹟

○參謀建議 今般德川慶喜爲 御親征、大御總督宮御始、三道御總督府並御先鋒、官軍御引率、御東下御進軍之處、干戈不動シテ、慶喜伏罪之次第、赫々 皇威御興隆、忽關東御平治相成、此頃ハ 大總督宮、西々へ 御在城相成上ハ、御成功相立、誠以恐悅至極之御儀奉存候、此上ハ早速末二ヶ條ヲ始、其餘府内萬民一同安堵之御所置被 仰出候テハ、宮ニハ速ニ御歸洛ニ相成

候ハ、實心輝德シテ、兵ヲ不輝ノ御上策ト奉存候、且又野州其外賊徒共、小暴動之儀ハ、德川家二百年來之氣習ニ染候得ハ、一時眞ノ打合ト申儀ハ、無覺束可御座候、此儀ハ德川家相續之御汰汰、並家來共小吏迄、糊口之御處置等御沙汰有之次第、追々人心鎮靜可仕儀ト愚考仕候、何分此等之件々、當節之御急務ト奉存候、左様無之、只々時日ヲ御移シ被遊候テハ、第一、大軍之兵糧軍用失費、第二、諸藩之出兵強キハ暴行ニ流レ、弱キハ怠惰ノ失躰ヲ生シ可申、第三ニハ、今般德川家領地殘金穀並金銀等迄、悉皆御引揚相成儀ニ付、采邑無之小吏之者共ハ、饑渴眼前之儀ニ付、無據暴行ヲ醸シ候儀出來可申哉、此件件篤ト御翫味可被下候、早々御處置有之候ハ、多分鎮靜可申哉、

一會桑ヲ始、德川家來脫走之モノ共、夫是屯集及暴行候條、今日ニ相成候テハ、眞之賊徒候得ハ、早速德川家來、今般歸順之者へ先鋒被命、田安一橋之内總督ニテ、賊徒平定實功相立候上ハ、此上之御加恩可被成下旨御沙汰有之、早々討取候様被 仰下度事、

一幕臣之内有志之聞有之族、夫々御登庸之上、旗下鎮撫方、府内取鎮方等、夫々被仰下候様致度事、

一當 御總督府ニハ、未タ越後筋全ク之御鎮撫被爲濟候儀ニモ無御座、且又下越後筋賊徒共、彼是屯集人心騷カセ候趣候得ハ、當地早々御出立之上、兼テ御受持之御場所、全ク御鎮撫筋之御處置、御下リ被遊、御成功之上、直様御歸路之御沙汰相成様願度奉存候、只々前條申上候通、徒ニ日時ヲ御移シ被遊、萬民之難苦日々相勤候テ、實以、王政御一新之御趣意ニハ如何哉ト乍恐愚存候、其位ニアラスシテ重大之事件申上候條、重々奉恐入候得共、心緒彼是ト御案事申上候心底ヨリ、死罪ヲ不願奉言上候、多罪々々頓首恐惶謹言。

○ 御書中令披見候、彌御安全御滯陣珍重存候、然ハ昨日御登城被仰上候ヶ條、早々御評決之儀御中立承候、御評決次第御返答可相成候、御建白拜見候、天下高論不可過之ト存候、早速大總督宮へ言上候、明日御登城之上、尙巨細可申承候、且今日御參營可有之處、依御所勞御兩官共、御不參之旨承候、御自愛專一被存候、仍御報迄早々如此候也。

閏四月十三日

參

謀

高倉三位殿
四條大夫以上北陸道先鋒記

十五日、兇徒、江戸市中ヲ劫掠スルヲ以テ、大總督府、二督ニ令シ、部下、諸藩兵ヲ分チテ、市中ヲ巡警セシム。

當府鎮靜之姿ニハ候得共、動モスレハ心得違之者モ有之候哉、町家へ金穀強談、其他無禮不義、甚敷ニ至リ候テハ、暗殺等ノ惡行有之、取押之爲メ、別紙之通各藩巡邏、朝廷恩威、神妙ニ夫々へ相示シ候様、大總督宮 御沙汰候事。
但、町家へ立入不可言之振舞有之候趣相聞候、官軍下々之モノニモ、自然心得違有之候テハ、舊幕へ對シ候テモ、赤面之次第二付、夫等之處、各藩見聞有之ニオイテハ可申出候、尙支配々々頭ヨリ夫々相達、不失人心様可取計候、右之通、各藩へ可被相達候事。

閏四月

大總督府

參

謀

高倉三位殿
四條大夫殿

○別紙

一番 町邊	一外 神田邊	一内 神田邊	一小 川町邊
一江戸 町邊	一芝 邊	一西 久保邊	一赤 坂邊
一小石川白山町邊	一牛込水道町邊	一淺 草邊	一上 野下邊
一本 所邊	一深 川邊	一麻 布邊	一青 山邊

一四ツ 谷邊 一大名小路邊

右町々、藩々心附之場所、晝夜一度ツ、各藩巡邏之事。

但、一小隊、二小隊位之處、夫々隊長之可爲見計。北陸先鋒記

○諸藩兵巡警ノ顛末ハ、諸書見ル所ナシ。

十八日、二督、再ヒ越後ニ赴カントス、因テ古河藩ノ糧餉措辦ヲ罷ム、又越後諸藩兵、及ヒ重臣ノ扈從ヲ罷メテ、江戸ニ駐在セシム、尋テ重臣ヲ召見シテ、其勞ヲ慰ス。

是迄非常兵糧方被 仰付置候處、當廿一日爰許 御發途ニ相成候間、以後不及其儀候、段々出精之儀、大儀ニ 被思召候事。

辰 閏 四月

北陸道督府

執

事

土井大炊頭殿 重臣中北陸道先鋒記 古河藩記

○ 一今般御發途ニ付、越後十藩、是迄隨從之重臣ハ、江戸表ニ可相殘候事、
一同三藩兵隊有之向ハ、御供可致事、 但、病人之向ハ相除、人數可被申出候事、
右之通被 仰出候事、尤 大總督宮ヨリ 御沙汰候事。

閏四月十八日

會

議

所

越後十藩 衆中榊原政敬、井伊直安、堀直弘家記

○ 達書中、所謂三藩ハ何藩ヲ指セシヤ、詳ナラス。

一越後十藩、重臣江戸残り人數上下共、一紙ニ認メ可被差出候、

復古外記 北陸道戰記 第五 明治元年閏四月十八日

一同十藩、重臣相揃、明辰之半刻參陣可有之候、但、兩御總督拜謁被 仰出候間、爲御心得申入候事。

戊辰閏四月廿日

會議所

榑原政敬、堀直弘家記、與板藩記

○諸藩江戸駐在人員錄上書ハ、原記ヲ伏ス。

○北征紀事ニ云、閏四月廿一日、十一藩ノ重臣ヲ召見シ、再ヒ北越ニ赴クノ由ヲ告ク。

○榑原政敬家記ニ云、閏四月廿一日、勅使御本營へ、重臣久代勘右衛門始、越後十藩重臣不殘出仕、大總督 御兩卿へ拜謁候事。

○溝口直正家記ニ云、閏四月廿一日、北陸道督府、北越へ發途ニ付、右體從罷在候宮北卿左衛門邸内へ引取、大總督府御差圖ヲ受候御達ニ付、邸内へ引取候事。

○堀直弘家記ニ云、閏四月廿一日、辰ノ半刻、御本陣へ出頭、御兩卿拜謁被 仰付、遠方長々御體從太儀ニ思召候段、高倉三位殿御意有之、御兩卿、此度越地へ御再進ニ付、十藩之重臣、大總督之宮へ御體從被 仰付候趣、參謀衆ヨリ御達有之、依テ西之丸へ出頭御用相伺候處、銘々藩邸へ引取、御用次第可相勤旨、御達ニ付藩邸へ引取罷在候。

○柳澤德忠家記ニ云、閏四月廿一日、北陸道總督府御本營へ出張被 仰付候、重臣並兵隊一先御暇被下候旨、參謀中ヨリ被相達歸邸。

○内藤信美家記ニ云、勅使高田表へ御進發ニ付、出兵之者ハ東京へ御差殘、屋敷ニ扣居候様御沙汰ニ付、東京屋敷へ扣罷在候。

復古外記 北陸道戰記 第五 終

元修史局掌記 豊原資清

復古外記 稿本

北陸道戰記 第六

自明治元年閏四月十九日 至同 五月二日

閏四月十九日、是ヨリ先、督府、舊佐渡奉行鈴木重嶺^{兵庫}ヲ召ス、僚吏竹川富義^{龍之助}代リ至ル、乃チ命シテ其舊管地ノ簿書ヲ齎シ、入京シテ之ヲ上ラシム、是日、重嶺江戸ノ行營ニ詣リテ之上ル。

○三月五日達書

佐渡奉行へ

今度、御兩總督先鋒兼鎮撫使トシテ北陸道へ御發向就テハ、被申達候御用之儀モ有之候條、越後高田表へ參營可被致候、尤差急候御用之儀候間、此狀着次第、無遲滯早々參著可被致事。

北陸道 督府

執

事

北陸道先鋒記

三月

○北征紀事ニ云、四月八日、佐渡元奉行鈴木兵庫頭病ミ、竹川龍之助ヲシテ代リ來謁シ、誓書ヲ上ル、參謀之レヲ受ク。

御口達廉書御請、

復古外記 北陸道戰記 第六 明治元年閏四月十九日

八八五

一御趣意尊奉之上ハ、本人直ニ上京御請可有之事、但、上京日限豫メ取極、御本營へ可申出事、
 一支配地高並新開地面戸數、水帳、地圖夫々取調、太政官へ可差出事、但、支配下寺社領同斷、
 一支配下無告之窮民ハ、勿論、忠孝義烈之族ハ、精々穿鑿、前條同様可取計事、
 一支配地租稅、此迄未納、皆納並有合金穀共、無遺漏取調、太政官へ可差出事。
 右、被 仰渡之趣承知仕候、然ル處、上京日限之儀、私早速歸國之上、奉行鈴木兵庫頭へ前件之趣申達、諸書物其外取調日數モ相掛リ候得共、精々相縮、日數凡四十日ヲ目當ニ上京爲仕候様可仕、乍然、佐州之儀、北海之一孤島ニテ、天氣風順等之次第ニ寄、遅速難相量候間、此段ハ兼テ御差含置被下候様仕度、依之、御請申上候、以上。

戊辰四月九日

佐渡奉行支配 組頭

竹川 龍 之 助

富 義 芳

北陸道鎮撫 御兩卿様 參謀御役中

○ 今般 朝政御一新ニ付、御趣意被 仰渡之趣、并御口達之廉々、私早速歸國之上、佐渡奉行鈴木兵庫頭へ申達、同人上京御請可仕積御請書差上、尙御達書ヲモ御渡相成候儀ニ御坐候處、右ハ今般之御用筋、何等之義歟難相量候間、調物書類等兼々用意仕罷在候ニ付、右御口達廉々、御當地ニ滯府罷在取調差上候様仕度、尤佐渡奉行ニテ、聊存意ハ無御坐候へ共、一應之次第申遣、返翰到來之上、右調書差上候様可仕候間、兵庫頭上京ハ御猶豫被下、都テ私儀名代トシテ參營仕候儀ニ付、御用之筋相辨、歸國仕度奉存候、右之趣可然被仰上被下候様仕度奉願候、以上。

戊辰四月十日

佐渡奉行支配

組頭

竹川 龍 之 助

富 義 芳

北陸道鎮撫 御兩卿様 參謀御役中

○ 御口達御請、

一御趣意尊奉之上ハ、本人直ニ上京御請可有之事、

此儀、私佐渡奉行鈴木兵庫頭爲名代參候仕、御趣意尊奉御請仕候ニ付、兵庫頭上京之儀、兼テ御差免相願置候儀ニ御座候、

一支配地高並新開地面戸數、水帳、地圖夫々取調、太政官へ可差出事、

此儀、別冊佐渡國地高其外取調帳一冊並地圖一枚差上申候、鄉村高帳之儀ハ、佐州表ヨリ到來次第差上候様可仕、且別段新開高無御座候、

一支配下無告之窮民ハ、勿論、忠孝義烈之族ハ、精々穿鑿、前條同様可取計事、

此儀、書類用意不仕候間、佐州へ申遣、到來次第否申上候様可仕候、

一支配地租稅未納、皆納並有合金穀取調、太政官へ可差出事、

此儀、去卯年分租稅未納無御座、金穀有高別冊帳面差上申候、

右ハ、佐州表へ急便ヲ以申遣候間、返翰到來不仕候テハ未定之廉モ御座候得共、私共用意イタシ候書類等ヲ以、取調候處、先ツ別冊相添申上候、以上。

戊辰四月

佐渡奉行支配組頭

竹川 龍 之 助

富 義 芳

北陸道鎮撫 御兩卿様 參謀御役中以上北陸道先鋒記

○本條、上申ノ日ヲ佚ス、別冊モ亦見ル所ナシ。

復古外記 北陸道戰記 第六 明治元年閏四月十九日

○鈴木重嶺手記ニ云、明治元戊辰三月十八日、北陸道總督ヨリ依渡奉行出頭可致旨、越後國高田驛ヨリ、達書到來ニ付、同月廿二日支配「組頭竹川龍之助外三名、佐渡地出立罷出候處、其前右總督ハ高田表出立、東京へ被立越候ニ付、引續同所へ罷出候趣、右龍之助外三名ヨリ、佐州へ注進ニ付、佐渡奉行鈴木兵庫頭儀、同四月廿四日佐州出立、同閏四月十四日東京へ著、右龍之助其外之モノ召連、同所總督旅館へ罷出候處、王政復古之降命御受書可差出旨、被申渡候ニ付、朝旨奉戴可仕旨御受書、並佐州御收納筋、倉庫有高等、巨細書付トモ、同月十九日總督へ差出、翌二十日兵庫頭ハ佐渡奉行退役イタシ候。

○御請、

一大號令 一制札 一農商布告 一大赦施行

外、御口達廉書四件、是ハ書類取調差上申候、

右ハ、今般 朝政御一新ニ付、御沙汰之廉々御書付御渡有之、私爲名代差出候、支配組頭竹川龍之助ヨリ御請仕候ニ付、支配地取締之儀、最寄同様相心得候様、改テ御達書御渡之趣、同人ヨリ急便ヲ以申達、然ル處、私儀佐州表之形勢、御直ニ言上不仕候テハ、事情難相貫仕誼有之、此度御當地へ出府仕候ニ付、御趣意遵奉仕候段、御直ニ御請申上候、以上。

戊辰閏四月十五日

佐渡奉行 鈴木兵庫頭

重嶺先

北陸道 督府 參謀中 北陸道先鋒記 鈴木重嶺手記

○佐州金穀有高帳、

御金藏 但一ヶ所

辰三月十九日有高

一金八百七拾七兩壹分貳朱

一錢拾萬五千三百九拾六貫四百貳拾八文

御米藏 但三ヶ所

右同斷

一米壹萬四千七百三石六斗三升

一粃壹萬五千貳百六拾石九升

御雜藏 但一ヶ所

右同斷

一長割錢貳千百貳拾貳貫六拾五匁六分

一中割錢貳千四百三拾六貫六百六匁七分

一刃錢三百八拾六貫四百貳拾三匁

一灯心六貫七百八拾四匁貳分

一種油三拾貳石九斗七升貳合七勺七才

一荏桐油拾三石貳斗五升八合貳勺三才

一鉛千八百貳拾五貫八百六拾四匁貳分

一硫黃拾六貫九拾八匁

一針釘三貫五百拾三匁壹分

一硝石九貫目

右之通御座候、以上。

戊辰 四月

○佐州地高其外取調書、

佐渡國加茂郡百ヶ村、羽茂郡六十一ヶ村外一ヶ村御朱印地

合貳百六拾貳ヶ村

但周海五拾里拾三町三拾間 南北貳拾六里 東西拾三里

一高拾三萬貳千五百七拾四石貳斗壹升九合

外九拾石五斗 御朱印寺領

內 田高拾萬貳千九百貳拾五石五斗九合

此取米四萬貳千九百貳拾九石九斗五升

復古外記

北陸道戰記 第六 明治元年閏四月十九日

内 貳百七石貳斗五升三合七勺 寺社除米 貳萬六千七百石 石代納

是ハ先前仕來ニテ、困窮村々爲手當、年々代金納申付候分、並市中拂米之上代金爲相納候分、

七千石程 是ハ金銀山稼方入用並役人御宛行、其外諸渡相成候分

六百石程 是ハ非常備トシテ、年々糶園ニイタシ置、十ヶ年目新穀ニ詰替、古穀市郷へ相拂之分

ノ三萬四千五百七石貳斗五升三合七勺

殘八千四百貳拾貳石餘 此分、年々大阪廻米相成候分

畑高貳萬九千六百四拾八石七斗壹升 此取米三千九百三石七升五合

外 米貳萬六千七百石 前書石代納之分

ノ三萬六千三百三石七升五合

此金三萬貳千八百五拾兩程

外 金三千兩程 高掛定納物其外諸運上之分

是ハ金銀山稼方入用並役所向諸人用、役人役金等へ相渡、石代直段高下ニ寄、不足之年柄ハ江戸表ヨリ御下ケ

金之上仕賄、自然有餘相成候得ハ、積置、溜リ見計江戸表へ相廻來申候、

一砂金五拾目程 金銀山出方 一筋金九貫目程 同 一山吹銀百五拾貫目程 同

小以通用金ニシテ貳萬兩程、是ハ年々不同有之候得共、江戸表へ相納候分、

一銅七百貫目程 是ハ右同斷、大坂銅座へ相廻シ、代金受取、稼方入用へ振向之分、

一家數貳萬千七百四拾九軒 一人別拾萬五千三百五拾貳人 内五萬貳千四百九人 男

一寺五百拾壹ヶ寺内御朱印高九 小比叡村 蓮花峰寺 一社人山伏家貳百六拾四軒

一堂百七拾ヶ所

一御數貳ヶ所

一御林貳百七拾七ヶ所

一百姓林四千七拾九ヶ所

右之通御座候、以上。

辰 四月 以上鈴木重嶺手記

○參謀黒田清隆、山形有朋、薩摩、長門、府中^長三藩兵ヲ率キテ高田ニ至ル、加賀、富山二藩兵モ亦來リ會ス、清隆等、乃チ高田藩ニ令シ、兵ヲ發シテ、其封疆ヲ扼守セシム、時ニ東山道監軍岩村高俊、尾張、松代、松本、上田、高遠、高島、飯山、田野口、岩村田、飯田、須坂、椎谷十二藩兵ヲ督シテ、荒井驛ニ次ス、會津、桑名ノ兵、及ヒ舊幕府水戸藩逋逃ノ徒等、亦傍近各處ニ屯據シテ、以テ官軍ニ抗ス、清隆等、乃チ高俊ト議シ、兩道ノ軍ヲ合シテ、越後ノ賊徒ヲ剿蕩セントス、因テ諸藩兵ヲ部署シ、薩摩、尾張以下十六藩兵ハ、山道ヨリ魚沼郡ニ向ヒ、薩摩、長門以下六藩兵ハ、海道ヨリ刈羽郡ニ進ム。

○薩長二藩戰報節錄

閏四月十九日、薩、長之兵高田著陣、探索ノ敵情ニヨリ、直様戰略ヲ定メ、先達以來、荒井驛滯陣ノ尾州以下信州諸藩之兵ニ、薩、長、高田ノ兵相添、松山越、千手邊ヨリ出張、加州、高田之兵ニ薩、長ノ兵相添、柏崎口、青海川邊へ出張ス。^{太政官日誌}
○戊巳征戰紀畧ニ云、戊辰四月、我奇兵六小隊、砲四門、薩兵ト共ニ京師ヲ發ス、長府報國隊モ亦朝命ヲ受ケ、海路ヨリ能州七尾ニ上陸シ、同シク閏四月十九日、越後高田ニ至ル、途中ニテ米山ノ絶嶮、或ハ賊ニ據ラレンコトヲ恐レ、加州富山ノ兵

ヲ促シ、先進テ之ヲ取ラシム、高田藩モ亦兵ヲ出シ、其國境ヲ守レリ、松代、松本等信州諸藩及尾州兵、先是、飯山城下ニテ
德川脱走ノ歩兵ヲ撃チ、遂ニ越後ニ入り、高田ノ國論ヲ問ヒ、荒井驛ニ屯セリ、即日、探索ノ賊情ニヨリ攻取ノ方略ヲ定ム、
我五番小隊、原註、司令元森熊次 薩州、高田、尾州信州諸藩兵ハ、松山越千手邊ヨリ進ミ、魚沼郡ニ入ル、我六番小隊、原註、司令、山根辰三、
報國一、薩州、加州、高田、富山兵ハ、柏崎口、青海川ヨリ刈羽郡ニ進ム、二十四日、山道ノ兵ニ手ニ分レ、松代、高田、尾州等ハ
小千谷ニ向フ、我兵、報國隊、薩州、松代等ハ、信濃川ヲ渡リ十日町ニ至ル、賊已ニ去レリ、蓋是時東山道ノ官軍、賊ヲ三國嶺
ニ撃チシニ因テナリ、二十五日、六日町ニ至ル、賊ナシ、遂ニ水陸ヨリ浦佐ニ入ル、二十六日、薩州、尾州、飯山兵分レテ堀
内入ルニ。

○榊原政敬家記ニ云、閏四月中、官軍下越へ御繰込之節、式部大輔元御預所越後國頸城郡村々之内、枝路間道等有之場所へ、
番所、關門御取建、嚴重取締可致旨、參謀衆ヨリ件々談御座候ニ付、則夫々關門等拾四ヶ所補理取締方申付置候。

○岩村高俊東山道總督府ニ遺ル書

賊徒益熾ニ候、今十八日、薩、長兩藩之人數、追々高田表へ繰込候、人數千三百計、加州兵千五百計、先鋒ニ相進候、今十九日、
小生モ高田ニ於テ薩、長隊長原註、薩州黒田了、長州山縣狂介、ニ面會、軍略ヲ決シ、信州諸藩へ翌廿日進軍之議ヲ布告ス、今日、番町ト云處
進軍ス、兩三日之内ニハ戰爭可有之、十日町ト云處ハ、初手ニ戰アルヘシ、尤高田ヨリ三道ニ分チ進ムヘシ、何レ一戰次第
御報可申候。

後 四月二十日

岩 村 精 一 郎

東山道總督府日記

○岩村高俊勤勞事蹟ニ云、德川慶喜ノ恭順ヲ唱フルヤ、旗下ノ歩兵順ハサル者アリ、奥羽ノ間ニ脱走シ、會津藩ト合從、幕
政ヲ恢復セントコトヲ謀リ、兵ヲ所々ニ出シテ煽動ス、督府東山道總督、府ヲ指ス越、信諸州ノ各藩方向定マラサルヲ慮リ、爲ニ軍監ヲ
派遣ス、四月廿五日、高俊ニ命スルニ、東山道先鋒總督府軍監トシテ信州表ニ出張スヘシト、高俊即時發程、晝夜兼行、松代

ニ到ントス、途ニ一騎ニ遇フ、則チ松代藩ノ使ナリ、曰ク、本月廿三日二十五日ノ誤、賊兵ト飯山ニ戰ヒ、官軍全勝、賊越後ニ遁走ス
ト、是ニ於テ益急行シテ閏四月朔松代ニ著ス、輒チ尾州及ヒ信州各藩原註、上田、松本、松代、飯田、諏訪、飯山、須坂、高遠、岩村田等兵ヲ募リ、軍ヲ整ヘ、越後
ニ入り、高田城ヲ距ル二里新井驛ニ陣ス、初高田藩論一ナラス、信、尾ノ兵國境ニ入ルヲ以テ、始テ賊兵ヲ逐ヒ、官軍ト共ニ
討伐セントコトヲ請フ、時ニ黒田了介、山縣狂介ノ兩氏、越後口參謀タリ、薩、長ノ兵ヲ率キ、不日高田ニ到ルノ報アリ、因テ思
フ、越後ハ東山道督府ノ關スル所ニ非サルヲ以テ、參謀ノ至ルヲ待チ進退ヲ決セントス、既ニシテ兩氏到ル、高俊直ニ陣
營ニ至リ、敵情ヲ具シ、我軍ノ進退ヲ謀ル、會マ兩氏率ユル所ノ兵寡少ナルヲ以テ、共ニ合セテ進マント告ク、茲ニ於テ高
俊意ヲ決シテ、直チニ新井驛ニ歸リ、進軍ノ令ヲ信、尾ノ諸軍ニ傳ヘ、且急ニ使ヲ發シテ、其旨趣ヲ督府ニ報シ、忽チ全軍ヲ
二ツニ分チ、本道鯨波ヘハ長州ノ兵、又支道山ノ手ヘハ薩、長各一小隊、及ヒ信、尾、高田ノ兵ヲ以テ、淵邊直右衛門、原註、薩
州ノ人杉山壯一郎、原註、長
州ノ人及ヒ高俊等之レヲ管ス、二十五日、諸軍高田ヲ發ス。

○德川義宜家譜ニ云、四月廿一日、賊徒信州飯山城下ニ迫ルト聞キ、水野康年等、松代藩ト牒合、四月廿四日礮礮隊引卒、中
野ヨリ田上村ヘ出張、同廿五日安田村ヘ進擊、閏四月七日、東山道總督府ヨリ信地ヘ差向ノ監軍岩村精一郎飯山ヲ發シ、越
後國頸城郡新井驛ヘ轉陣、因之、康年等、松代藩ト俱ニ監軍ニ從テ同驛ニ入ル、十六日、東山道總督府監軍岩村精一郎ヨリ高
田表形勢ニ付、越後頸城郡新井驛ヘ迅速進軍之指令ニ因リ、右驛近傍小出雲村迄進軍候處、高田地形勢相變、右藩御嫌疑相
解、薩、長、加州等之兵隊追々右地ヘ著到スルニ因リ、監軍及ヒ薩、長ノ兩藩ト軍機牒合、北陸之本道ハ薩州、加州ノ兵隊、
筑摩川通同國長岡ヘ之一道ハ、弊藩並信濃諸藩之兵隊、三國越之一道ハ、上州之諸藩、各道ヲ分チ、同月廿日、尾州並信濃諸
隊右驛進發、同國頸城郡中村、井ノ口、番場之村落ニ入テ次ス、廿二日、弊藩人數越後國太平村ニ宿陣仕候處、同國魚沼郡千手
宿邊、賊勢屯集之趣相聞、監軍岩村精一郎ヨリ爲斥候人數差出候様申聞候付、弊藩高橋民部一隊、薩、長之兵隊ニ組合攻撃仕、
飯山、松代ヨリモ一隊ツ、右千手宿邊繰出、弊藩先鋒總括千賀與八郎儀モ、翌廿三日同宿邊相進ミ、宿陣、同日、監軍ノ令ニ
因リ、高橋武治一隊、薩、長、松代、飯山之兵隊ト俱ニ大平村ヲ發シ、道ヲ分チ、武治隊ハ薩藩、飯山藩ト共ニ同國魚沼郡千手

宿ヨリ十日町ニ入り、同月廿五日ニ到リ、水路ヲ分チ、同郡浦佐ニ至ル、武治隊大斥候トシテ椽原峠ニ進ミ、同月廿六日堀之内ニ入。

○真田幸民家記節略ニ云、四月廿日、賊徒飯山城下へ侵入、同廿五日、飯山城東安田渡口ニ於テ、右侵入ノ賊ト戰爭、勝利、諸隊追撃、賊徒越後路へ敗走、同廿六日、飯山近邊山中ノ賊ヲ涉獵シ、先陣富倉嶺、關川口兩道ヨリ越州荒井驛へ進軍、後四月四日、東山道總督府監軍岩村精一郎、御旗ヲ奉シテ飯山へ著、同七日、監軍及ヒ我本隊飯山出發、荒井驛へ進軍、高田藩ト談判之儀有之、同處ニ逗留罷在候内、加州、富山、薩州、長州等、右藩々之人數、北陸道ヨリ高田表へ追々到着ニ相成候處、會津並關東脫走之賊徒共中、越後邊所々屯集之由相聞候付、御監軍並諸藩會議之上、閏四月廿二日、先陣高田藩、二陣尾州藩、松本藩、三陣弊藩、魚沼郡千手驛之方へ相向ヒ候。

○松本藩記ニ云、信州列藩相議シ、閏四月朔日、越後新井宿ニ至リ、東山道監軍岩村精一郎殿、東京ヨリ著陣有之、信州之諸藩ヲ總括、北征之官軍出張ヲ相待チ、高田藩ト應接數日之處、奥越後並奥羽之賊徒征伐可致段、然ル處、松本城少人數ニテ、此節柄手薄ニ付、岩村精一郎殿指揮ヲ以テ、總人數五百五拾五人之内百八拾五人、隊長林忠左衛門引纏ヒ、松本へ歸藩イタシ候、殘兵三小隊中、老兼隊長水野伊左衛門、隊長神方新五左衛門、同鶴見六野右衛門隊等、其外輜重隊、閏四月廿日新井驛ヲ出立、諸藩ト合兵シテ、前後隊ヲ分チ、順序ヲ定メ、高田城下ニ至リ、松山郷へ進軍之處、安塚、松代邊ニテ賊徒ヲ及探索候處、海岸邊ニテ賊多數襲來之趣、岩村精一郎殿ヨリ指圖、諸々問道へ分隊、又ハ斥候ヲ出シ、巡邏ヲ嚴重ニス。

○内藤頼直家記節略ニ云、慶應戊辰年四月二十一日、隊長青山七藏二小隊引率、越後高田領荒井驛へ進軍、信州十一藩會議、監軍岩村精一郎參陣之上、軍議評決、越後筋進軍。

○高島藩記ニ云、四月廿七日、尾州松代、飲山、岩村田並弊藩、齊ク進軍、越後國新井驛ニ滯陣、後四月十九日、監軍岩村精一郎殿ヨリ小千谷屯集之賊徒討伐候様御達ニ付、同廿一日新井驛出立、中野村へ進軍、廿四日松代へ進軍、龍岡藩申合、柏崎邊問道斥候探索差出、同廿六日、野田村屯集之賊徒進撃候様、監軍ヨリ御達ニ付、高遠、龍岡、弊藩一同繰出候處、賊兵散

亂之報知有之ニ付、初ケ原迄進軍、同村守衛罷在候。

○龍岡藩記ニ云、閏四月七日、監軍、松代藩、飯田一同、富倉峠ヲ越へ越後國荒井驛へ相進、諸藩軍議ノ上、監軍ニハ同十九日同所出發、高遠、高島、岩村田三藩並ニ當藩ニハ、同廿一日同所進軍、高田宿陣、松ノ山通り相進。

○飯山藩記ニ云、城下侵入之賊徒共爲追撃、四月廿七日高田領新井驛へ二小隊、大砲一門、繰出シ、同所ニ滯陣仕居候處、賊徒松ノ山邊屯集之趣ニ付、爲先鋒進軍候様、從監軍岩村精一郎殿達有之、閏四月廿日同所進發、松ノ山ヲ經歷シ、廿四日十日町へ着陣、半小隊八十日町へ相殘番兵仕、一小隊ハ六日町へ進入、同廿六日夜、堀ノ内驛前後番兵仕候。

○内藤正誠家記ニ云、四月廿七日、賊徒爲追討進軍、越後荒井驛へ宿陣、諸藩申合、見張所並巡邏罷在、後四月廿一日、監軍岩村精一郎殿ヨリ指揮ニ依テ、即刻高遠、高島、龍岡、右藩ト相合進撃、同廿二日、安塚村へ著陣之處、弊藩ニハ同所口々問道等固守、斥候探索罷在候。

○堀直明家記ニ云、弊藩、松代、上田、椎谷諸藩ト千隈川東西ヨリ進軍、後四月七日、諸藩ト西大瀧ニ移陣ス、同廿二日、北越寺石村へ進軍。

○堀之美家記ニ云、戊辰四月、徳川脫走歩兵頭古屋作左衛門、賊兵引連、越後路ヨリ信州飯山へ討入候ニ付、軍監岩村精一郎江戸ヨリ到着、即チ同國各藩へ歩兵ノ趣被相達候ニ付、隊長寺島昌介、司令士北島八郎兵衛、兵隊召連、諸藩ト協力爭戰、賊兵敗走ニ付、越後高田口迄追撃仕候。

二十四日、關八州監察使三條實美、大納言江戶城ニ至リ、大總督ト共ニ諸道總督ヲ會シテ軍事ヲ議ス、二督、之ニ蒞ム。

○東征紀略ニ云、閏四月廿四日、大監察三條大納言殿、同附屬萬里小路辨殿、今日御著、御入城、夕刻ヨリ於御座間御評議被爲在、諸道總督初參謀等列席、三條殿、萬里小路殿御同席。

○北征紀事ニ云、閏四月廿四日、大監察使三條大納言至ル、未ノ刻城ニ入ル、直ニ軍事ヲ議ス。
二十五日、二督、江戸ヲ發シ、海路越後ニク赴、佐渡鎮撫使參謀津田信弘、小林隆麟及ヒ小濱藩兵之ニ屬ス。

○二督大總督府ニ遺ル書

梅天濛々敷、彌御清康珍重存候、然ハ、越後表へ發馬ニ付、隨從之藩御治定ニ相成候哉、片時モ早々申達候ハネハ、夫々都合モ有之候間、乍御世話敷相伺度候、其他昨日御決定ニ難相成分、何卒早々御治定希入存候、且今日、兩人依所勞不能登城、此段宜御沙汰願入度如此候也。

後 四月十七日

隆 平
永 祐

○ 追テ、參謀ヨリ夫々可相伺候間、宜御沙汰希入候、大亂書高免可給候也。東征總督記

○ 令拜見候、彌御勇健御在陣珍重存候、然ハ、越後表へ御出馬ニ付、御隨從兵隊之事承候、粗昨日モ申入置候通、新發田藩、若州藩御從ニテ可然存候、則今日、新發田藩へ可申達候、肥前藩之儀ハ、大村益次郎ヨリ可致應對候、藝州ハ當地へ御殘シニテ可然存候、此段御答申入候、御不例御自愛專一ニ存候、仍御答迄如是候也。

大總督府

閏 四月十七日

高倉 三位 殿
四 條 大夫 殿 北陸道先鋒記

參 謀

○ 按スルニ、本月十八日、大總督府、新發田藩兵ヲ以テ二督ノ從衛ト爲ス、既ニシテ故アリ、之ヲ止ム。

○ 高倉永祐勤勞事蹟ニ云、閏四月廿五日、東京表越前屋敷發行、五月七日、越後今町宿へ著。

○ 北征紀事ニ云、閏四月五日、大督參謀命シテ云ク、已ニ新潟總督ニ拜スレハ、向ニ卒ユル所ノ肥前、藝州ニ藩ノ兵ハ此地ニ留メ、若州ノ兵ハ引テ高田ニ至リ、之レヲ遣リ歸スヘシ、參謀二人共ニ高田ニ至リ、佐渡總督滋野井侍從ニ屬セシムヘシ、廿二日、大參謀ニ書ヲ致シ告テ云ク、本月廿四日ヲ以テ、北越ニ赴ク墨船ヲ情ヒ東海ニ航シ、凡ソ五日ヲ經、越後今町港ニ艤セン、廿二日、明日將ニ途ニ上ラントス、適々二條大納言下リ至ルト聞キ、故二期ヲ緩フス、廿五日、江戸ヲ出、品川ニ次ス、廿七日、墨船名ハ大坂、船將二人、名ハシーホルス、ロハトチウホルス、ヲ情ヒ、今日幅重器械ヲ載ス、廿八日、今日船ニ移ル、廿九日、今曉六字出帆、五月四日未刻、箱館港ニ達シ、薪水ヲ取り碇泊ス、五月十二字出帆。

○ 酒井忠祿家記ニ云、閏四月廿八日、北陸道御總督於武州品川浦、米利健蒸氣船へ御乘組ニ付、弊藩人數爲御守衛、御同船へ乘組、同廿九日同所出帆、東奥廻リ、五日經之處、逆潮逆風航行抄取不申、薪水乏相成候ニ付、五月四日夕箱館沖へ碇泊、薪水積入、翌五日同所出帆、同月七日越後國今町浦へ御着。

○ 津田信弘へ達書

佐渡參謀被 仰付、高倉三位、四條大夫、品川ヨリ外國艦ニテ北越へ發向ニ付、隨從被 仰付候事。津田信弘履歷書

○ 本條、宣達ノ日ヲ佚ス、按スルニ、小林隆麟モ亦信弘ト同一ノ令アルヘキニ似タリ、今見ル所ナシ。

○ 附錄一條

四條殿持參會計調書、

越後出張之人數 七千人之積

一日兵食入用 一金八百七十五兩

一ヶ月同斷 一金二万六千二百五十兩

五十日同斷 一金四萬六千二百五十兩

百日同斷 一金八万七千五百兩

復古外記 北陸道戰記 第六 明治元年閏四月二十五日

右之外

月給其外入用一ヶ月ニ 一金三千兩積リ
右之積リニテ、一ヶ月御入用、三万金無之テハ、御取賄出來不申候、
右之趣ヲ以、御評議御座候様致度候、以上。

北陸道

會計

方

東征總督府

閏四月廿一日

○是ヨリ先、督府、柳澤德忠彰太郎、三ニ命シテ京師ニ至ラシム、是ニ至リ德忠書ヲ上リ、封疆騷擾スルヲ以テ、藩地ニ在リテ鎮撫ノ事ニ服シ、弟信恒綱次ヲシテ代覲セシメンコトヲ請フ、總督、再ヒ越後ニ赴カントスルヲ以テ、令シテ後命ヲ俟タシム。

今般、於高田表家來之者へ、以御書取五十日限り上京可仕旨、被 仰渡之御請可申上段承知奉畏候、依之、早々上京可仕處、在所表へ罷下リ候旅中ヨリ疝症差發、著陣後、療養相加、追々快方ニ趣キ候得共、當國不穩之形勢、別テ在所三日市近邊、取風説甚敷、領内人氣騷立、粗暴之儀有之間敷共難計、痛心當惑仕候、此上領民動擾之程モ難計、實以心配仕候間、領内鎮撫精々盡力仕度奉存候、右ニ付私爲名代、弟綱次郎上京爲仕度、此段奉願候、以上。

柳澤彰太郎

德忠

閏四月七日

高倉三位殿

四條大夫殿北陸道先鋒記
柳澤德忠家記

○德忠家記ニ云、閏四月廿五日、北陸道總督府御本營、東本願寺へ右之願書差出候處、即日、應接懸リ宇和島藩宮部六右衛門方ヲ以、左之通御演達、

近々又候越後表へ御出陣相成候間、彼地ニオキテ御沙汰可有之、夫迄御名代御上意ノ儀御見合可被成候、此旨京地太政官へ御届置可被成候。

二十六日、山道官軍兵ヲ分チ、一ハ小出島驛ニ向ヒ、一ハ賊兵ヲ芋坂、及ヒ雪嶺ニ破リ、明日、進テ小千谷驛ヲ取ル。

○岩村高俊事蹟ニ云、閏四月二十五日、諸軍高田ヲ發ス、山手ノ軍千手驛ニ到リ、又ニ分割シ、一ハ三國街道六日町ヨリ小出島ニ向ヒ、淵邊、杉山之レヲ管シ、一ハ千手驛ヨリ直チニ小千谷ニ進ム、信、尾、高田ノ兵ヲ合シテ、高俊之レヲ統フ、千手、小千谷ノ間、芋坂、雪嶺ノ險アリ、而シテ小千谷ハ賊軍會津ノ本營ニシテ、險ニ據リ守備特ニ嚴ナリ、廿七日二十六日ノ誤、拂曉千手驛ヲ發シ、徐々トシテ進ミ、本軍ヲ芋坂ノ小村ニ止メ、斥候ヲ出シテ敵情ヲ覘フ、敵兵直チニ斥候ニ向テ發砲スト報ス、高俊則チ軍ヲ率キ、芋坂ニ到テ之ヲ望ムニ、賊砲臺ヲ山腹ニ築キ、頻リニ下射ス、信、尾ノ兵未タ戰ニ慣レス、且ツ山險ニシテ、加フルニ雨後ノ泥濘ヲ以テス、進退殊ニ便ナラス、故ニ松代ノ一小隊ヲ分チ、間道ヨリ敵ノ背後ヲ窺ハシム、此時正面ノ兵、躊躇進マズ、高俊自カラ直進、次ク者僅カニ五六、距離五十歩計リ、急ニ戰ヲ挑ム、賊兵壘ヲ捨テ遁ル、即チ山腹ノ砲臺ヲ收ム、猶山土ノ砲臺ヨリ頻リニ下射スト雖トモ、又隨テ直進追撃ス、賊又敗走ス、時ニ山頂ニ登レハ、日既ニ暮ル、敵ノ來襲ヲ警メ、雪嶺ニ宿ス、間道ノ兵モ亦來リ合ス、翌曉雪嶺ヲ發ス、小千谷ノ賊、雪嶺ノ戰敗スルヲ以テ、陣營ヲ徹テ遁ル、我軍進ンテ之ニ陣ス。

○薩、長二藩戰報節錄

閏四月廿六日曉、尾洲、松代、松本、高田等ノ兵千手ヨリ小千谷ニ進ム、賊雪嶺ノ險ニ據リ、山腹ニ砲臺ヲ設ケテ防禦ス、官

軍四ツ時前ヨリ七ツ半頃マテ攻撃、松代ノ兵峰踰候故、賊敗走、山上ヨリ大砲ヲ發シ候得共、官軍終ニ山上ニ押登リ、賊小千谷ノ方ニ走ル、此時夜五ツ時也、廿七日曉、小千谷ニ至ル、賊既ニ長岡ニ走候由ニテ一人モ無之、官軍代ツテ陣屋ニ入ル、官軍死傷十人計、姓名未詳、賊路傍ニ仆居候者一人、生捕四人、其外死傷多ク相見ヘ候。太政官日誌

○徳川義家譜ニ云、閏四月廿六日曉、千手宿ヲ發シ、四半時頃全軍真人村ヘ著陣、即刻、筑摩川左側通路ヘ斥候差出、發砲爲致候處賊徒ヨリモ砲發致シ候付、高田之兵ト牒合、右兵ハ山上ヨリ、弊藩人數ハ大砲隊並銃隊ヲ以、坦途ヨリモ進ミ、苦戰仕候處、弊藩先鋒總括千賀與八郎、自ラ途中ニ遺却有之候旌旗ヲ持、叱咤シテ前頭ニ進ミ候付、山上ヨリモ相進ミ、夕七半時頃迄戰爭仕候處、賊徒敗走、雪峠陣屋燒拂遁走仕候付、官軍池ヶ原迄進撃、同所ニ滯陣仕候、最初諸隊奮戰之節ハ、松本勢川向ヘ相進、松代勢ハ弊藩後軍ニ相備、山上ヨリモ高田勢、弊藩人數ト合シ砲戰仕候、弊藩人數山上ヘモ相登リ刻苦奮戰、坦途ヨリ向候兵ト挾討ニ仕、終ニ賊徒敗走ニ及ヒ申候、手負五人。千賀與八郎寺尾定吉、藤村庄太郎附屬大砲打方、西川鏗次郎、久野長一隊根岸金四郎、夫卒二人。

○榊原政敬家記ニ云、御領所並弊領爲守衛安塚村ヘ兼テ出兵爲致置候、一族榊原若狹一手、今般爲賊徒御追討追々御進軍ニ相成候ニ付、爲先鋒魚沼郡千手邊迄繰込候處、同所ヨリ三里餘、雪峠嶺頭、賊徒屯集之旨ニ付、閏四月廿六日、若狹隊其外尾州、松代藩人數等繰詰、本日午ノ下刻、若狹手ヨリ爲斥候追々指出候者、賊壘近ク進寄候處、左ノ手ニ當リ、賊兵兩三人相顯レ、小旗振立候ヤ否、二三人突出候ニ付、斥候之者共速ニ相應シ及砲發候内、分隊致シ、左一手ヲ以陣ヶ平ニ當リ、右一手ハ千曲川畔ヨリ繰詰、中軍若狹手ハ本道ヨリ攻寄、一同進撃烈戰中、若狹手ヨリ打出候大砲二發、賊陣中央ヘ著發候處、忽チ奔潰之色相立候ニ付、迅速ニ追詰、雪峠先登致シ乘取申候、其節若狹隊ニテ討死一人、榊原若狹家來、成瀬三千彌、手負二人、次郎、大砲打方、阿治、賊兵ニモ死傷數多有之候様相見候得共、引纏逃去、且首等打候テ、骸計捨置候分モ御座候、夫ヨリ追撃、申之中刻頃、池ヶ原村迄進軍仕候處、監軍岩村精一郎方ヨリ達有之、收軍仕、同所字池ヶ原新田ヘ宿陣、翌廿七日小千谷陣屋ヘ繰詰候得共、賊兵敗北致退去候ニ付、同所ニ陣取罷在候。

○眞田幸民家記ニ云、閏四月廿三日千手驛ニ入、廿五日斥候來リ報ス、賊兵小千谷ヲ距ル二里許、雪嶺ノ險ニ據リ、砲臺ヲ

築キ、官軍ニ抗衡スト、監軍因テ諸藩ノ兵ヲ部署ス、先陣高田、二陣尾州、三陣我藩、四陣松本、後陣天旗護衛隊原註、飯田一番小隊、司令柘植彦四郎、ト定ム、又十日町在陣ノ我五番狙撃隊、一番、四番二小隊、小出島ニ向ヒ、上田、須坂、六川ノ兵、信濃川ノ東岸ヨリ進ム、廿六日、雨ヲ衝テ千手驛ヲ發ス、道路泥濘行歩甚艱ム、真人村ニ至ル、斥候報ス、賊芋坂ノ險ニ在リト、於此總軍警備シテ進ム、忽チ前路ニ砲聲アリ、斥候來リ云フ、此ヲ距ル三十町許賊在リ、彼ノ砲聲ハ即チ我斥候ヨリ打放セシナリト、松本ノ兵、遙ニ期ニ後ル、故ニ我兵、高田、尾州ノ兵ト共ニ進撃ス、此地山路屈曲、岩石崎嶇タリ、賊險ニ據リ、砲臺ヨリ頻リニ發砲ス、我兵進撃スル能ハス、即チ七番、八番狙撃隊、一番、五番小隊ヲシテ、左傍ノ山上ヘ登リ、遠リテ賊ノ背後ニ出テシム、高田ノ兵及ヒ我遊撃隊、道ノ右旁ニ轉シ、河岸ヲ進ンテ賊ノ側面ヲ狙撃ス、時ニ川東ヲ進ム三藩ノ兵、遲緩シテ不至、或云フ、賊川ヲ渡リ東岸ニ出ツト、衆心洶々タリ、依テ我三番小隊ヲ川東ニ渡ス、尋ヒテ松本ノ兵モ亦渡ル、時已ニ申ノ半牌ニ及フ、本道ノ軍益進ミ苦戰スト雖トモ、主客ノ勢勢逸懸隔ス、已ニシテ我大砲二門、痛ク賊壘ヲ射ル、賊稍危懼ノ色アリ、先ニ山上ヘ登ル處ノ兵、潛然澗谷ノ中ニ下リ、峭壁ヲ躋リ、危巖ヲ攀チ、山背ニ出テ、突然賊ノ右側面ヲ擣ク、其不意ニ出ルヲ以テ、賊不知所措、隊伍大ニ亂ル、本道ノ官軍モ亦一齊ニ大呼シ、疾ク馳テ賊陣ヲ衝突ス、我藩兵先登タリ、賊落膽狼狽シテ退走ス、官軍之ヲ逐ヒ雪嶺ニ至ル、先是、賊砲臺ヲ此地ノ險ニ築キ後據トナス、之ニ依リ復我ヲ拒ム、銃砲ヲ連發スル甚シ、彈丸破裂雨注シテ聲天ニ震フ、監軍我六番小隊ヲ率ヒ、芋坂村ノ賊ヲ驅リ、間道ヨリ進ム、河原左京、監軍ノ命ヲ以テ五番狙撃隊、遊撃隊等ヲ率ヒ、左傍ノ山林ヲ攀チ登リ、之ヲ橫撃ス、又我兵ノ先ニ山背ヨリ討撃セシ四隊ノ兵ヲシテ、本道ヲ進ミ、鷹馳猛撃セシム、賊終ニ支ル不能シテ散走ス、遂ニ雪嶺ノ砲臺ヲ奪ヒ、薄暮池ノ原、新田村迄追撃ス、此夜暗黒、故ニ、此ニ布陣ス、諸藩ノ兵モ亦稍々著陣ス、依テ分配シ、夜警ヲ嚴ニス、此役屯在ノ賊凡二百五六十人ト云フ、殺傷若干、會津衛隊一賊ヲ生獲シ、翌曉之ヲ斬リ、首ヲ路傍ニ梟ス、我死二人、軍使附屬小林喜五之助、大砲運夫文吉、傷二人、五番狙撃隊吉澤十介、司、廿七日、官軍小千谷ヘ進ム、前日河東ヘ分配ノ我三番小隊、間道ヨリ進ミ河合村ニ至ル、賊先ニ渡口ノ舟ヲ奪フ、依テ銃卒ヲシテ百方之ヲ求メシム、偶小舟ヲ下流ニ得テ、以テ川ヲ渡リ、鹽殿村ヨリ峻坂ヲ躡ヘ、徹夜奮ヒ進テ小千谷ニ至リ、賊ノ陣壘

ニ入ル、時ニ印ノ半牌ナリ、原註、賊、寅ノ半牌、小千谷ヲ遁逃スト云、乃チ倉庫ヲ封シ、本軍ノ至ルヲ待ツ、辰ノ半牌、松本ノ兵至リ、巳ノ牌、我本軍至ル。

○松本藩記ニ云、閏四月廿四日、越後千手驛ニ進撃之際、賊多人數雪峠之嶮難ニ據賴シ、官軍ヲ抗禦スヘキ形勢ニ付、同廿六日岩村精一郎殿ヨリ、信州並尾藩、高田藩ノ兵隊ヲ指揮砲戰ス、賊兵死力ヲ盡シ應戰、此時精一郎殿ヨリ、弊藩二小隊ハ信濃川ヲ東ヘ渡リ、賊ノ潜伏ヲ驅リ、側面ニ迫リ可申段令アリ、即刻川ヲ渉ル、此ヨリ先、連日之霖雨ニテ水勢瀾漫漲リ、小船二三艘ヲ求テ、流ニ順ヒ、屈曲シテ彼岸ニ至リ、埋伏ヲ求ルニ、賊壹人モナシ、愈進軍、雪峠ノ賊ヘ向ヒ發砲、又進テ眞皿村ニ至ル、松代兵隊ト合シ、日既ニ没ス、雪峠ノ賊敗レ、陣營燒失、黒烟天ヲ焦ス、此夜同村ニ陣シ、斥ヲ出ス、廿七日拂曉、再度信濃川ヲ押渡リ、地藏峠間道ヨリ小千谷ヘ相進候處、賊徒一人モ不居合、同時松代一小隊進軍ニ付、申談之上、松代隊ハ同所陣所ニ居殘リ、弊藩三小隊ハ市中巡邏取締等イタシ、猶殘賊探索並宿役人呼出シ、夫々鎮撫方申付候處、追々本軍乘込相成。

○飯田藩記ニ云、越後筋賊徒爲追討應援人數一小隊、四月中差出候處、閏四月廿六日、越後國雪嶺戰爭之節、弊藩兵隊 錦旗御警衛ニテ出張、同日夕、先鋒ヘ入替リ相進ミ候處、賊徒散走致候ニ付、小千谷陣屋迄相進。

○堀之美家記ニ云、越後小千谷ヘ進撃被仰付、上田藩、須坂藩合併、同所ヘ討入候處、賊不戰逃去、右三藩ニテ小千谷警衛罷在候。

○若松記ニ云、閏四月廿六日辰ノ刻頃、眞人村ヨリ敵雪峠ヲ襲ヒ、衝鋒隊一手ニテ數刻戰ヒ、既ニ敵ノ三番手迄追返シ候由之處、敵ヨリ雲峠陣後ヘ不意ニ來、敵勢強ク、終ニ妙村見ヘ引取ル、其日桃澤手ニテ討死一人、手負二人ト承候。

二十七日、山道官軍、曉雨ニ乘シテ魚沼川ヲ渡リ、賊兵ヲ小出島驛、及ヒ四日市村ニ撃テ、之ヲ破ル、海道官軍モ、亦賊兵ヲ鯨波驛ニ撃ツ、賊退テ驛外ノ險ニ據テ抗拒ス、官軍克タスシテ退

ク、明日、賊兵守ヲ棄テ遁逃ス、官軍、乃チ進テ柏崎驛ニ入り、賊ノ斥候兵ヲ惡田村ニ撃テ之ヲ走ラス。

○薩、長二藩戰報節錄

閏四月廿四日、薩州一小隊、長州二小隊、松代一小隊、飯山一小隊、尾州一小隊、千手ヨリ千曲川ヲ渡リ、十日町ニ押出ス、廿五日曉、路ヲ分テ六日町ニ進入ルニ、賊一人モ不見、昨日小出島ノ方ヘ逃リ候由ナリ、夫ヨリ尾兵ヲ陸路ヨリ進メ、薩、長ノ兵ハ川舟ニテ浦佐ニ至リ、直様大斥候旁、尾兵ヲ橡原峠ニ進マシム、廿六日、薩州半小隊、飯山一小隊、尾兵ニ合シテ堀内ニ進ム、廿七日曉八ツ時過、大雨ヲ侵シ、薩半小隊、長二小隊ヲ以テ、浦佐ヨリ魚沼川ヲ渡リ、賊ノ斥候ヲ追散シ、直ニ小出島ヲ攻撃ス、賊驛口及ヒ川堤ニ假砲臺ヲ設ケ、烈シク防戰、薩、長之兵兩道ヨリ奇正互ニ進ミ、佐梨川ヲ渡リ市中ニ突入シ、激戰シテ遂ニ小出島ヲ破ル、堀内ノ兵ハ川向ヨリ四日市ノ賊ニ當リ、薩、長ニ應援ス、賊悉ク會津道六十里越ニ走ル、乃チ四日市ニ飯山之兵、小出島ニ松代之兵ヲ備ヘ、餘ハ堀内ニ引揚固守ス、此戰、曉六ツ半時ヨリ、一小時間餘ナリ、薩、長討死九人、手負二十人、尾州手負一人、賊ノ死傷ハ餘程多分有之様相見候。太政官日誌

○慶應出戰狀ニ云、閏四月廿日、越後高田軍議、翌廿一日出軍、安塚、千手、十日町、河治、田中ノ險ヲ經テ、鹽澤、六日町、魚沼川乘舟、浦佐ヘ著陣ス、諸々守ノ賊兵引退テ小出島ニ屯ス、賊ヲ襲撃セント廿六日七半時分、吾三番隊右半隊、夜入堀ノ内ヘ陣ス、小出島ヲ去ルコト半里程、番兵差出申候處、賊ヨリ四日市ヘ渡舟場、堀ノ内ノ地高キ岡ノ頂キニ篝火ヲ焚キ、兵隊集リケル形ヲ顯ス、度々斥候差出シ窺ヒ、虛火ナラント致決議、川舟ヲ問ヒ候得ハ、賊ヨリ引揚一艘モナシ、其夜七半時、軍ヲ調、四日市渡り場ヘ出軍シケルニ、四日市、川端ニヶ所ヘ篝火候者、竿ニ白印ヲ付、四日市人家ニ逃込ミ申候、即軍ヲ散隊ニ立付、既ニ探索ノ砲ヲ發セントスルニ、賊四日市人家ヲ楯ニ取り、魚沼川ヲ隔、銃ヲ打出ス、味方ノ陣場川端ノ地、賊ヨリ草木迄モ伐拂ヒ置シナリ、朝六時ヨリ五半時分迄烈戰ス、左半隊ハ長州奇兵五番、報國九番ト浦佐ヨリ進ミ、小出

島ニ衝入、放火シ、責打烈戦ス、賊敗走、直ニ四日市ノ賊ニ掛リシニ、賊前後ニ責立ラレ敗走、戦地賊死亡多ク、大砲、小銃、物ノ具等打捨敗走仕候、死八人、右半隊教導松崎勘助、左半隊小頭長藤吾、伍長佐藤林藏、土村 傷六人。小隊長有馬誠之丞、斥候役高崎若 軍吉、夫卒、珍樹、兒玉清兵衛、戰兵白井道哉、兒玉源兵衛、野崎半左衛門 助、東次郎、太、戰兵松崎和、田直左工門。

○徳川義宜家譜ニ云、越後表先鋒總括千賀與八郎、同國大平村ニ宿陣仕候節、監軍岩村精一郎差圖ニ任セ、薩、長之兵隊ニ組合差向候、高橋民部一隊、閏四月廿七日曉、薩、長、松代、飯山之諸藩ト一同攻撃、右之内、長藩、松代藩ハ浦佐之渡ヲ越シ相進ミ、薩藩、飯山藩并弊藩ハ魚沼郡堀之内ヨリ魚沼川堤ニ出張弊藩先鋒ニテ六半時頃ヨリ四日町小出島へ進軍殊死奮戦之處、五半時頃ニ至リ、同所人家焼亡、賊兵不殘敗走及ヒ申候、手負二人。高橋民部隊銃手渡邊新三郎、夫卒一人

○戊巳征戦紀略ニ云、閏四月二十七日拂曉、我兵報國隊、薩兵ト大雨ヲ衝キ魚沼川ヲ渡リ、途中賊ノ斥候兵ヲ追ヒ直ニ進ンテ小出島ヲ衝ク、賊佐梨川ヲ隔テ岸上ニ壘シ、烈ク防戦ス、薩兵ハ正面ヨリ進ミ、我兵ハ上流ヲ亂シ、市中ニ入ル、賊ノ槍手兩傍ノ屋中ニ伏シ、閃出シテ我ヲ撃ツ、我兵縱横突戦シ、奇正挾攻ム、遂ニ之ヲ破ル、賊將某疵ヲ負テ走ル、堀内ノ兵ハ同時魚沼川ヲ隔テ、四日市ノ賊ニ彈射シ、小出島ニ應援ス、是日、我兵士杉山篤太郎、伊藤俊三、山田藤五郎、大本昇、吉武五郎、司令元森熊次郎原註、後死、松村新藏、嚮導飯田伊之助、兵士貞永卯之助、橋本九兵衛、原註、後死、田村治之助、田中與兵衛、小出島ハ會賊ノ要地ニシテ、六十里越ヨリ兵ヲ越後ニ出スノ路ナリ、敗兵皆六十里越ヨリ會津ニ入ル、我兵移テ堀内ニ陣ス。

○眞田幸民家記ニ云、後四月廿七日、官軍越後國魚沼郡小出島ヲ取ル、原註、會ノ陣屋アリ、同郡小千谷陣屋ヲ距ルコト五里、崎角ノ勢ヲ張ル、尤要衝ノ地ニシテ、賊兵ノ恃ム所ナリ、初我藩兵同郡千手驛ヨリ分隊シテ、原註、本隊ハ直チニ進ンテ小千谷ノ賊ヲ討ツ、六番狼撃隊、一番小隊、薩、長、尾、飯山ノ兵ト共ニ、廿四日信濃川ヲ渡リ、十日町ニ入ル、賊兵昨日已ニ逃ル、即チ我兵先進ンテ八家嶺ノ險ニ據リ、廿五日、長兵ト共ニ六日町ニ入ル、薩兵別路先ツ到ル、聞ク賊兵昨日三國嶺ニ於テ、上州ノ官軍ト戦ヒ敗走シテ、前宵此地ヲ退去スト、廿六日、我四番小隊來ル、乃チ先隊進ンテ五日町ニ陣ス、本日曉、浦佐へ進軍スルノ處、薩、長兩藩先ツ魚野川ヲ渡ツテ、小出島ノ賊ヲ撃ツ、天明、砲聲雷ノ如ク起ル、即チ疾ク進ンテ小出島ニ到ル、兩藩ノ兵、一時苦戦スト雖賊終ニ敗走シ、放火焰々タリ、則チ兩藩ニ代ツテ、四日町ノ殘賊

ヲ掃撃ス、時ニ我四番隊亦到リ、相共ニ賊ヲ追フコト數里ニシテ歸リ、兩藩ト議シテ我兵ヲ留メテ、小出島ヲ守、會津間道六十里越、大白川口ノ賊ヲ禦キ、且近方ヲ鎮ス。

○毛利元敏家記ニ云、閏四月廿七日、越後小出島并鯨波兩所ニテ戰爭仕候、死一人、清水甚藏、傷四人。軍監梶山鼎介、二番小隊桂富田和吉

○飯山藩記ニ云、閏四月廿七日曉、人數四日町渡船場上堤迄出張候處、賊徒共、對岸堤上ニ砲臺ヲ設ケ、砲發致シ候ニ付、弊藩ヨリモ烈シク打立候折柄、薩、長兩藩、浦佐ヨリ佐梨川ヲ渡リ、小出島へ突入、放火候間、弊藩モ其機ニ乘シ、激流ヲ亂リ、四日町ヲ打破リ、賊兵一時潰散シ、蹤跡モ知レヌ候ニ付、廿九日迄番兵仕、松本藩ト交代シ、堀ノ内驛へ引取、手負一人。物頭本多丑藏

○松本藩記ニ云、閏四月廿七日、小千谷へ相進候處、同日朝小出島戰爭有之、會藩敗兵逃來可申候間、松代二小隊ト申談、無洩可討取様、岩村精一郎殿ヨリ被申達候ニ付、即刻、川向木津村へ轉陣イタシ、探索等差出候處、右敗兵ハ六十里越ヨリ落行候由相聞、翌廿八日地理不宜ニ付、川口宿へ轉陣。

○若松記ニ云、閏四月廿七日卯ノ刻頃、薩、長、尾、松代等ノ人數、原註、凡七百餘ト聞ニ、小出島へ襲來ル、并深山内隊、町野手合百二十人計ヲ以、三手ニ分テ、佐梨、四日町ノ兩川ヲ夾ミ、互ニ砲戰、敵兵佐梨川ヲ一時ニ渡リ、市中へ亂入、接戦數刻、敵死傷多シ、去共勢盛ニ、市中ヲ放火シ、四方取圍ミ、發砲夥シ、并深隊長都合七人、敵中ニ有テ苦戦シ、劔ヲ拔キ、槍ヲ取テ一方へ向フ、丹羽九八郎、渡部源次郎横合ヨリ鎗ヲ入、敵ヲ突伏、源次郎天晴ニ討死ス、池上武助拔來リ手負ス、如何ニモ難戰、衆寡不對、機械彈藥等悉ク失ヒ、終ニ午ノ刻後四日町へ引纏、手術ヲ失ヒ、去トモ敵更ニ不追、大白川通八十里越ニテ、奥州叶津へ引取候事、討死九人、郡内籠五郎、樋口常作、望月武四郎、渡部源次郎、手負九人。池上武助、秋月新九郎、野村唯三郎、佐藤勝次郎、橋本豊治、佐藤源右衛門、松尾延藏、澤田傳吾、山内隊二人、手負九人。佐藤且彌、入江久太郎、山内隊一人、池上武助家來一人

○薩、長二藩戰報節錄
閏四月廿七日、薩州一小隊、長州二小隊、加州二小隊、二砲門、高田一手、前夜ヨリ申合、未明、鯨波前七八丁迄押出シ候處、加

州、高田ノ兵未來候故、援兵ト定置候薩、長ノ兵ヲ以、直ニ鯨波ヲ攻撃ス、賊驛口ニ邀戰ヒ、終ニ不能支、人家ヲ自燒シテ走ル、薩、長追擊シテ鯨波驛外ニ至ル、高田、加州ノ兵追々來リ加ハル、賊柏崎ノ前右手ノ山ニ依リ、松林ヲ楯トシ烈シク防戰、山下ハ水田ニテ、是日、大雨如傾、溪水暴漲、薩、長半隊ヲ以テ勇進、其山ヲ奪ヒ、直ニ萬神堂ヲ攻ントス、加州勢繼カス、且兵疲ル、ヲ以テ、鯨波ニ引揚候、今日長州討死二人、手負七人、高田討死三人、手負八人、加州討死六人、手負廿四人、同廿八日、桑名、水戸之賊及ヒ步兵等、昨夜ヨリ柏崎ヲ捨テ逃去候様子相聞候ニ付、官軍進テ柏崎ニ入、要地ヲ占據ス、賊一二里外ニ盤踞シ、斥候三四十人ヲ出ス、官軍擊テ之ヲ退ク。太政官日誌

○金澤藩記ニ云、北越爲鎮壓越後青海川村邊迄人數差出置候處、賊徒鯨波驛等切所ニ據、歸順不仕候ニ付、閏四月廿七日早曉三好軍太郎ヨリ兵隊鯨波へ進擊候様申談、薩州、長州、高田、暨弊藩諸勢追々相進、弊藩一番手隊長高島猪太夫、鯨波驛へ相進、同所ヨリ山ノ上ニ屯集ノ賊兵ヲ、速ニ一小隊ニテ烈シク討立、賊左右へ散亂、死多有之弊藩隊中ニモ武井彌三右衛門、水上德次郎戰死、竹村傳次郎重創ヲ蒙リ、銃丸猪太夫ノ右肩ヲ貫キ、應援不繼、不得止濱ノ手小高キ所へ引集討合中、永澤理右衛門賊一人討斃之、總軍總引ノ時、猪太夫殿ス、賊徒尾擊シテ止マヌ、水登清四郎、村尾六之丞留リ、賊徒ヲ討斃シ、猪太夫ニ追及ヒ、二番手隊長本美和介谷根口ヨリ山道ヲ經、鯨波ニ向フ、途中砲聲ヲ聞キ、急ニ鯨波へ趣ク、時ニ一村已ニ猛火ト成、道路辨セス、幸ヒ弊藩使番成田外儀助、火ヲ隔テ我兵ヲ招ク、一隊是ヲ見、聲ヲ發シ、烟中ヲ經過シ、驛外ニ出、猪太夫賊兵ヲ追擊シ、山麓ニ逼リ、應援不繼、力戰スルヲ見、美和介隊進擊、賊終ニ退ク、更ニ驛ノ右傍ニ出、山半山麓ノ賊兵ヲ攻撃ス、賊山左ニ潛伏スル者、銃ヲ發スル事雨ノ如シ、美和介隊、驛左高所へ登リ之ニ應ス、石黒鑑太夫ナル者、黃巾ヲ以テ腕ヲ約スル賊一人ヲ討斃シ、進テ其首ヲ斬ントス、銃左肩ヲ貫クヲ以テ退ク、此ニ於テ第一、第二兩隊相合、積薪ニ蔭翳ノ賊徒ヲ射擊ストイヘトモ、賊銃ヲ發スル事殊ニ甚シク、兵衆創ヲ蒙ル者頗ル多シ、此時薩州兵代テ敵ニ當ル、因テ弊藩兵驛傍ニ到リ、糧ヲ喫シ休息スル事少時、又進テ銃ヲ發スル事一百餘、賊ヲ斃ス事若干、大砲隊長水上喜八郎、一番砲ヲ左方小徑ニ繰出シ、驛外右ノ方ノ賊兵ニ當リ發砲ス、賊、街道左ノ山へ相集ル、又砲ヲ廻轉シ直ニ之ヲ射擊ス、賊又大砲一門ヲ運

轉シ、海岸ノ陸邱ニ出、小銃ヲ合テ頻リニ射出ス、銃丸喜八郎分隊司令役橋本一之進ノ左腕ヲ貫、更ニ砲ヲ前面凸處ニ進メ、賊ノ大砲ヲ狙ヒ射出スル事數十、此時賊砲ヲ擊碎シ、賊命ヲ隕ス者許多、然ニ彈藥殆盡、鯨波火勢猶盛ナルヲ以テ、彈藥運送スル者至ラス、因テ霰彈ヲ以テ烈シク射擊ス、賊終ニ逃去、此ニ於テ第一砲街道へ繰出シ、第二、三砲ト相合シ、驛外ニ於テ發砲ス、薩州兵、喜八郎隊ノ苦戰ヲ察シ、慙懣ニ慰勞シ、代テ敵ニ當リ、喜八郎ヲシテ暫ク休息ヲ勸ム、喜八郎隊之ヲ辭ストイヘトモ、薩州兵速ニ大砲五門ヲ進メ來リ代ル、因テ第一砲ハ右ノ方ニ轉シ、山手ノ賊ニ向テ發砲ス、賊退去、二番砲鯨波入口右方高キ所ニ引上、相對スル山嶺ニ在ル賊ニ向ヒ發砲數度、賊潰散ストイヘトモ、猶山嶺相接スル海岸ノ小山ニ屯集ス、因テ砲ヲ驛外ヨリ海邊へ轉出シ、賊ヲ射擊スル事二十七八度、又砲ヲ驛外へ廻轉シ發砲數回、更ニ海邊ヨリ進ミ、直ニ山白砲ヲ以テ賊ヲ攻撃ス、三番砲ハ初メ應援トシテ青海川、五軒茶屋口ニ在、其後參謀指揮ヲ以テ鯨波へ繰込、第一、第二砲街道ニ備へ、賊ヲ攻撃スルニ遇ヒ、合テ一ト成、戮力發砲ス、薩州兵砲ヲ出シ、代テ敵ニ當ルニ及ンテ、第三砲ハ海濱へ繰出シ、賊ヲ攻撃ス、其内官軍力ヲ彈シ進擊スルヲ以テ、賊支ル事能ハス、遂ニ潰走、夕七時頃、參謀ノ差圖ヲ以テ、弊藩總勢高田勢ニ繼引揚候、死五人、一番手隊長高島猪太夫、水上德次郎、武井彌三右衛門、傷二十三人。高島猪太夫大砲隊長水上喜高猪太夫隊司令役西村與三郎、高島猪太夫隊竹村傳次郎、松本市之丞、千秋覺右衛門、清水權太郎、安宅丈三郎、辻金左衛門、山崎啓之助、中山市之丞、高桑十左衛門、浦田直次郎、村尾六之丞、西村要助、松山喜太郎、杉本美和介、高橋新太郎、大町彌八郎、鍋澤和吉、大西清作、石黒鑑太夫、越山善太郎、水上喜八郎、高橋熊次郎

○慶應出軍戰狀ニ云、閏四月廿七日、賊鯨波へ屯集ス、長州一小隊、砲二門、高田一小隊、砲一門、加州一小隊、砲一門、御國ヨリ四番小銃隊、二番砲隊三門、十二字比ヨリ於鯨波相戰、四字比ニ敵引退候故、青海川迄引揚候。

○戊巳征戰紀略ニ云、閏四月廿七日、海道ハ未明ヨリ我兵報國、薩兵ト鯨波ヲ襲擊ス、賊惶遽支ルコト能ハス、人家ヲ燒テ走ル、我兵方ニ追擊ス、高田、加州、富山兵來リ稍ク援ク、賊驛外ニ留リ、水田ヲ前ニシ、山林高處ニ據リ拒戰ス、官軍進ムコト能ハス、薩、長半隊ヲ以テ、暴雨ヲ冒シ、勇進シテ右手ノ一山ヲ奪ヒ、勢ニ乘シテ萬神堂ヲ取ラントス、加州兵後繼セス、

誤テ我兵ニ放射ス、我兵遂ニ鯨波ニ退ク、兵士増野矢之助、早川文藏死、林市太郎、劍山三郎、福良忠三郎、生雲平二郎、藤川寅之進傷ク、二十八日桑名、水戸等ノ賊、柏崎ヲ棄テ走ル、官軍斥候ヲ出シ、續テ柏崎ニ入り、賊ノ斥候兵阿久田村ニ出ツ、追テ之ヲ走ラス。

○榊原政敬家記節略ニ云、弊領爲岡家老竹田十左衛門一手之人数、兼テ鉢崎出張爲致置候處、今般賊徒爲御追討御進軍ニ付、致先鋒、閏四月廿七日、薩、長、加三藩人数一同追々繰出シ進軍候處、賊兵柏崎領鯨波驛へ出張相支候ニ付、一同追撃之處右驛ヲ放火忽敗走イタシ、驛外往還筋、左右之山林へ據、要地砲臺ヲ設ケ相拒候ニ付、直ニ追詰、諸手一同進撃、大小砲打立候處、賊巢ヨリモ大小砲打立候間、數刻及奮戰候得共、折節風雨烈敷、日暮ニ相成候ニ付、薩、長軍事方ヨリ沙汰有之、薩、長、加三藩人数一小隊ツ、同驛ニ相殘シ、弊藩人数ハ、青海川村へ揚取、首級捕來申候、同手討死三人、物頭今井新左衛門、竹田十左衛門、組足輕京手負八人、日付水野瀧之助、大砲方田中金之助、山本玄藏、今井新左衛門、組足輕小出豐吉、衛門家來今井與助、今井新左衛門、組足輕京手負八人、秋山新吉、幸山七十吉、西洋銃隊足輕伊藤幸三郎、物頭伊藤弓五郎、鐵持孫太郎、翌廿八日、前三藩之人数、各一小隊并十左衛門儀モ一小隊相卒ヒ、大斥候トシテ柏崎驛迄罷越、容子見定メ一ト先揚取、諸手夫々分配、同所へ繰込候處、惡田川邊殘黨相見候ニ付、薩、長人数之内ニテ追撃候處、賊等同所ヲ放火シ、何方共不知致潰散候、依之、柏崎驛ニ宿陣、諸手一同口々嚴ニ守衛罷在候、右戰爭之節、領分境谷根口ハ兼テ出兵爲致置候家老村上主殿隊ハ、一手之内、物頭二組、銃手一小隊、薩、長兩藩之人数一同、鯨波驛南城山へ繰登セ、賊兵横合ヨリ打立、加州人数モ相加リ、大小砲ヲ以激戰致シ候、尤主殿儀ハ残り人数相卒ヒ、爲應援鯨波驛端迄繰下申候、其後柏崎表進軍ニ相成候ニ付テハ、街道嚴ニ相守リ候處、沙汰ニ付、本道筋揚取、谷根口守衛罷在候。

○前田利同家記ニ云、北陸道爲鎮壓弊藩ヨリ指出候兵隊之内、堀丈之助、宮崎久兵衛二小队、越後上輪村へ出張致居候處、閏四月廿六日夜、三好軍太郎等ヨリ、賊徒不容易舉動有之由ニ付、翌早曉青海川へ繰出候様申來、則明曉七ツ半時出發致シ、青海川ヨリ鯨波へ迅速兵ヲ前メ候處、途上既ニ砲聲繁ク相響候ニ付、同驛濱海之邱陵ニ疾ク攀躋リ、不取敢及砲戰候處、賊衆等豫テ宜軍重兵ヲ以來向有之儀傳聞罷在、地勢要害之處ヲ撰ミ、多人數屯集潛伏罷在、林莽之間ヨリ砲擊致シ、官軍ニ抗

衛仕候故、味方地利ヲ得ス、誠ニ艱厄之場所ニハ御座候得共、或ハ山ニ因、或ハ海之手へ向ヒ、薩州、長州、加州、高田暨弊藩凡五藩之兵奮發力ヲ戮セ、銃砲烈ク打立、諸道ヨリ進撃仕候處、賊勢大ニ挫衄シ、遂ニ潰亂敗走致シ候、手負四人。上林善文之丞、牧砲次郎、坂井彌右衛門、

○奥越戰爭日記節略ニ云、第一隊三百人計リ、閏四月十六日、柏崎泊リニテ七日逗留、其内ニ浮撃隊參リ候ニ付、人数引分ケ新道固メ、殘人数ト桑名藩、合セテ貳百五十人、柏崎宿へ固メ候、右浮撃隊ハ川浦夜討之節、敗軍之汚名ナス、カント先陣ニ進ミ、鯨波ニテ固メ致候處、廿七日曉七半頃ヨリ、米山峠ヨリ官軍凡千人程、番兵所へ大砲打込ミ、徳川方小人数故、追迫入亂打合候内ニ、浮撃隊長木村大作、兵士貳三十人引分ケ、山へ回ハリ、山下へ烈シク打下シ候處、官軍方ハ徳川之敵、裏之山手へ多人數近キ候間、一統引上候様ト喇叭吹出シ、引色見懸ケ追討致シ、大砲貳挺、小筒十五挺分捕致シ候、官軍方大敗軍ニテ、米山峠へ引上候ニ付、彌々追討之支度之所へ、小千谷口破レ候由注進來候故、無餘義此場引上ケ、妙法寺村へ參リ、此所ヨリ一里半砂山ト申所へ番兵附ケ置、廿八日ヨリ五月六日迄固候内、番兵所ニテ度々戰候へ共、雙方格別之儀モ無之。

○若松記、田中鉦之助軍務調書ニ云、閏四月十九日、雷神隊總督立見勘三郎手ニ付、人数三百五十人程鯨波へ出兵罷在候處、水戸藩百五十人程來リ合兵、同廿七日黎明、敵襲來リ、烈敷砲戰致候處、地利不宜、驛ヲ引、道脇之松樹へ取敷戰爭候處、敵兵敗走、討取四級、源氏車ノ紋付タル旗貳本分捕、敵ハ薩、長、高田、加州之由、其後、夫ヨリ柏崎へ引上ケ、追テ妙法寺へ引取申候。

○泣血錄舊桑名藩士中村武夫良猛所著ニ云、閏四月十二日、我同志盡入柏崎、即時謁公、公惻然弔死繼亡、即夜大賜酒肴勞之、衆莫不感奮、柏崎人心翕然大振、十五日、公命勝願寺設大法會、親弔鳥羽以來死事者、即大改軍制、以軍事目付立見鑑三郎、大目付松浦秀八、横目町田老之丞爲隊長、以軍事目付富永太兵衛、横目馬場三九郎、横目大平九左衛門爲副長、以山脇十左衛門爲軍事奉行、他黜陟大有差、處分已定、於是公以其十六日徙于加茂、當是時、西軍已發高田、左軍據青海川、右軍據小村嶺、翼兵據谷根、小

管以通逼柏崎、於是立見督一隊據婦人阪、松浦督一隊據廣野嶺、町田督一隊出大河內、而會津衝鋒隊出上條口、扼小村之敵、兩陣相持未戰、小河內有城山、可以瞰敵營、町田欲俯擊拔敵營、奪米山以臨頸城、乃與立見馬場、僦土人熟地理者、以廿六夜冒大雨上山瞰敵營、々々炬火如星、自谷根連青海川、三人大怪、望見良久、及曉炬火漸滅、而鯨波砲聲大起、三人大驚、輾轉下山、走至鯨波、此日味爽、敵乘曉襲鯨波、我斥候退、敵進火鯨波、一軍上廣野嶺、一軍向婦人阪、立見督策奪關、馬場富永在柏崎、以所部來援、我奇兵擊走廣野嶺之敵、婦人坂之敵動、立馬場叱咤益振、敵遂退、二子拔刀大呼、下山奮前、敵益走、追至鯨波驛中、斬馘數人、復收據山、敵亦據鯨波、戰自卯至戌、敵兵力屈、所在放火而退、松浦遂以此役傷、小村之敵、聞敗不敢來攻、我兵方議攻守之計、而小千谷之敗聞遽至柏崎、遂撤鯨波之守至柏崎、休憩一夜、敵懲敗不敢至、廿八日、去柏崎次妙法寺、此役薩長加州高田等千餘人來攻、我兵僅二百、器械弊惡、敵死傷五十餘人、我死傷不過十餘人、原註、朝日山役、得敵、五月朔、所齋手簿、以故奪之。新定隊號、立見所部、號曰雷神隊、松浦所部、號曰致人隊、町田所部、號曰神風隊、立見出屯赤田、馬場屯內大塚、町田屯內方、先是水瀨市川三左衛門、朝比奈彌太郎、以所部六百人脫走、在出雲崎、鯨波之役、來援至荒濱、廿八日、進攻柏崎、不利、退守椎谷。

○松平容保、重ネテ兵ヲ長岡、及ヒ與板ニ發シテ官軍ニ抗ス。

○結草錄舊會津藩士杉浦佐伯成忠所著、節略ニ云、明治元年閏四月、曩キニ於若松城奥羽越既ニ連合ス、獨リ長岡ノミ關ラス、依テ佐川官軍行テ屈服サセント議ス、既ニ精兵八百名及ヒ砲兵二隊ヲ率ヘ、通行ノ傳ヲ驛ニ命ス、廿七日、長岡城ニ到リ、其國老河井繼之助ニ面會センコトヲ乞フ、不幸ニシテ妙見村へ出張ノ故ヲ以テ果サス、此ニ於テ直チニ妙見村ニ赴ク、又接田屋村へ返行ノ答ヘアリ、又直ニ行ク、途ニ於テ河井氏ノ使者來ルニ逢フ、使者曰ク、河井氏ハ城中ニ議事アリ、願クハ行ヲ止ヨ、佐川肯セスシテ、即チ接田屋村ニ到ルニ、果シテ河井諸將ヲ集メ會議スルニ逢フ、佐川突然入ル、河井ノ曰、君ノ狀事虛喝極レリ、先ニ八百ノ兵及ヒ砲隊二隊通行ノ告アリ、人民夫役ノ防害甚シ、且ツ我小國ト雖トモ、長岡領地へ他人一步タニ入ルコトヲ聽サス、迅速退軍スヘシト、確呼トシテ勇辯水ノ流ル、カ如シ、佐川曰、夫レ兵ハ奇道ヲ貴フ、請フ咎ルナカレ、敢問フ、君言ヲ食マサルヤ否、河井ノ曰、吐口僞言ナシト、佐川曰、小千谷驛ノ衆敵ハ我拂フヘシト、此ニタイテ別レテ師ヲ長岡城下ニ移ス、廿九日午後、我隊砲兵及ヒ佐川、土屋、結義隊原註、渡部英次郎、井德川步兵、同新遊擊隊ハ與板へ、金田百太郎隊ハ原注、金田ハ後脫足、脇ノ町驛ニ出兵ス。

是月、是ヨリ先、督府、安藝藩兵ニ命シテ、綾瀨橋ヲ警守セシム、是ニ至リ之ヲ罷ム。

藝州藩

三才村綾瀨橋御固メ被 免候事。

閏四月 淺野長勳家記

五月二日、督府、諸藩會議所ヲ小千谷驛ニ設ケ、軍事ヲ議ス。

○松本藩記ニ云、五月二日ヨリ小千谷宿ニ於テ官軍會議所御設ニ相成、日々爲軍議、軍事方掛之者罷出ル。
○飯田藩記ニ云、五月七日、御用有無ニ不拘、各藩壹人充、晝夜會議所へ相詰候様達有之、又云、五月四日、會議所へ罷出候様達ニ付、同所へ罷出候處、左之通達有之、
總軍之合印無之テハ不都合、自然間違之儀出來候モ難計候間、左之通取究、
一合幡 白赤黒 三本 但、寸法、木綿一巾、長サ貳尺、吹流シ、品ハ木綿、絹兩様之内、
右幡互ニ振合候事、
一合印 白木綿腕或ハ手首結候管、其節之御沙汰次第之事、

同八日、異變之節ハ、於會腕議所號砲二發砲發致候旨達有之、
一總軍合印、左之方ニ腕白晒木綿ニテ相結候様、會議所達有之、

同十二日、會議所ヨリ左之通達有之、

總軍標章、是迄左之方ニ腕結候處、今晚ヨリ右手首三寸程上リ候處、結付可申事、

一合儀之儀ハ、是ヨリ赤ヲ用ヒ可申事、 一合言辭ハ、是迄之通之事、

○督府ノ長岡藩兵ヲ徵スルヤ、牧野忠訓依違シテ兵ヲ發セス、既ニシテ其老臣金穀ヲ獻シテ、出兵後期ノ罪ヲ贖ハント請フ、亦果サス、是ニ至リ忠訓老臣ヲ軍門ニ遣シ、書ヲ上リテ國情ヲ陳訴ス督府之ヲ卻ケ、軍ヲ進メテ忠訓ヲ討ス、忠訓、乃チ兵ヲ封疆ニ配置シテ官軍ニ抗ス。

○北征紀事ニ云、四月三日、牧野駿河守向キニ出兵ヲ命ス、遷延期ニ後ル、重臣植田十兵衛密ニ參謀ニ詣リ、金穀ヲ獻シ、其罪ヲ償ハント請フ、

又云、長岡藩謝罪ノ爲メ、金三萬兩ヲ獻セント欲シ、植田十兵衛歸藩セント請フ、之レヲ許ス。

○牧野忠毅家記ニ云、四條、高倉之御兩卿、北陸道御下向之趣ニ付、重臣植田十兵衛御用伺トシテ、三月十五日長岡出發、越後國境マテ罷越、御兩卿高田御滯留中、同所ニ扣居、御東下之節隨行被命、武州板橋驛迄陪行ス、於同所參謀衆ヨリ軍資金獻納之儀御内達有之、急行ニテ歸國談判中、三國嶺邊戰爭、道路塞リ遂ニ復命致兼候、

又云、徳川氏 御親征被 仰出、北陸道御先鋒四條、高倉之御兩卿、同國高田迄御下向有之、其前差出シ置候重役植田十兵衛、副使木村竹吾へ兵隊御用ニ付可差出旨、參謀衆ヨリ達シ有之、自然 御親征之御用トモ相見へ候處、徳川氏ニ於テハ、一方ナラサル家筋ニ有之、其情其義兵隊差出シ兼、且數代勳功之徳川氏ヲ、一旦ノ齟齬ヨリ 御親征被 仰出候段、如何之故ニ有之哉ト、固陋之風習疑惑ヲ生シ、藩情モ治リ兼候ニ付、重役山本帶刀、副使川島億二郎歎願ノ爲メ、御總督府へ可罷出ニ決議、其節之願書寫、
歎願書、

誠恐誠惶謹テ奉申上候、徳川慶喜、去冬大政奉還其後間モ無之、十二月九日、御大變革被 仰出候處、慶喜部下之者、臣子之私情ヨリ、何トナク心中不穩趣相聞へ候ニ付、自然粗忽之所爲有之、宸襟ヲ奉惱候テハ、尊王之素意ニ背キ、深ク奉恐入トノ微衷ヨリ、右趣意御届申上、大坂表へ引取、其後尾張前亞相越前宰相ヲ以テ被爲 召候ニ付、當正月二日前供トシテ會、桑二藩兵隊等伏見關門迄差登候處、薩藩人數ヨリ及發砲候ニ付、餘義ナク戰爭ニ及候内、慶喜ヨリ命ヲ下シ、人數引上ケ御届申上候テ、東歸仕候始末、最初大坂表へ引取候モ、會、桑二藩等既ニ歸國被 仰付候ヲ、物騒之折柄故、暫ク留置候モ、一藩兵隊始戰爭ニ及候モ、慶喜ニ於テ聊モ 朝廷へ奉對野心ヲ挾ミ候儀ニハ、無御座候處、豈料ンヤ、右之條々ヲ以テ慶喜反狀顯然、 朝敵タルノ旨 御布告ニ相成、官位被 召上候而已ナラス、既ニ 御征討之 御勅諭モ下リ、夫々御手配モ有之、追々御人數御差向ニ相成候旨、拜承仕驚入候次第、私事ハ徳川氏ニ於テ數百年來恩義モ不淺家柄ニ御座候處、一朝斯ノ如キ大難ニ罹リ候ヲ見及候ハ、誠ニ以テ殘念之至リ、日夜愁苦此事ニ御座候、私底之者、 朝廷御法律之事、忝彼是奉申上候モ恐入候儀ニハ、御座候得共、謹テ大實律ヲ按候ニ、八虐罪之内ニ、謀反ハ國家ヲ危クセント謀ルヲ謂フト相見へ、即平將門忝カ所爲之如キヲ申候哉ニ奉存候、又謀反ハ國ニ背キ、僞ニ從ハント謀ルヲ謂フト相見へ、即チ 皇家ニ背キ、僞賊若クハ外夷ニ奔リ託シ候ハント巧ミ候ヲ申候哉ニテ、彼方隅ニ割據シ、 朝命ヲ不奉者モ叛ニ屬シ候儀ト奉存候、然ル處、此度慶喜カ所爲、前文數ヶ條之迹ヲ以テ熟考仕候ニ、國家ヲ危クセント謀ルノ情實ハ萬々相見へ不申、反狀顯然ト被 仰出候處、乍恐律ノ明文ニ照シ候テハ、適當如何ニテ、冤罪之様ニモ奉存候、又慶喜大坂表ヨリ御届申上、直様東歸仕候、其迹ヲ以テ叛計有之哉之候御疑モ被爲在候ハ、シカナレトモ、戰爭後猶大坂ニ罷在候テハ、益京、攝間ノ騷擾ヲ益シ候ハントノ意ヨリ、直様東歸仕候ノミニテ、他意無之、其儀ハ東歸之後、自己之不束ヨリ近京騷擾ニ至リ候ヲ悔ヒ、宸怒之程深ク恐入、只管恭順謹慎、居城ヲ退キ、東台ニ引籠リ、今度ノ罪過悉皆一身ニ負ヒ、 朝廷へ厚ク御詫申上、譜代諸藩並旗本之士之、有采地者共ヲモ、其意ニ任セ散遣仕候ニテモ、 朝廷へ奉對分毫モ野必ヲ挾ミ不申候處ハ、顯然相分候儀ト奉存候、右之譯合ニ御座候得ハ、慶喜カ不束ヨリ近京騷擾、宸襟ヲ奉惱候罪過ハ、固ヨリ不可辭恐入候次第

ニハ御座候得共、既ニ反ニモ無御座、又叛ニモ無御座、朝敵之汚名ヲ蒙リ候程之情實ハ、萬々無御座候様奉存候、然ルニ冤罪ヲ以テ 御征討ヲ蒙リ、永ク不得洗雪候テハ、私ニ於テモ誠ニ以殘念至極、哀痛悲慟ノ情ニ不忍候仕合、仰願クハ朝廷至大至仁之御心ヲ以テ、慶喜ノ中情深ク御洞察朝敵之名御弃捐被成下、只不束ヨリ近京之地騷擾ヲ致シ、宸襟ヲ奉惱ト申文ノ罪過ヲ以テ、以下五十三字ハ長岡藩戰爭記「蘆野壽著」ヲ以テ之ヲ補フ、御裁斷被下置度、此段味死奉懇願候、諸 朝廷ニ於テ鄙言御聞届被成下、朝敵之名御棄捐被下置候テモ、前條不束云々之罪過ヲ以テ、若多分ノ削封等被 仰付候テハ、其先祖之餘業モ衰替ヲ極候譯、是亦歎ハシキ次第、是ニ就キ更ニ懇願仕度儀御座候、大寶律ヲ按シ候ヒ、六議之内ニ議功之目相見ヘ申候、抑應仁以來天下擾亂ヲ極メ候處、慶喜カ祖家康織豐二氏ニ續キ、皇室ヲ奉翼戴、亂世ヲ撥テ之ヲ正ニ反シ候ヨリ、上下昇平之樂ヲ共ニ仕候事、是迄殆ト三百年、是固ヨリ 皇德之所使然トハ乍申、併家康カ勳績居多ニ御座候事ハ、愚去愚婦モ與リ知ル所、武臣ニテ天下ニ是程之勳績ヲ建候者ハ、前古ヨリ其類モ無御座候次第、サレハ之カ子孫タラン者ハ、假令罪過御座候テモ、大惡逆之外ハ總テ寬典ニ被從候儀、固リ 朝廷ニ於テ御相當之御處置ニテ、天下ノ人誰カ御偏私ト可奉申上、且慶喜事モ最前ヨリ實父贈大納言ノ意ヲ繼キ、尊 王ノ志深ク、中頃之ヲ以奸人之爲ニ中傷セラレ、多年間居、其後 先帝之宸斷ヨリ、故大樹家茂之後見被 仰付、又久々京師在留、輦轂之下ヲ鎮撫シ、前後數ケ年 王事ニ勤勞致シ候上、一昨年將軍職ヲ拜シ候以來、益勵精奮發勤儉ヲ以テ下ヲ率ヒ、海内士民之開化文明ヲ果敢取ラセ、少モ早ク 皇國ヲシテ歐羅巴、亞墨利加諸強國ト並立ノ勢ヲ使爲ント、日夜苦心焦思規畫營爲致シ、既ニ其驗無キニモ非サルハ、衆人ノ所見、是亦無功勞トモ難申哉ニ奉存候、今般不束ノ次第ヨリ 宸怒ヲ奉犯候處ハ、前文ニモ申上候通、恐入候次第ニハ御座候得共、何卒律文議功之意ニ被爲本、遠クハ家康カ無前之勳績被爲 思召出、近クハ慶喜カ是迄ノ功勞ヲモ不被爲捨、格外之御宥恕ヲ以、寬大之御處置被下置度、左候ハ、慶喜ニ於テモ、舊來之臣下ヲ祿養シ、益學藝ヲ興シ、人材ヲ育シ、富強之術ヲ施シ、 皇國ヲ奉保護、此度之罪過ヲモ償ヒ、 御洪恩之萬一ヲモ奉報候事出來可申、如何計リカ可奉感戴哉、方今御政務筋御復古之折柄、刑律等之事モ遠ク 先皇之御成規ニ被爲本、寬仁公平之御主意ヲ以テ、天下後世異議無之様御

施行被遊候儀勿論ト奉拜察候得ハ、右之通、恐ヲモ不願奉哀訴懇願候、吳々モ私底之者、 朝廷御法律御裁斷之事迄モ被是ト奉申上候ハ、誠ニ以僭妄之至、死有餘罪モ深ク奉恐入候得共、前段ニモ申上候通、德川氏ニ於テハ恩義不淺家柄之儀、此節之大難默視仕兼候、寸衷之程御明察御進止被下置候様、偏ニ奉願候、誠恐誠惶稽首再拜。

四月

牧野 駿 河 守

右願書持參可致心得之處、最早越後筋モ日ニ増シ騷擾、既ニ德川氏之脱兵、會藩ノ兵、國境各所ニ於テ交戰、道路塞リ、不得止猶據致シ居候、素ヨリ封土ヲ守リ、人民ヲ安シスル而已之素志故、封内一ノ關門ヲモ設ケス、一ノ番兵ヲモ置カス、只民庶ノ動搖不致様心ヲ盡シ居候處、閏四月下旬ニハ、舊領近邊芋坂、雪峠、小出島、鯨波、柏崎等、追々 御進擊有之、舊會、桑之管下ニ付、兩藩之士度々罷越、出兵應援之儀強テ頼入、前段之趣意ヲ以テ相斷リ候テモ納得致サス、既ニ爭端ヲモ開ラクヘキ程ノ勢ヒニ候ヘトモ、只管靜ニ申宥メ、騷擾ノ中ニ獨立イタシ居候ヘトモ、何分砲聲遠近ニ轟キ、市在人情穩カナラス候ニ付、取締ノ爲メ領分之内へ、左之通右隊差出シ、農商共ニ產業ヲ勵ミ、動搖不可致様ニト、精々説諭イタシ居候、閏四月廿六日、總督河井繼之助、大隊長山本帶刀、軍事掛リ萩原要人銃士隊長大川市左衛門、齊田輒、波多謹之丞、本富寬之丞、銃卒隊長田中稔、田中小文治、渡邊進、牧野八左衛門、八小隊、大砲二門原註、四斤施條砲、ヲ卒シ、長岡ヲ發シ、城南巡邏、遂ニ攝田屋村ニ宿ス、但一小隊人數、隊長、小令、半令、鼓者、銃手三十三人、都合三十六人ナリ、同廿七日、大隊長牧野圖書、軍事掛リ花輪求馬、三間市之進、銃士隊長稻垣林四郎、安田多膳、九里磯大夫、鬼頭六左衛門、銃卒隊長大瀬庄左衛門、長谷川健左衛門、倉澤喜總次、楨三左衛門、八小隊、大砲八門原註、十五寸忽砲一、元込砲二、佛蘭西忽砲二、施條砲三、ヲ卒シ、長岡ヲ發シ、各村巡邏、其六小隊、大砲三門原註、元込砲一、佛蘭西忽砲一、施條砲一、前島二次シ、三間市之進、稻垣林四郎、倉澤喜總治、其二小隊、大砲五門ヲ卒シ、草生津村ニ宿ス、但爾後銃隊各所交代屢有之候得共、煩敷ニ付略ス、同廿八日、藏王村へ銃士隊長武作之丞、銃卒隊長毛利幾右衛門ノ二小隊、大砲三門、下條村へ銃卒隊長佐野與總左衛門、長谷川五郎太夫ノ二小隊、大砲三門ヲ配屯、又銃士隊長倉澤竹右衛門、今泉岡右衛門、銃卒隊長稻垣善右衛門ノ三小隊ハ、市

中近傍ヲ巡邏ス、

此時ニ當リ、舊領一里ノ外、舊會ノ陣屋跡小千谷ト申ス所御宿陣ニ相成、御總督府ノ御役員モ御出張ノ趣相聞候ニ付、五月朔日、用人花輪彦左衛門ヲ以、重役ノ者歎願ノ爲メ、拜謁致シ度之旨相伺候處、宜敷御聞受被下候ニ付、翌二日河井繼之助罷出、願書差上候得共、御披見モ不被下御差戻相成、情實申述、精々及歎願候得共、一切御取合不成下、何ト可致様モ無之、同所出張之藩へ依頼致シ候得共、是亦相斷、時刻移リ同所ニ一泊、翌三日罷歸リ、其段申達、種々議論ヲ盡シ候得共、概ニ昨年騷擾ノ間、上京獻言致シ候テモ、何ノ御沙汰モ不被下シテ、徳川氏御親征之節ハ、兵隊可差出旨被 仰出、猶亦、今度更ニ歎願致シ候テモ、右之次第如何致シ可熟哉ト進退狼狽恐惑致シ候、其節之歎願書寫、

乍恐謹テ奉歎願候、

去卯ノ十月、徳川氏天下之政權被致奉還候節、今日之勢ニ可至ト悲歎ノ餘リ、不顧踈賤不憚忌諱、上京獻言仕、退テ徳川家へモ忠諫仕度段、以書取相伺御聞濟之上、十二月廿八日、京地出立翌廿九日下坂仕候處、城内物騷敷、早速入城モ不相叶、當正月朔日晝頃ニ至リ、漸々重臣ノ者入城届仕候處、彼是混雜其邊ニ至リ兼、二日三日ト相成候テハ、概ニ如何トモ不可致様柄、萬民之艱苦忽チ可生ハ、眼前相分候得共、何ト可仕様モ無之、尤上京前徳川氏政令ノ不治ト、當日ノ形勢ト一ニ執事者へ申出候得共、其段モ届兼、猶又下坂之上、得ト諫爭仕度奉存候處、前件ノ次第柄、只々歎息罷在仕合、歸府以來屢申立モ仕候得共、謂レサル取始末、不忍見聞事而已ニテ致方モ無之、此上ハ封土之人民ヲ撫安仕候ヨリ外無之ト、無據歸邑仕候、當春ヨリ徳川家御追討之 御命令有之候得共、臣トシテ君ヲ諫ルハ可有之、諫爭モ不仕、忘恩義累代之君へ鋒ヲ向ケ候ハ大惡無道、忍テ可爲之哉、方今諸侯伯之所業辨論ヲ不待、日本國之人理棄絶ニ至リ、何ト可申様無之、是等之人々、何程御味方仕候共、格別御爲メニモ相成間敷歟、徳川家ハ前後條理モ不相立、終ニ今日ニ至リ候次第、日夜苦心罷在候得共、諫爭之誠意モ不貫、微力之不可濟處ニ御坐候得ハ、何様憂慮仕候モ致方無之、微小之弊邑ニ御座候得共、人民十萬餘モ有之候得ハ、右之者共ヲシテ職業ヲ勵シ、財用ヲ足シ、四民ヲ安シ、候ヲ以テ、天職ト心掛居候外他事無之、慎テ

天下之治平ヲ相待、乍不及應分ノ御奉公可仕心底ニ御座候、尤表ニ忠義ヲ唱ヒ、内實ハ割據傍觀仕候様ナル儀ハ、他ニ有之候モ可惡處ニテ、其邊ハ申譯仕候迄モ無之、一毫之求ナク誰人ニ有怨ニモアラス、御威力之十一ニ不當ハ、愚昧之者モ相分候儀ニ御座候得共、義理ヲ守リ天職ヲ盡シ滅亡仕候ハ、天命ト明ラメ覺悟モ可極候得共、彼是之強弱ヲ計リ二心ヲ懷キ、不義之名ヲ以テ隣國之兵禍ヲ受、領民ヲ苦メ、滅亡ヲ取り、汚名ヲ後世へ殘シ候テハ申譯モ無之、衷情御洞察被成下候様仕度奉存候、方今海外之諸國、互ニ富強ヲ計リ、嘉永癸丑渡來ヨリノ所業、御承知被爲在候通、申上ル迄モ無之歎息罷在候處、自國之爭亂不止之勢ト相成候テハ、行末之處深ク御案事申上候儀ニ御座候、微小之弊邑ニテモ用ヲ節シ儉ヲ勤メ、兩三年中ニハ海軍用意モ可仕ト一同勉勵仕候處、斯ル形勢ト相成、亂ヲ濟フニ補ナク、徒ラニ領民ヲ苦シメ、農時ヲ妨ケ、疲弊ヲ極メ候テハ可悲事ニ御座候、萬死ヲ犯シ 朝廷へ奉獻言無其詮、徳川氏へ申立候モ無其益、進退失途、只領民ヲ治ルヲ以テ天職トナシ、暫清時ヲ待之心事、宜敷 御憐愍モ被成下候ハ、此儘被差置度、不然ハ民心之動搖大害之所生、幾重ニモ御赦免奉願候、獨一領一國之爲メノミニテ申上候ニハ無之、日本國中協和合力、世界へ無耻之強國ニ被爲成候ハ、天下之幸不過之、事迫リ情切、愚誠之程 御採用ニモ相成候ハ、難有奉存候、恐惶恐懼謹言。

慶應四、辰年 五月

牧野 駿 河 守

即日城南三里之外、舊領妙見村地内榎嶺ト唱へ候要害之地へ、兵隊御繰込有之、長岡 御征討ニ決シ候體ニ相見へ候處、壯年血氣之者等ハ憤怒ニ堪へス、我カ歎キヲ聞カス、我カ境ヲ侵シ、我カ民ヲ驅リ、我カ農事ヲ妨ケ候ハ、果シテ 王之師ニアラス奸賊也ト、一犬虚ヲ吠ヒ萬犬實ヲ傳フ諺ノ如ク、遂ニ一藩不可止之勢ニ立至リ候、是即チ長岡ニテ方向ヲ誤リ、奉抗王師候發端ニ御座候、

五月四日、銃士隊長鬼頭六左衛門ノ一小隊、栖吉村東嶺邊巡邏、翌五日、農兵ヲシテ代ラシム、

同八日、枋尾郷字ナ石嶺へ、鬼頭六左衛門ノ一小隊、大砲三門ヲ出シ、田代村邊へ農兵ヲ出シ巡邏セシム。

ニ應セス、會津及ヒ徳川ノ脱兵等ト俱ニ、官軍ニ抗敵セン事ヲ謀ル、故ヲ以テ小出島ノ兵ヲ合シテ、一舉長岡城ヲ拔カントス、既ニシテ淵邊、杉山等兵ヲ率ヒテ來會ス、此時長岡ノ藩士河井繼之助ナルモノ來テ、高俊ニ面セン事ヲ請フ、高俊、淵邊、杉山ト共ニ河井ヲ一寺ニ延テ之ヲ見ル、河井曰ク、寡君固ヨリ官軍ニ敵スルノ意ナシ、然レトモ藩論紛々未タ一定セス、今俄然、官軍ノ進ムヲ聞カハ必スヤ不測ノ變ヲ生セン、故ニ暫ク進軍ノ猶豫アラシコトヲ乞フ、且ツ曩者ニ北陸道總督ノ命ニ應セサルノ情實ヲ具陳シ、一書ヲ出シテ前罪ヲ謝セン事ヲ請フ、高俊等以爲ラク、進軍ヲ拒ムハ彼備ヲ全クシ、恐ラクハ防戦スルノ策ナラン、故ニ斷然之ヲ容レス、之ニ答フルニ、兵馬ノ間ニ相見ム事ヲ以テス、則チ坐ヲ起ツ、河井流涕哀訴ス、淵邊、杉山等既ニ去ル、高俊モ亦顧ミスシテ歸營ス、其夜又、高俊ノ營門ニ來ルモ再ヒ見ルヲ許サスシテ去ラシム、是ニ於テ官軍、戍兵ヲ増シ守備ヲ嚴ニス。

○上田藩記ニ云、五月二日、越後小千谷表ニテ監軍ヨリ出張之者へ御達、今日長岡家老御用ニテ小千谷表罷越、万一多人數召連、或ハ兵器等相携候ツ、固所ニオキテ差留、其身壹人限相通可申、万一不聞入候節ハ、打拂候テモ不苦候之間、其旨相心得可被申候。

○飯田藩記ニ云、五月七日、於會議所、左之通達有之。
賊城ヲ屠ル分配、

草生津口

一薩州 一小隊 一飯山 一小隊大砲共 一高田 總勢

右大島邊ヨリ草々長岡ニ懸ル、

浦村

一松代 大砲三門 一小隊 一尾州 大砲夫々人員何人

右大砲ヲ以、嚴敷前島、青島へ掛リ、妙見ヨリ進兵ヲ助、虛ヲ見テ前島邊ニ渡、

妙見

一長州 大砲二門 小銃隊 一松代 二小隊 大砲二門 一尾州 一小隊

右奇兵ヲ以直ニ突、

榎峠ヨリ山手

一薩州 一小隊 一上田 二小隊

右村松横枕之賊ニ當、

小出島ヨリ間道

一松代 一小隊 一松本 一小隊

右早ク進ミ山手ニ止リ、大ニ虛勢ヲ張、各時刻ヲ定メ進撃、賊城ヲ拔、但、飯田松代一小隊ハ、御旗御守衛之儀ニ付臨機之事。

復古外記 北陸道戰記 第六 終

元修史局掌記 豊原資清

昭和五年二月廿五日印刷
昭和五年二月八日發行

(復古記 全拾五册 非賣品)

東京帝國大學藏版



東京帝國大學文學部
史科編輯所檢印之章

不許複製

著作權所有

發行者

東京市小石川區竹早町三十二番地
川 俣 馨 一

印刷者

東京市木所區番場町四番地
井 上 源 之 丞

發行所

東京市小石川區竹早町三十二番地

內外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番
電話小石川(85) 三〇五四番
三六九番

凸版印刷株式會社本所分場印刷

終